幼稚園から大学まで美術教育の流れを体感する展覧会 美術と教育 全国リサーチプロジェクト 2019

こんな授業を 受けてみたい!

報告書

幼稚園から大学まで美術教育の流れを体感する展覧会 美術と教育 全国リサーチプロジェクト 2019

こんな授業を受けてみたい!

報告書

ご挨拶

「美術と教育 全国リサーチプロジェクト」は、文化芸術基盤の拡大を目指す東京芸術大学130 周年記念事業として2017 年度にスタートしました。美術教育の意義を、美術に携わる者の中だけに留めず、広く教育に携わる方々と共有することを目的に、教育者や研究者、アーティストが、専門領域の垣根を越えて議論し、そこから生まれた新しい価値を社会に届けることを試みています。

3年目となる今年は「こんな授業を受けてみたい!」と題し、全国の幼稚園から大学までを対象とした授業内容のリサーチ展示に加え、海外の事例や、絵画教室等の活動にも焦点を当てました。

私たちは、美術教育に大きな期待を寄せています。子供たちが、ますます多様化する社会の中で生き抜くためには、異なった文化や価値観を尊重する心と、時として「正解がない課題」や、「答えが複数ある状況」に直面した場合でも、対立せず、対話を通して、新しい選択肢を導き出す創造力が求められます。

このような力は、美術教育だからこそ育むことができます。なぜなら子供たちが表現し、 互いにそれを共有し合うことは、大勢の人の見方や感じ方とは異なっているものでも、そ れを否定することなく、対等な価値観として尊重し合うことの学びであるからです。

いま、学校教育の場でも、多様な文化的背景を持つ子供たちが増えています。それゆえに、多様な意見を尊重し合い、自分が考えたことや思ったことを「自由に発話できる環境」はさらに必要になるでしょう。誰もが「自由に発話できる環境」をつくることは、「誰もが安心してそこに居られる包摂的な社会づくり」にもつながります。

美術教育は、美術をより深く楽しむだけでなく、子供たちがこれからの社会で生きていく上で非常に大切な力を育むと共に、未来の社会をつくるための大きな力となると確信しています。

東京藝術大学 美術学部長 日比野克彦

謝辞

本展に展示されている幼児から大学生までを対象にした授業実践・作品は、教育機関、 関連団体、東京藝術大学杜の会等を通じて全国的にアンケートを実施し、また教育系大学 教授、現場の教員等の推薦を受けた授業実践から選考されました。

本学の展示においては、美術学部各科、大学院各研究室に協力を得て、美術の専門教育 という視点から興味深い授業実践を紹介しております。

当リサーチプロジェクトは今後も長期的に取組み、日本の文化芸術の基盤を拡大することを目指し、多様な美術と教育の実践をリサーチしていく計画です。

本展覧会の開催にあたり、アンケートに協力いただきました教員のみなさま、幼児、児童、生徒、学生のみなさま、美術学部各科、以下の団体の方々に、ご後援とご協力をいただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

〈後援〉 文化庁

〈特別協賛〉 三菱地所株式会社

〈協力〉 東京藝術大学美術学部杜の会/岐阜県美術館

目次

006 シンポジウム

「芸術は、 あらゆる学問とつながり社会を拓いていく」

展示授業・関連イベント紹介

026 幼児

富士見幼稚園/しぜんの国保育園/認定こども園さくら/レイモンド鳥越保育園かぐのみ幼稚園/ベネッセ石神井公園保育園/揖斐幼稚園/ながずみ幼稚園

044 小学生

福島大学附属小学校/佐賀大学教育学部附属小学校/宝仙学園小学校 津田学園小学校/お茶の水女子大学附属小学校/羽村市立羽村東小学校 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校/アトリエ5

064 中学生

弘前大学教育学部附属中学校/秋田大学教育文化学部附属中学校広島大学附属三原中学校 北海道教育大学附属釧路中学校/宇都宮大学教育学部附属中学校/鹿児島大学教育学部附属中学校 鳥取大学附属中学校/秋田大学教育文化学部附属特別支援学校/弘前大学教育学部附属特別支援学校

084 高校生

栃木県立足利高等学校/愛知県立起工業高等学校/秋田公立美術大学附属高等学院 大阪商業大学高等学校/宮城県宮城野高等学校/埼玉県立新座総合技術高等学校 筑波大学附属高等学校/東京都立工芸高等学校/栃木県立足利南高等学校

104 大学生

東京家政大学/國學院大學栃木短期大学×真岡青年会議所/愛知教育大学/富山大学芸術文化学部 新渡戸文化短期大学生活学科児童生活専攻/長岡造形大学/武蔵野大学教育学部/東京学芸大学

122 海外事例

University of Minnesota Duluth (アメリカ合衆国) Ayasota Art Studio, Many Rivers Montessori (アメリカ合衆国) Jugendkunstschule Pankow (ドイツ)

130 東京藝術大学

東京藝術大学×東京大学教育学部/絵画科油画専攻/デザイン科/先端芸術表現科/芸術学科 芸術学専攻美術解剖学研究室/芸術学専攻美術教育研究室/絵画科日本画専攻/建築科/工芸科 美術研究科文化財保存学専攻/彫刻科/美術研究科グローバルアートプラクティス専攻/公開授業

- 180 東京藝術大学美術学部杜の会学生委員会
- 186 学生座談会

「美術の時間はわたしにどんな影響を与えたか」

192 多様な学びの活動

総合地球環境学研究所 東京藝術大学×東京都美術館 Museum Start あいうえの

198 キラキラっとアートプロジェクト

広島県立三原特別支援学校 横浜市立二つ橋高等特別支援学校

- 206 キラキラっとアート交流会
- 216 ラウンドテーブル1 こんな授業をしたい! 美術の先生に必要な、アイディア/知識/実現力
- 224 ラウンドテーブル2 いま、 図工・美術でなにが学べるか? 〜美術教育への期待〜
- 232 特別寄稿 「美術と教育 全国リサーチプロジェクト」に寄せて 一 美術専門と美術教育専門の間 — (金子一夫)
- 235 特別付録 学習指導要領の変遷 一制作: 岐阜県美術館ー



「シンポジウム〕

芸術は、あらゆる学問とつながり 社会を拓いていく

美術教育のあるべき姿を考えることは、 美術と社会の関係性を考えることでもあります。 このシンポジウムでは、登壇者それぞれの立場を踏まえ、 これからの時代に必要な美術教育のビジョンを議論しました。

日程 | 2020年1月29日(水)14:00 -

会場 | 東京藝術大学上野校地 美術学部絵画棟1F石膏室

登壇者



坪田 知広 文化庁 参事官



四四 烅 東京大学芸術創造連携研究機構 副機構長



一條 彰子 東京国立近代美術館 主任研究員



日比野 克彦 東京藝術大学美術学部長

司会



中村 政人

東京藝術大学美術学部 絵画科教授

美術館における教育普及の実践

中村: 議論を始める前に、まずは登壇者の皆さんから話題提供をいただきます。まずは一條さんからお願いします。

一條: 私は東京国立近代美術館の教育普及担当学芸員(エデュケーター)というポジションにおります。教育普及というのは一言で言えば、美術館のリソースをあらゆる人に伝える役割のことです。対象は子どもから大人まで。ビジネスパーソン、外国人も含め、あらゆる方を想定しています。具体的にはギャラリートークという対話鑑賞を行なっています。一方的な解説ではなく、双方向の会話・対話を重視して、ファシリテーターがこれは何に見えますか、何を感じますかと問いかける。参加者が自分の目

で見る、考える、聞く、話す、ことを促し ていきます。

こうした取り組みは世界的にも見られる傾向です。海外の美術館をいくつか視察してきましたが、どこにも共通するポイントは「基本的にギャラリーの中で対話を行うこと」そして「その国の教育施策が反映されていること」最後に「美術の学びがあらゆる分野・教科につながっていること」でした。

アムステルダムにある国立美術館では、レンブラントの『夜警』という有名な絵画のところへ行くと、一番前の見えやすい場所にいつも子ども達が座っています。側にはファシリテーターがいて、子どもに様々な問いかけをしていました。大人や観光客はその後ろから眺めているんですね。教育



担当の方に聞いたら、「王侯貴族の肖像画が主流だった当時、世界に先駆けて市民の集団肖像画を描いたこの『夜警』を全ての人に見せたい」というミッションをかかげているのだそうです。

シドニーにある現代美術館では、小学生の国語の授業が行われていましたし、メルボルンにある国立美術館では高校生の哲学の授業をしているところもあります。オーストラリアには州と国の学習指導要領がそれぞれあるのですが、国の方針の中で、全ての教科で以下の3つに触れるようにとある。一つ目はアジアについて学ぶこと。オーストラリアもアジアの一部なので、その立ち位置を理解することを重視しています。そして二つ目はアボリジニの文化について学ぶこと、三つ目はサステナビリティについて学ぶこと。美術館の対話鑑賞プログラムにも、これが反映されていました。

そして東京国立近代美術館の実践ですが、ビジネスパーソン向けに「ビジネスセンスを鍛えるアート鑑賞ワークショップ」というものを始めています。お一人2万円なのですが、すぐに埋まってしまいました。『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』(光文社新書)で話題の山口周さんと共同でプログラム開発を行いました。なぜ、ビジネスパーソンに対話が有効なのか。山口さんは5つポイントを挙げられています。

「見る力」どんなに論理思考やプレゼン に長けていても見る力が低いと知的成果を 出すことはできない。「感じる力」なぜこうなっているのだろうと新たな問いを立てる力がビジネスには求められている。「言葉にする力」リーダーシップやマネジメントには繊細な言葉の使い方が必要になってくる。「多様性」イノベーションに重要なのは属性ではなく意見が多様であるということ。人の考え方には多様性があるということを皮膚感覚で知ることです。最後に「美意識」これからは役に立つものよりも意味のあるものの方が重要になってくる。こうした視点で、ビジネスパーソンにも美術に触れていただく機会を作ろうということでプログラムに取り組んでおります。

日比野: 日本の美術館って今から30年くらい前に建てられたものが多いんです。 当時の美術館の立ち位置って、街の歴史と 共にあるというよりは、ヨーロッパに行かなくてもルーブルの作品が観れるとか、そういう位置付けだった。そこから、美術館って静かに鑑賞するところでしょという意識がかなり根付いてしまっている。けれども、時代や社会の美術館に対する要請は、先ほどの対話型鑑賞の実践に代表されるように、変わりつつあるというのが現状だと思います。

芸術教育はだれのものか

岡田: 創造的教養についてお話しします。 まず問いとして「総合大学の芸術を専攻し ない学生のための芸術教育は必要か」についてですが、東大でアートセンターを立ち上げる時にも同様の議論がありました。スタンフォードやオックスフォードなどでは芸術系の学部が充実している。一般学生のためにも授業を開講しています。それは多様な価値観やものの見方、創造的な思考力や歴史を捉える力を育てようということだと理解しています。

MITのように芸術は学問の垣根を取り払い新しい発見をもたらすという考えで、アーティストを常駐させているところもありますね。このように先端的な研究や創造的な人材育成をする大学の教育や研究開発においても、アートの発想や方法の重要性が認識されつつあります。

そうした議論を支える一つの概念として「創造的教養(creative fluency)」というものを考えています。これは、創造活動の過程や方法についての体験的理解。もう一つは創造活動と親しむ態度や習慣。これらを

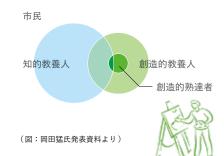
ともに備えた人を、「創造的教養」人と呼 ぼうと考えているわけです。

教養という言葉の本来の意味は「いかに 生きるべきかという問いの答えを持ってい るということである」(阿部謹也)であると。 人間は創造的な動物ですが、チンパンジー は科学やアートをしないわけです。そうす ると、創造的な活動をする人間が、いかに 創造的教養を身につけているかを考えるこ とは非常に重要だろうと思っています。

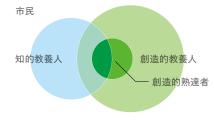
創造的教養を高めると、何がいいのか。 一つは、日常生活の中で、見ることや聞く こと、身体を動かすことなどが楽しくなり、 生活が豊かになる。そして、芸術作品の鑑 賞の仕方が変わり、他者の作品を見ること が楽しくなる。さらに、創造や芸術表現を 育む文化的土壌ができていく。といったこ とが考えられます。

大学の方では東大アートセンター(東京大学芸術創造連携研究機構)を昨年5月に立ち上げました。「アートで知性を拡張し、

創造的教養を持った人の一部が、 創造の専門家の"創造的熟達者"と呼ばれる



こんな社会にしたい



社会の未来をひらく」という考えで始めています。そこで、芸術というものを中心におきまして、人文科学系、社会科学系、自然科学系などの様々な学部と連携していこうと。その中の一環で、芸術を専攻しない大学生のための芸術実技授業(教育学部)を行なっています。

例えば、Eiko&Komaというダンス・ユ ニットの尾竹永子さんというアーティスト による「Delicious Movement」という授 業を開講しています。そこでは原爆をテー マに扱うのですが、個人やグループで原爆 に関する詩や小説を読んだり、ダンス作品 を鑑賞する。それらの作品に触発されて今 度は自分の身体を動かす、というように、 セルフ・キュレーションができる人になる ことを目指す授業です。自分がどう感じ、 何を伝えたいかを考えて発信できるように なること。身体に根ざしたセルフ・キュレ ーションとリベラルアーツの本質部分(自 由人としての教養、人生を折りよく生きるため の知恵)がつながっていくと考えています。 中村: 創造的教養という言葉はとても心 に残りますね。学んだ知識量だけでなく自 分が何かを面白いと思う力そのものに重き をおいている言葉だと思います。次に坪田 さん、お願いします。

学習指導要領の改訂とその後

坪田: 学習指導要領の改訂が行われ、小

学校は今年の4月から全面実施され、中学 校は再来年度から、高校はさらにその後全 面実施されていくというスケジュールにな っています。特に注目されているのは、や はり小学校の英語やプログラミングの教科 化ですが、全体として重要なところは、地 域に開かれ、地域と連携して学びのフィー ルドを広げていくことが強調されているこ とです。同時に不登校や障害のある子ども たちにどのように豊かな学びを届けるかと いうことも盛り込まれています。特に不登 校の子どもたちへの支援が明確に触れらた のは初めてのことです。また(別の場では)、 高校については、文理分けをもうやめよう、 STEAM教育へ、という議論も随分進んで いるところです。

学習指導要領は今後10年変わらないものなのですが、例えばアーティストが学校



に行くとか、美術館との連携を進めるとか、 そういった芸術文化資源を活用した学校の 支援施策はさらに推進していくことは可能 だと思っています。文化庁に美術教育の管 轄を移管したからには、そうした取り組みの 促進はぜひ進めていきたいと考えています。 **日比野**: ティーチングではなくてラーニ ング、解説じゃなくて共に学び合う。生活 の中にあるものや地域性を生かして教育を 行うという今の方向性には、答えが一つで

ング、解説じゃなくて共に学び合う。生活の中にあるものや地域性を生かして教育を行うという今の方向性には、答えが一つではなく様々な事例があるという世界観が前提にあるんだと思います。現場の教員がその考え方や地域のリソースをどう具体的に生かして実践に落とし込んでいくのかというところが、これからのポイントになるだろうと思います。

東京藝大の近年の実践について

日比野: それでは、藝大がどんな取り組みをしているのかをいくつかご紹介します。まずはDOORプロジェクト。福祉に対してどう芸術が関われるのか、というところからスタートした取り組みです。福祉と芸術というテーマ設定で、藝大生と社会人が共に履修できるプログラムを運営しています。福祉の現場に訪れてプログラムを企画したり、様々なゲストの実践を見聞きできるレクチャーがあったり、座学でケア原論について学べるというものです。

そしてTURNプロジェクトは今年でちょ



うど5年目になります。アーティストが福祉施設などに赴いて様々な関わりをしています。藝大はこの中で、海外との連携プログラムを主に行っています。日本の伝統的な手法・工芸などを一つのコミュニケーションツールとして持ち込んで現地の人々と関わるというものです。不思議なことなんですが、どの国に行っても乾いた食物繊維があると揉んだり撚ったりする、似たような技があるんですね。工芸の中にあるそうした普遍性を通じて交流を図ります。

とびらプロジェクトは一番歴史が長いプロジェクトです。東京都美術館と藝大とが連携して、美術館というリソースをどのように社会に拓いていくか。アートコミュニケーター「とびらー」の養成を通じて、先ほど一條さんの発表にもあったような対話型鑑賞なども行っています。

澤学長主導の元始まった、Arts Meet

Scienceプロジェクトもあります。 「芸術と科学に共通するバックグラン ドとは何か? | 「音楽と医学の学問的 融合の発展を目指して | といったテー マで、東大、京大の先生方と一緒に議 論を展開しています。

一條: すごいですね。私も30年近 く前、藝大生でしたが、その時と比べ ると隔世の感があるというか、藝大も 随分と拓かれてきたなという印象です。



学校と地域で補完しあう 学びのあり方

日比野: 授業参観なんか見にいくと、図 工の時間も普通の教室で行ったりするんで すよね。もちろん授業参観だからってこと もあると思うんですが、机の並びや、机の 強度、汚れてもいい部屋の空気感など、や っぱり表現に適した空間としての図工室っ てすごく大事だと思うんです。専仟の先生 がいないと図工室が物置化してしまったり して、それはすごく勿体無いと思う。部屋 の移動っていうのは学びのモードの切り替 えにもなってとても大切じゃないかなと思 いますね。

中村: 岡田さん、東大には汚してよい部 屋がなくて困ってるとおっしゃっていまし たよね。

岡田: そうなんです。ダンスをするため の広い部屋とか、音を出していい部屋とか、 そうした空間が東大にはないんですよね。 それが、芸術の特に実技的なことをしよう とすると困ってしまうところです。

坪田: 実は今、「地域文化倶楽部」とい う什組みを作りたいと思っているんです。 中学校区に一つくらい、拠点を作りたい。学 校の敷地内でも公民館や劇場などを活用し てもいいので、放課後に活動する場所とし て、年齢も混ざって、地域のアーティスト や大学の先生などが来てくれて、年間を通 じてプログラムが走っているイメージです。

これは令和2年度から、まずは研究的な 実践事業を立ち上げていくところです。ま だ運営体制などはさまざまな可能性が考え られる状態ですが、この地域文化倶楽部に よって、場所や人的なリソースなど様々な 理由で学校教育の中ではやり切れない部分 を補い、発展させられるような機能が持た せられないかと思っています。

一條: 「放課後学校 | という名前の取り 組みがフィンランドにあって、それと似た 仕組みですね。学校という枠組みではでき ないことや個人の興味に合わせてさらにや りたいことを伸ばせる環境があるというの は、とても羨ましいなと思っていました。

日比野: 地域の中に専門家がいると。例 えば藝大の卒業生のアーティストや竹細工 の職人やピアノの先生がいる。いろんな人 がいるのだけども、地域と連携して活動を 起こしていくときに気をつけたいのは、そ れによってできた新たなコミュニティが、 その人に依存して「蛸壺化」しないように したいという点です。地域のお祭りとそれ にまつわるコミュニティのように、総合的 なリソースが絡まってくる取り組みにして いけるといいなと思います。

表現することや芸術に対する 苦手意識はどこから来るのか

岡田: 篠田太郎さんが東大で授業してく ださった時に「みんなデッサンをやらない と絵が描けないと思っている。でもいろん な方法があるはずで、デッサンをやってし まったがゆえにできなくなることもあるわ けだから、始まり方はもっと色々あってい いんじゃないか | ということだったんです ね。確かにそうだなと思うのですが、何か 教えるものが定型化されていけばいくほど、 それに合わなくて「苦手」という感覚が生 まれていくと思うのです。特に、美大や藝 大の入試はデッサンの印象が強いですけど



も、そのあたりをどのように考えられます か?

日比野: 訓練しちゃうと、なかなか訓練する前に戻れないんですよね。僕は右利きなので、左でデッサンは全然うまくできない。それであるとき、両手描きをやってみたんです。そうすると無意識に右手がリード役で、左手を制御するんですね。逆に意図的に左手に意識を持っていくと、今度は全体のスピードが落ちてしまう。

また別の時には、粘土をいじる。100個いろんな形を作ると決めてやってみると。立方体、三角錐、球体とか、最初の20個くらいは一気に作れるんですよ。その初めの20個っていうのは、やっぱり右手が直後で作るんです。そこからもうちょっと違う形を求めるとなると、今度は左手が活躍しだす。訓練されている右手と、されていない左手。より自分らしい表現をしようと、実は訓練されていなくて、道具を持たない左手的なものの中の方から生まれてきたりもする。デッサンもそうですが、アートを技巧として捉える右手的なもの表現もある一方で、左手の活躍を探る方法も、もっとあるといいと思うんですよね。

岡田: なるほど、そして順番として必ず しもデッサンのような訓練を通過しないと アーティストになれないということはない ということですよね。

日比野: そう思います。

岡田: やはり芸術や文化への入り口が一つしかなければ、早い段階で合う合わない、

得意や苦手を判断してしまう人が出てくる と思うんですけども、その間口が広がれば、 いろんな形の文化があって、音楽だって楽 譜読めないミュージシャンがたくさんいる ように、多様な関わり方が生まれていくと 思います。

一條: 東京国立近代美術館の鑑賞プログラムに参加した方を見ていると、苦手意識は何歳になっても克服可能なものだとも感じています。教えられるものとして対峙するのは確かに面白くないと思うのですが、自分の体験と言葉から始まる理解というのは、全く違ったものになると思います。



芸術における「 イマジネーション 」 と「 コミュニケーション 」

中村: 「芸術はあらゆる学問と繋がり社会を拓いていく」というイベントタイトルに立ち返りたいと思うのですが、このフレーズは芸術を主語にしていて、そういう意味では芸術にすでに苦手意識があったり、自分ごとになっていない人には関係のないテーマにも思えてしまうと思うんですね。なので同時に「社会はあらゆる学問と繋がり芸術を拓いていく」という言い換えもしてみたい。つまり、芸術自身のあり方が、さまざまな学問との関わりや社会のではないか。この点について、最後に皆さんのお考えをお聞かせください。

岡田: 芸術とは何かということについて。 人類がチンパンジーの祖先と別れた時に生まれた1番の大きな違いは「イマジネーション」だと言われています。チンパンジーは知覚が人間の何倍も優れていて、パッと見て目の前のものの個数が把握できたりするんですね。その力を失った代わりに人間は、目の前に存在しないものや先のことを想像する力が発達したと。これはチンパンジーにはほとんどできないことだと言われています。

芸術はイマジネーションを使って物事を 生み出す。またそれを介してコミュニケー ションする。ちょっと抽象化すると、「シ ンボルの形成」と「コミュニケーション」 が芸術の要素だと思うのです。社会が芸術を開いていくという時には、人々が持っているイマジネーションが展開していく中で新しいものが生まれてくるわけですから、先ほど言いました創造的教養を持った人たちが増えていくことで、芸術のあり方はさらに拓かれていくと思います。

日比野: 藝大にとっても、この「芸術 を拓くしという発想が大切だと思います。 「芸術は~」とだけ話している以上、藝大 の枠組みから出ていけないと思っていま す。岡田先生の「触発」という言葉を、僕 は「関わり」と言うことが多いんですけど も。アートをやる時に、まず「イメージす る力 | があって、それを起点に関わりあっ ていくわけですよね。他者や現象と関わっ ていく時には必ずと言っていいほどイマジ ネーションが必要になってくる。芸術はそ のように、いろんなものをつなぐ性質があ るんじゃないかと思うんですね。アートは 「もの」に宿るのではなくて、関わりの中 にあるんじゃないか。という考え方が、最 近のリレーショナルアートやアートプロジ ェクトなどの潮流にもつながっていると思 います。

大学間の連携に向けて

中村: 具体的に藝大と東大が連携するような、例えば単位互換などが可能になるだけで、少し前進するところもあると思うの



ですが、そのあたりはどうですか?

岡田: 個人的に、ぜひその方向性は推し 進めたいと思っています。もちろんまだ一 枚岩で動ける状態ではありませんが。東大 生が芸術の実技を行う実践は始まっていま すが、同時に藝大生にとっても、特に現代

アートに関しては現代における アートという意味で、今の社会 に対する深い理解は不可欠だと 思います。

坪田: 大学行政の担当でないのであまり言うとあれなんですが…。こうして(藝大と東大が)テーブルを共にしていることも歴史的なイベントだと思いますし、個人的には大賛成です。

個々の先生レベルではこうしてつながっている部分があるわけですし、もっと言えば学生はすでに垣根なくつながっている実態もあるのではないでしょうか。

日比野: 大学間の連携の話にするのか、両大学が共にどこか第3のフィールドに出て行ってコラボレーションするのか。お互いに足りないところを補完しあうという発想はもちろんあるのですが、それだと今度は大学の枠組みから出ていかないので、すでに社会にあるさまざまな課題に対して、共同でチャレンジしていくような取り組みがあってもいいんじゃないかと思います。

一條: 東大と藝大の連携はとてもワクワクしますね。近美にはギャラリーと対話鑑賞ファシリテーターがおりますので、いつでもご活用いただけたらと思います。

中村: 今日は様々な角度で議論ができ、 今後に繋がる示唆も多かったと思います。 最後に、私が最近特に感じることとして 「多様性と共同性」「寛容性と批評性」と いう対比があります。多様な人が集まると



今度は共同性がなくなっていき、ワンチームで力を出していくことが難しくなるというジレンマがある。様々なプロジェクトの現場で感じることです。また、最近はどうしても一人ひとりの寛容性が狭くなって来ていて、相手に忖度して言いたいことを言いにくくなると、批評性も同時に緩くなってくるんですね。

この一見相容れない2つをつなぐ意識を どう持っていくか。寛容に相手のことを受 け止めつつ、この人だったら本音で言える。 はっきりものを伝えるという意識。そういう ものが芸術と社会の「つながり」を考える にあたっても重要になってくると思います。

また、本シンポジウムのテーマである 「芸術は、あらゆる学問とつながり社会 を開いていく」という芸術の可能性には、 「創造的教養」という新たな美術教育の視 座がとても重要であると思いました。 今日はどうもありがとうございました。











富士見幼稚園[茨城県結城市 | 私立]

今日は、これに描こうかな? -園全体がキャンバス☆毎日がアート☆ふじみっ子-

授業を行う教員 | 鮎澤伊江(園長)、小貫絹子(教頭)、鮎澤未来(教論) 対象学年 | 年少 - 年長

実施時期|通年・四季折々 場所|屋内・園庭

授業概要

028

富士見幼稚園(茨城県結城市)では常時、 描画媒体になり得る魅力的な廃材のストック を欠かさない。木の端材、カンナくず、工事 現場で発生した古い襖や障子…子どもの手に かかれば、その廃材は「宝物」に変わる。ま た、園が市から譲り受けている使用済みの選 挙板は、大きなキャンバスとして日常的に活 躍している。床に置き、ある園児がお絵描き を始めると、ひとりまた一人と仲間が集まっ て描画に加わっていく。そうして1枚のキャ ンバスは360度ぐるりと絵で埋まっていく のである。楽しく気ままな、仲間とおしゃ べりしながらの「楽(ラク)ガキ」の時間は、 あくまでも日常生活の自由な遊びの中で展開 される。強いられてするのではなく、あくま でも気の向くまま、子ども主体の自由な創作 を保障する「日々のアート」である。

ねらい・目標

すべてが教材―いわば園全体が子どもたち にとってのキャンバスだ。いつ、どこで、ど こに、何を描いても自由である。子どもが 「表現したい!」と思ったその時に、自由にそ

の支持体を選び取り、好きなように使用する ことの出来る生きた教材でなくてはならない。

入園して1枚の紙に「これを描きなさい」 という指導ではなく、まずは描くことが「楽 しい」と思えるような描画体験の時間を充分 に持つこと。例えば、大きな選挙板キャンバ スにみんなで描くことによって、上手い・下手 が目立つことなく、生活遊びの中で意欲的に 描画に取り組むことができる。また、見よう 見真似でお互いに影響し合って創造的な技能 も伸びていくと考えている。仕上がると1枚 の大きな作品になるため、達成感も得られる。

活動

選挙掲示板:使用済みの選挙板を加工した キャンバスは、描画にそのまま使用したり、 寝転がって人型を取りクレヨンで等身大の友 だちを描いたり、ある時はペンキを塗り立体 的に組み立てて遊べる小屋に仕立てたりと、 多様な活用事例が日々生まれている。園児た ちは切り落とされた板のかけらにさえもクレ ヨンで色を付けたりして楽しみ、形から発想 し、意味づけたり並べて装飾したりする「見 立て」の力を発揮していた。

段ボール:箱を丸ごと一つ解体したキャン

バスには、好きな色のクレヨンを使って思い 切り描画する。画用紙と違い強度があるため カー杯スクリブル出来る。バナナの梱包され ていた箱などは所々穴も開いており、園児の 好奇心を刺激する。

木の端材:地域の工場から日常的に木端を 譲り受けており、金槌や釘を使った本格的な 木工遊びに使用することもあれば、描画の支 持体として活躍することも多い。クレヨンで 思い思いの色や模様が描かれたカラフルな木 の端材は、線路や電車として遊びに登場した り、園の倉庫や小屋の壁に嵌め込んだりして 飾っている。

作品の評価・フィードバックの仕方

四つ切・八つ切などの枠に制限されない「は みだしても良い | 選挙板キャンバスのような 大きな画面に、自分の描きたいものを、友だち 同士でおしゃべりしながら緊張せずに描画で きるという点において、上手い・下手は関係な く、楽しさと達成感を味わうことができてい る。1枚の画用紙に、テーマを与えられて描く 以前に、まずは、ここが大切な出発点であろう。

成果と課題

失敗をこわがらないで、楽しむ美術教育を 求めて43年―苦手意識を持つことなく、子 どもたち全員が「気持ちよく描ける」という 点を何よりも大切にしている。日々見ている ものがいつかどこかで出てくることもあると 考え「鑑賞」の重要性にも注視し、園内に留 まらず古典から現代美術まで、今後も幅広い 出会いの機会を設けていきたい。





小学生

中学生

しぜんの国保育園[東京都 | 私立]

自分だけの洋服を作る「ファッションの本質を知っている子どもたち」

授業を行う教員 | 柳澤祐希(しぜんの国保育士)、字野玲子(しぜんの国保育士) 飛田正浩(spoken words project)、三橋奈穂子(spoken words project) 対象学年|年長

実施時期 | 2019年 場所 | 屋内(美術·図工室)

授業概要

園内にアトリエがあり、3歳から5歳児ま での子どもたちが主に日常の中で使用する。 学年単位での活動としては、年長児を対象 に、ファッションブランド spoken words project による洋服作りに今年度は取り組ん でいる。ファッションデザインのコラージュ、 テンタック(カッティングシート)を使った洋 服作り、シルクスクリーンなどプロセスを大 事に長期プロジェクトとして取り組んでいる。

ねらい・目標

子どもたちにとって表現、芸術が身近な暮 らしの中にあるものであることに留意してい る。心が動き、手が動くその心の有り様を大 人は注意深くみて、素材、環境を整える。ま た、継続して物作りができるような環境を大 切にしている。その中で、洋服作りをしてい る子どもたちの姿から派生して、今回はプロ のファッションデザイナーの方に来てもらい、 月に1度大人と子どもの相互の関係性から生 まれるファッション、洋服作りを深めること にした。子どもたちの興味関心から、その道 のプロフェッショナルが園に来て、相互にと

ってのクリエイティビティが刺激しあえるこ とを目標にしている。

活動

遊びの中で、子どもたちが作ってみたいも のを継続的に作り始めるケースと、ワークシ ョップ形式でテーマや道具の枠があるものに 分かれている。今回は、昨年に引き続きお洋 服、おしゃれが好きな子どもたちを発端に洋 服作りを深めている。今年度は、プロのファ ッションデザイナーである、spoken words projectをお呼びして、ファッションをテー マに月1回のペースでワークショップを行な っている。紙ベースのデザイン画から、布と カッティングシートのワークに移行し、先日 はシルクスクリーンでTシャツを制作。最終 的には一人ひとりのデザイン画から、オリジ ナルの洋服を作る予定。

作品の評価・フィードバックの仕方

ワークショップの最後には、サークルにな って一人ひとりの作品の発表をしている。ま た大人の評価が、完成品の精度に寄らないよ う、作品に関するエピソードやプロセスをま とめたドキュメンテーションを制作し、子ど もたち、家庭とも分かち合えるようにしてい る。最終的には、ファッションショー、もし くは自分で着た姿を写真撮影し、展示会を開 こうと予定している。

成果と課題

制作中に、自分が作ったものをみんなに 伝え、またそれをお互いに「いいね」「かわ いいね」などと言い合える関係性がとても豊 かだと感じている。子どもたちの中で、不思 議とやらされている感覚の子が一人もいな い。それは、大人が無理をして「教え導きた い」「全員にやらせたい」という圧力をかけ ず、ファッションのプロの方と一緒に作るこ とによって、その制作の現場の雰囲気がよく なり自ずとやってみたいと思えるようになる からである。また特別な配慮を必要としてい る子どもたちもクラスの中ではおり、「みん ながちがう一がクラスの中で前提となってい る。その中で、大人の感性では届かないよう な色彩、デザインに溢れた発想が生まれてい る。また、表現の世界の中で、互いの存在を 感じあい、影響し合い、かかわることで感性 の豊かなファッションが生まれている。







認定こども園さくら「栃木県 | 私立]

宇宙 —子どもたちの対話から始まる、Learning Journey Project 活動—

授業を行う教員 | 堀 昌浩(園長) 対象学年|年長

実施時期 | 2018年 - 現在 場所|屋内・園庭

授業概要

032

認定こども園さくらでは、主に3歳以上の 幼児を対象として10時~15時までの時間帯 を「子どもたちの対話から始まる、Learning Journey Project活動」と称し、興味関心を持 ったことを自分たちで探究し、自ら表現したり 遊びに取り入れたりする活動を見守っている。

本活動は、子どもたちの宇宙に対する興 味・関心から始まり、惑星や望遠鏡、星座、 宇宙博物館などを作り上げていく過程を楽し む「連続性」のある造形表現である。

ねらい・目標

興味・関心を持ったものごとを自分たちの 力で調べ、掘り下げていき、友達同士で表現 する過程を楽しんだりすることができる。そ して疑問を持ったことに対しては、実際にそ の現場へ出向き、見たり聞いたりして実感と して掴み取る。このような体験の積み重ねか ら、思考力や決断力の基礎、豊かな表現力な どが培われることをねらいとしている。

活動

地球や宇宙の本を読んで「惑星」に興味を

持った園児たち。ある日、宇宙を見るための 望遠鏡作りが始まった。保育士が壁に黒のビ ニール袋と地球を一つ貼って置くと、「星や 惑星をつくって貼りたい!」と、画用紙とク レヨンを使って作り始めた。

例えば、山崎直子さん (宇宙飛行士) が宇宙 にカボチャの種を持って行ったことを知り、 子どもたちは"宇宙に行って帰ってきたカボ チャの種"に興味を持ち始める。そこで、種を 植えたいということでパンフレットを見ながら 画用紙にクレヨンで文字と絵をかいて、「こ うしよう! | と自分たちで考え、土を掘りポ リポットに入れ、その中に1粒ずつ種を撒く。

また、夏の南の星座に再び興味を持ち、作 った星をぺたぺたと貼り出す。前回までは本 で見たままに貼っていたのに対し、今度は星 の大きさに注目し大きさを選んで貼っている。 星座が完成すると喜び、「次は上の惑星もつ くる!!」と、活動が展開していく。

「では、実際にどうやって星を見るの?」と、 クラスで話し合いが始まる。多様な意見が飛 び交う中、皆で一番良い方法を考える。

それから、自分たちで作った望遠鏡で、壁 に貼られた星座や惑星などを眺めて楽しみ、 本物の望遠鏡で星を見るために近隣の児童館 へ足を運んだ。

宇宙では人が浮いていられるという点に

注目した園児が、「地球でも浮いていられる のでは?」と仲間に投げかける。すると、ト ランポリンや"雲のお部屋"(※雲の壁紙がデ ザインされたホール) なら飛べるのではないか という意見が出て、実際にやってみる。結果、 飛べないということがわかり、ロケットに乗 らなければ飛べないとの結論に至る。

段ボールで、人が入れるくらいの大きさの ロケットを作る園児たち。iPadで本物の口 ケットの打ち上がる動画を見た後、園庭にそ のロケットを出して、実際に飛ばそうと試み 始める。

ペットボトルロケットで遊び、また、さら に大きな段ボールのロケット作りにも挑戦し、 絵の具で色を塗ったり、国旗や文字も入れた りして完成させた。フィンガーペイントでオ ーロラも作った。

宇宙に関するものを作っては飾り、ついに 「宇宙博物館」が出来上がる。お客さんが来る と楽しそうに案内する園児たちの姿が見られた。

段ボールロケット発射予定日を目前にして、 「明日の今頃は宇宙へ行っていて、帰って来 られないかも知れないから、今日はおじいち ゃんおばあちゃんとも一緒に晩御飯を食べて おきたい」と、ぽろぽろ涙を流す園児の姿は、 プロジェクトに関わる子どもたちの「本気 度 | を痛感させられる出来事でもあった。

ある日、段ボールロケットが飛ばなかった 原因が「エンジン」が無かったからであると いう結論に至る。

さらに宇宙への興味・関心は深まり、ロケッ トのエンジンが展示してあるという国立科学 博物館へ足を運ぶ展開となった。そこで新た な刺激を受けた子どもたちは、現在も継続し てプラネタリウムや惑星づくりに励んでいる。

成果と課題

本活動を通して「10の姿」の視点から、 次の事項がおおむね育成された。

イ 自立心、ウ 協同性、エ 道徳性・規範 意識の芽生え、オ. 社会生活との関わり、カ. 思考力の芽生え、ク. 数量や図形、標識や文 字などへの関心・感覚、ケ、言葉による伝え 合い、コ 豊かな感性と表現

※『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』幼児期 の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿) 内閣府・ 文部科学省・厚牛労働省





キラキラ

社会福祉法人檸檬会 レイモンド鳥越保育園 [東京都 | 私立]

しゃしんのもり 写真の撮影~写真と自然物を合わせた造形

実施時期 | 2018年11月 授業を行う教員 | 根本京子 CCDpj(チャイルドコミュニケーションデザインプロジェクト)メンバー、 場所|屋内・屋外 和田隆太(4・5歳児クラス担任) 対象学年 | 年中 - 年長

授業概要

遠足で、使い捨てカメラを使い子どもたち が写真撮影をした。

その写真を現像し、遠足で拾ってきた枝や どんぐり、落ち葉などの自然物と組み合わせ フレームのようなものを作る。

ねらい・目標

合わせ作ることを楽しむ。

活動

遠足時に、子どもたちが使い捨てカメラ を使って写真撮影をする活動を取り入れた。 (これまでも、子どもたちがデジカメで写真を撮があった。 る活動は行っていた。)後日現像し、自分で撮 影した写真の中から好きなものを選ぶ。

遠足の時に拾ってきた枝やどんぐりなどの 自然物と選んだ写真を組み合わせて、紐で結 んだり、ボンドやグルーガンで接着をしてフ ォトフレームのようなものを作った。

出来上がったものは園内に飾り、森の雰囲 気を演出した。

作品の評価・フィードバックの仕方

出来上がった時に、好きなポイントや、エ 夫したところ、難しかったところなどの話を 聞き、こちらの感じた印象や素敵だと思った ところなどを伝えた。

成果と課題

撮った写真はすぐに見られて、気軽に何枚 素材の面白さを味わいながら、写真と組みでも撮影ができるのが当たり前の子どもたち。 使い捨てカメラは、その場で写真を見ること ができない不思議、どんなふうにできてくる のかというワクワク感があったようだ。

> 出来上がったフォトフレームを園内に飾り、 園内に遠足で行った公園の森のような雰囲気 が演出された。異素材を組み合わせる面白さ

このクラスでは初めてグルーガンを使い、 新しい道具にも触れる機会となった。







かぐのみ幼稚園[神奈川県 | 私立]

子どもをまん中に みんなでアート&サイエンス ~海洋プラごみを保護者・保育者・地域のみんなで学びあう~

授業を行う教員 | --対象学年 | 年中 - 年長 実施年・時期 | 2018年7月-11月 場所 | 屋内・屋外 使用教室 | 屋外・その他

授業概要

当園園児は、日々山・里・川・海で遊ぶ中 で生まれる「なぜだろう?不思議だな!もっ と知りたい!」を様々な領域で表現していま す。昨年度は海に入って遊んだり、そこで拾 った貝や石を絵本や図鑑で調べたりした経験 から海に関心をもち、葉山近代美術館やしお さい博物館で海に関する展示を鑑賞しました。 海や魚の知識を深めたころ、父母の会から 海洋プラスチックごみの問題を保育に取り入

ねらい・目標

育の中での総合的活動へとつなげました。

- ① 運動会での野外劇のお話を作り、造形的、 身体的表現へ広げる
- ②大きな帆布に描かれた海の生き物に、収 ゃにして」、と怒り、雷を落としてしまいます。 集したプラごみをみんなでアートする

活動

1.実体験からのお話づくり:年長児を中心に、 えました。この芽が成長し、大きなひとつの木 海で遊び、海について学び、感じ、考えたこ

とからお話を作っていきます。それをもとに、 運動会で全園児参加の野外劇行います。その 際、年長児がロール紙に絵の具でストーリー を共同で描いたものを屋外に展示します。

野外劇のお話 ~ 地球はみんなのものなんだ~

ここは美しい自然が広がる山の中です。山 には、虫やお花、こびとたちが住んでいます。 今日も元気にこびとたちが遊んでいました。山 ではぽたぽたと水が垂れています。その水は やがて小川となり、川となり、海にたどり着き れたいとの相談を受け、実践にうつしました。ました。海では、イルカやくらげなどたくさん の海の生き物が仲よくくらしています。ある日 のこと、遠くの海から、なにやら黒いものが こちらに押し寄せてきます。ドロドロした黒 様々な海に関する体験を以下の2点で、保 いものがすべて山も海も町も覆ってしまいま した。その正体はなんと、ゴミの怪物でした。 この様子を天の上から火の神様が見ていまし た。天の火の神様は「地球をこんなめちゃめち 雷は炎となり、すべてを燃やし、ゴミの怪物を やっつけてくれましたが、地球は焼け野原とな り、何もなくなってしまいました。しかし、そ こに恵の雨が降り、炎も消え、一本の芽が生 となりました。この木がこれからの命をつない

でいくことでしょう。

2.海洋プラごみ問題について

保護者・保育者・地域の皆で学ぶ:

- ①保育中や、夏休みに親子が集めた海洋プ ラごみを、保護者が洗って色別などに仕 分けてくださいました。
- ②画家のお父さんに大きな帆布に海の生き物 を描いてもらい、そこに色とりどりのプラ ごみを貼りつけ、クレヨンで加筆しました。
- ③これらの作品を園舎内や、当園創立70周年 で公共施設に展示し、幼稚園の家族や関係 者の皆様、地域の方々に見ていただきました。



作品の評価・フィードバックの仕方

子ども達の興味を保育の内容に生かし、子 どもの生き生きとした表現へとつながってい るか、上手い下手ではなく、作品から子供の 躍動を感じ取れるかが大事であると考えてい ます。今回の活動において子ども一人ひとり の表現が確かにあったと受け止めています。

また、プラごみの取り組みで、保護者、地 域の方々、専門家などとつながり、園だけで はできないパワーある作品が生まれました。

成果と課題

日頃自然と触れ合っていることで海や生き 物たちを心配する気持ちが生まれ、どの子も 環境問題を真剣に考えるようになりました。

そして、子ども達が感じて考えたことが、 みんなの手によって表現され、70周年事業 で内外に発信できたことで、親子や地域の 方々へ伝わったのではないかと思います。



高校生

大学生

藝大

杜の会

多様な学び

ベネッセ石神井公園保育園[東京都 | 私立] ゴミからつくる

授業を行う教員 | 浅羽聡美(アトリエ ル・マタン) 対象学年|年長

実施年・時期 | 2019年9月 場所|屋内

授業概要

なモノから、自分の感覚を拠り所にモノと対 峙する。また、完成形のイメージを持つ必要も、 もに介入しないことにより、本来的な遊びと "なにからしく"つくる必要もない中で、今、こ の瞬間に、モノと自分が関わることで湧き上 がる感覚に素直に反応しながら造形していく。

ねらい・目標

自由に描いたりつくったりすることに自信 を失っている子は少なくない。そこで、これ まで子どもたちが触れてきたであろう上手な 作品とは違う表現を提案する。そういう表現 もあるんだ、そういう表現でもいいんだとい う表現の振れ幅の提示により、言われた通り につくるのではなく、上手に描くのでもなく、 自分がやってみたいこと、面白いなあと思う こと、この感じがいいなあと思うことを追求 しやすくする。

活動

認する。表現において間違いはなく、また、正

解もないこと。危険でない限り、極力、制限し ないこと。何個つくってもよく、早く終わって 「ゴミ」をキーワードに「廃材」以上に雑多 別の遊びをしてもよいこと。活動の終わりを 決めないこと。そうして、大人が極力、子ど いえる表現が生まれる状況をつくる。また、 保護者にも協力してもらい、ゴミ(小さめの、 衛生上問題のないもの)を集める。

> **導入:**「誰も見たことのない、世界にひと つだけのカタチをつくろう」といった言葉を 用いて、完成形のイメージを持つ必要も、"な にからしく"つくる必要もないことを伝え る。素材の色や形、質感との出会いから直感的、 衝動的に、既存の"なにか"に拠ることなく、 "私の面白い"を追求していくことを提案する。

制作: すべての素材、道具を子どもたちが 自由に取れる場所に置いておく。素材は均等 には分けない。自分のタイミングで、自分が 必要な量を持っていく。途中で追加するのも 構わない。絵具を使わなくてもよく、また、 絵具だけで描いてもよい。1枚のボードの上 でじっくり表現しても、即興的に、何枚もの ボードを使った表現を試みてもよい。ボード を使わなくてもよい。実験、冒険できるよう **事前:**担任保育者と、以下の事項ついて確 に素材は多めに用意し、使う量に制限を加え ない。異素材を使う場合、接着が難しくなる

が、木工用ボンドに軽量紙粘土を混ぜたもの を使うことで、ボンドの粘度を高くし、硬化 を待たずに素材をキープすることが容易にな り、それに埋め込んでしまうことで素材を選 ばず、接着することができる。ねっとりとし た粘土の感触も心地よく、接着という作業を 超え、それ自体が魅力的な造形素材にもなる。

作品の評価・フィードバックの仕方

制作中から作品に対して、ほめるのではな く、それぞれの表現に共感を持って、そこか ら感じたことを子ども用の言葉にせずに伝え ている。完成した作品は、天地、壁掛け、床 置きかを確認し、その日のうちに玄関前の壁 面に展示している。自然と作品を介して、子 どもたち同士、保育士と子ども、保護者と子 どもの対話が生まれている。保護者向けに展 示作品と並べて、子どもたちの制作の様子と ともに、こうした表現の意義を記した文章を 掲示することで、うまい下手、"なにからし く"ではない、個々の造形のユニークさに目 が向くことを促している。

成果と課題

当日の午後、園長、主任、担任保育者とと もに振り返りを行う。午前中の子どもたちの 姿や保育者の内面で起きたことを、できるだ け解釈を加えずに出し合い、それがなぜ起き たのかを想像し合う。そこで得られる気付き を、日々の保育につなげていこうとすること が、この実践の最終的な目的でもある。こう した実践を年間4~5回のペースで持つこと によって、保育士の子どもの見方が変わった、 これまでも子どもの気持ちを尊重しようとし てきたが、大人がコントロールしていたこと も多かったことに気付き、"待つ"ようにな った。また、普段からさまざまな素材を置く ようになったことで、子どもたちは、自由に 素材を選び、モノづくりをし、自分で何でも できるのだという意識になってきているとい うことであった。





学校法人 佐木学園 揖斐幼稚園 [岐阜県 | 私立]

ふね・うみ 「はっけんとぼうけん」プロジェクト 2015

授業を行う教員 | 林 武史(東京藝術大学美術学部彫刻科教授) 対象学年 | -- 実施年・時期 | 2015年度 場所 | --

揖斐幼稚園とは

揖斐幼稚園は、アーティストと幼児教育・保育実践研究者によって1978年に創立された。 創立の精神は「はっけんとぼうけん」である。 それは、子どもが自ら環境にかかわり、何だろう、どうしてだろう、不思議だな、試してみよう、調べてみようとすることである。揖斐幼稚園では、このような園生活を保障し実現するために、アート・自然・ことば・からだをカリキュラムの柱として教育・保育を目指している。生命・科学の原点である自然を直接体験できる豊かな環境をつくり、また様々な分野の

専門家と共にとことん遊ぶ中でたくさんの不

思議やその人の世界に出会う本物体験をカリ

キュラムに位置づけている。

http://www.ibi-youchien.ed.jp

揖斐幼稚園2015年度 カリキュラムテーマ 「 ふね・うみ _|

まず、林氏から「ふね」というテーマが提案された。ボート、漁船、潜水艇、宇宙船、飛行船、あらゆる冒険に欠かせない「ふね」。加えて理事長と園長が「海」を提案した。生命の源であり未知の生き物が満ちている「海」。こうして、「ふね・うみ」というテーマが生まれた。

幼稚園生活の展開

担任保育者と子どもが具体的な遊びや活動をつくり出すことで、カリキュラムテーマは子どもたちの生活に根付き、子ども達が自分たちの世界を生み出す素材となっていく。そのプロセスにおいて子どもの遊びを支え展開させる具体的な方法や内容を、担任保育者とともに佐木玲水が考え、指導・援助した。4月~8月は子ども達がクラスで展開する基地遊びやアーティストと子ども達がともに創作するワークショップなどにおいて、アーティストの発想と各クラスで展開される具体的内容が相互にかかわりを持って展開していった。

9月~3月においては、基地遊びはオリジナルの物語として子どもたちで共有され、下記の活動を通して、各クラスで共有する世界作りや、個々の子どもの世界の表現活動へと展開していった。

2015年4-8月

「ふね・うみ」という年間カリキュラムを軸に、図鑑や絵本など活動が仕掛けられた。 その結果、つきぐみはダイオウイカに関心を持ち、それを食べるマッコウクジラとの物語が展開し始める。ほしぐみでは、沈没船が多いバミューダ海域に関心を持ち、龍宮城があるのではないかという説が流れ始め、うみぐ

みでは、世界の港の様子やクルーズ船の船旅、 船の構造に関心を持ち始める。

2015年9月-2016年3月

4月から7月の間に生まれた各クラスの関 心は、林武史アーティストチームと制作した 船によってより具体的な探検の物語へと発展 し、9月には紙芝居として表現された。やが て10月には登場人物になりきり、衣装作り や歌遊びが流行り、オリジナルの歌も石川泰 氏と作曲した。それが、舞台での表現遊び 「はっけんとぼうけんPart 1 ~ステージで 遊ぶ~」(11月28日)となる。各クラスの舞 台の題名は、「つきぐみしんかいのせかいへ ~はじめてのであい、はじめてのなかま~」、 「ほしぐみしんかいたんけん~りゅうぐうじ ょうにゆきたいな~」、「うみぐみうみさん ごうにのってたからさがし~であうことのた いせつさ~ | であった。10月から2月にかけ て、子ども達は自分のテーマを探りつつ大き な画面に取り組んだ。また、物語の登場人物 の人形を立体で3期に制作するなどした。こ れらの作品は、「はっけんとぼうけん Part 2 ~画面で遊ぶ~」(2月13日)となった。この 日、揖斐幼稚園は「はっけんとぼうけん美術 館」と化した。

林武史ワークショップの展開(平成27年)

平成27年1月28日

第1回話し合い: 林武史氏、理事長、園長とともに、ワークショップの大きな方針が話し合われた。「ふね」という提案が林氏からこの時になされた。

同年3月21日

第2回話し合い:林氏、理事長、園長とと

もに、ワークショップに関するコンセプトの 確認が行われた。

同年4月20日

出会い: 林武史氏、および林武史アーティストチーム(曽根麻衣・根本祐社・矢田遊也)が子どもたちと出会う。



同年6月8日

第1回林武史ワークショップ 船の絵を描く: 子ども達が個々に4つ切りの画用紙に、それぞれの船のイメージを描く。潜水艇深海6500、ダイオウイカの探査船、豪華客船などが描かれる。子ども達は自分たちの作品を持って互いに見せ合い、林氏からも、それぞれの作品の面白さについて具体的にコメントがある。

同年7月13日

第2回林武史ワークショップ 基地の船づ くり:各保育室にて日々遊んでいる遊びの基 地の船づくりを林氏とともに行う。

同年8月5.6.7日

第3回林武史ワークショップ 船をつくる: 子ども達が思い描いた船と、それを受けてア ーティストチームが編み出した船のイメージ

ーティストチームが編み出した船のイメージが一体となり、相互にやりとりしながら、潜水艇トライトン(つき)、深海6500(ほし)、うみさん号(うみ)がつくられた。

学校法人 けやきの木学園 ながずみ幼稚園[福岡県 | 私立] 制作「たんぽぽだんのきょうりゅうたんけん」

授業を行う教員 | 髙崎あかり(たんぽぽ組担任) 主な助手・スタッフ | 金子夏代(園長) 対象学年|年長

実施時期 | 2017年11月中旬 - 12月中旬 1ヶ月間の保育活動(毎日) 場所 屋内(教室)

授業概要

の世界に興味を持った園児が、ごっこ遊びを 展開しながら恐竜の世界を保育室いっぱいに 作り上げる。年長たんぽぽ組23人1人ずつの 恐竜の個人製作とその世界づくりを協同で作 り上げ、造形展として展示公開する。

ねらい・目標

- 想像をふくらませ主体的に遊びを創造する
- いろいろな材料を工夫して等身大の恐竜を つくる・協力しあって恐竜の世界を創り上 げる・大掛かりな木工制作を遊び込みなが ら創り上げる。

活動

公園の恐竜滑り台の穴から恐竜時代にタイ ムスリップした絵本の読み聞かせを聞いた子 どもたちは、自分たちも恐竜に変身して遊 び、図鑑なども参考にして自分のお気に入り の恐竜を作ることになった。段ボールに顔の 形、次に身体の形を描いて切り出し、顔を包 装紙や身近な材料で立体的に作り、身体にも

新聞紙を丸め、その上から米袋の紙を貼り立 体的に作った。用意された色々な身近な廃材 絵本の読み聞かせをきっかけとして、恐竜 などを利用して、10日間位かけて、等身大 の恐竜を作り上げた。どうにか動かしたいと 考え合って、プルトップと針金で割りピンを 考え出し、手で動かしながら遊んだ。その後、 自分たちもタイムスリップ出来るように「恐 竜滑り台を作りたい」と、本を参考に設計図 を書き、用意された木箱30個ほどを組み立 て、製材所からもらい受けた杉板の端材を組 み立てた木箱に釘で打ち付ける作業を(ノコ ギリで切る作業も)10日程行った。大きな首 は天井から吊り下げて動かそうという先生の アイデアのもとに、首や頭を繋ぎ、滑車を使 いみんなで吊り上げた。その頃から、恐竜を 造形展でお母さんや他のクラスの子どもたち に見てもらえると知った子どもたちは、大人 も乗れるように補強したり小さい子も遊べる 様にと危険がないように釘打ちしたりヤスリ がけをしたりして、タイムトンネルとして整 え、入口に「きょうりゅう時代 | の看板を立 てて完成させた。造形展で恐竜を沢山のお客 様に見てもらい、自分たちもしっかり遊び込 んだ子どもたちは、消化したのか普段の生活 に戻る事も意識し、それを少しずつ崩してい った。1ヶ月後に、思い出としてA3の画用

成果と課題

本活動は、子どもたちの生活の中に根付い たものとして取り組んでいる。子どもたちは 物語の世界を様々な活動や表現でもって深め ながら体験し、自分や仲間と主体的に作り上 げたことによる喜びや達成感も生まれている。 一連の過程で材料の扱いや表現方法、恐竜へ の興味を深め、図鑑で調べたり、工夫するこ となどの学びを深めた。友だちと協力し合っ て作り上げる楽しさを体験し、仲間意識を強 めた。こうした総合的な取り組みを通して自 分自身の中に自己肯定感や自己認識が育って いる。課題としては、こうした生活の中に根 付いた活動を行う保育者の継続的な力量形成 への取り組みが必要であることである。

紙に自分なりの恐竜の世界を絵に描いた。









福島大学附属小学校[福島県|国立] 「 けずって わくわく 」

授業を行う教員 | 高玉宏太郎(教諭) 対象学年 | 小学1年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年6月 単位数(単位時間) | 2時間 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

乾燥した土粘土を金網で削り、粉にしたも のを材料として扱う。状態の異なる土粘土を 見たり、実際に手で触れたりして感じたこと を生かしながら、それを使ってどのような活 動ができるかを考え、思い思いの活動を展開 する造形遊びである。

ねらい・目標

ねらい: 乾燥した土粘土の塊を削って粉に し、手で触れた感触を味わいながら、集めた り、指で形を描いたりする活動を通して、自 分ならではの表し方を楽しむことができる。

子どもたちは、第1学年の生活科の学習で 泥遊びを経験し、手のひらや足の裏で砂の感 触を感じてきた。そうした経験を生かしなが ら、体全体の感覚を使って材料・素材の面白 さ、活動の楽しさを味わう。「鑑賞」するこ とを大切にしたい。

活動

1.導入:材料と出合い、本時の問いをもつ。 第1学年の子どもたちが、材料の面白さを

手で触れて感じることができるように、乾 燥した土粘土を材料とする。削る様子を演 示し、粉に触れて感じたこと話す子どもの 言葉を広げることで、その粉で遊びたいと いう思いを膨らませることができるように する。粉の状態ではなく、塊の状態で手渡 し、削る行為を経て粉になる体験をする過 程を設定することで、固くごつごつとした 手触りから粉のさらさらとした手触りへと 変化する面白さを味わうことができるよう にする。

2.展開:材料に働きかけ、自分のやりたいこ とを試す。形や色といった造形的な視点で 自分たちの活動の跡を見ることができるよ うに、白い土粘土と色の対比が強く出る濃 い色のプラスチック段ボールを敷いた上で 活動を行う。それにより、粉の量の違いで 色の濃淡ができたり、指を動かす速さや力 加減によってできた跡の感じに違いが生ま れたりすることに気付くことができるよう にする。

場の設定としては、グループで1枚のプ ラスチック段ボールを共有する形にし、友 だちの気付きや取り組みが視界に入りやす いようにする。それにより見方・考え方を 働かせた鑑賞を促し、気付いたことを自分 の表現や活動に生かしていくことができる ようにする。

3.振り返り:自分や友だちの活動を振り返 る。 絶えず変化する表現や活動をデジタ ルカメラで記録し、振り返りに生かすこと ができるようにする。記録写真を基に、活動 やその変化を振り返ることで、自分や友だ ちの活動の面白さや楽しさに気付くことが できるようにする。

作品の評価・フィードバックの仕方

活動が流動的で作品という形で残るもので はないため、取り組みの様子や変化を写真で 記録しておき、授業の振り返りの場面で提示 した。

粘土を削るという行為そのものに没頭し、 削る手ごたえや、触れた粉の感触を味わう姿、 - 造形遊びという行為そのものに価値を見い 材料を基に発想を膨らませ活動を変化させて いく姿を振り返った。

粉に触れて指先で絵を描く、背景色との対 比の面白さを味わう、粉の量の違いで色の濃 淡が生まれることに気付き楽しむ、粉が降り 落ちる様子を横から見て面白さを味わう、偶 然できた形や色の面白さに気付く、粉を押し 固めて跡をつける、友だちの取り組みのよさ に気付き自分の活動に取り入れる、といった 多様な気付き・取り組みが見られた。

成果と課題

成果:

- 手や体全体で触れ、感じて思い切りやりた いことをとことんやってみる力が発揮された。
- 図画工作科における「鑑賞」が単に完成した 作品を目で見るだけのものではなく、感性 を働かせながら対象にかかわる創造的な営 みであることを改めて感じることができた。

課題:

だす造形活動の意義(どんな力が身に付き、 どう生かされていくのか)を子ども自身が感 じるにはどうすればよいか。また、それら を授業者がどのような方法で評価していけ ばよいかを整理していく必要がある。







大

佐賀大学教育学部附属小学校 [佐賀県 | 国立]

わくわく だんボール 浩形遊び~立体に表す

授業を行う教員 | 中野和幸(佐賀大学教育学部附属小学校教諭) 主な助手・スタッフ | 栗山裕至(佐賀大学教育学部 教授) 対象学年 | 小学2年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年7月 単位数(単位時間) 2時間 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

本題材は、段ボールを材料に、自分の感覚 を生かしながら、思いついた活動を楽しむ造 ア. 自分の感覚を生かしながら、段ボールの 形活動である。箱状の段ボールと面状の段ボ ールを大量に用意し、児童が材料と一体とな って活動ができるようにする。また、材料を 加工することができるように、段ボールカッ ターや養生テープを用いて、切断、接着がで きるようにする。積む、並べる、広げる、つ なげる、覆う、囲うなどの活動が展開される とともに、体全体を使っての大きな活動とな るため、友人との自然な交流が期待される。 また、活動が進むにつれて活動場所に段ボー ルが広がることが予想され、体全体の感覚を 働かせながら段ボールの世界に入り込んで活 動を展開する楽しさを味わうことができるで あろう。なお、授業者とティーチングアシス タント (以下TA) の役割を明確にし、授業者 は主に活動の承認、称賛の声かけを、TAは 切断や接合等技能面の補助等を行う。

ねらい・目標

箱状や板状の段ボールを、自分の感覚を生 かして形を変えたり、友人と話したりしなが

- ら、思いついた造形活動を楽しむことができ るようにする。
- 形やつなぎ方等を工夫してつくっている。 【知識・技能】
- 4. 段ボールの形や特徴等から造形的な活動 を思いついたり、友人と話したりしなが ら新たな活動を考えたりしている。 【思考・判断・表現】
- **ウ**. 箱状や板状の段ボールを用いて、思いつ いた造形活動に楽しんで取り組もうとし ている。【主体的に学習に取り組む態度】

活動

- 1.導入(材料との出合い): 図工室中央にシー トで隠された山積みの段ボールと出合い、 活動への意欲を高めるとともに、段ボール が大量にあることや、大きな活動ができる ことを感じとる。
- 2.活動1(思い思いに):自分の感覚を生かし ながら思い思いに造形活動をすることがで きるように、指導者は、児童の活動を見守 り、気持ちを汲み取りながら称賛したり励 ましたりして、児童の活動を価値付ける。

TAは、児童の活動を認めた上で、用具の 使い方や新たな活動の提案等、活動のヒン トを促す。

- 3.活動の確認:個々の活動を振り返り、小集 団での活動に意識が向くように、どのよう な活動を行ったか、今後どのようにしたい かを話合う場を設ける。
- 4.活動2 (大まかな目的を共有して): 「町を作 りたい | という意見から、それぞれの活動 - 箱状、板状の段ボールで、思い思いの活動 がつながるように、言葉かけを行う。
- 5.ふり返り:楽しく活動を振り返ることがで きるように、友人の活動場所に入りながら、 からだ全体で味わう時間を設ける。

作品の評価・フィードバックの仕方

- 活動中の言葉かけ(児童の活動の見取りから) 授業者とTAによる役割分担で、児童の活
- 1時目、2時目後の全体のふり返り(気づき を板書し、1時目と2時目の板書の内容の変容 から活動を価値付ける)
- 1時目、2時目の個人のふり返り(ワークシ 授業者とTAのより効果的な役割 ートを使用。取り組みの自己評価と、記述の変 - 言葉かけの内容やタイミング

容から、学びを見る)

- 授業終末の価値づけ(授業者は活動を楽しん だ姿を認め、TAは活動中に働かせていた資質・ 能力の価値づけから、満足感や達成感を高める)

成果と課題

成果:

- が展開されたこと
- 材料が大きいため、自然と友達との対話が 生まれ、共通イメージを持ちながら活動が 展開されたこと
- はじめは小さな活動から、最後は段ボール と一体となったダイナミックな活動が展開 されたこと
- 動を余裕をもってみることができたこと

課題:







宝仙学園小学校[東京都 | 私立]

光のパレード ロボットを使った造形活動

授業を行う教員 | 百瀬 剛 (図工専科4.5.6年担当) 対象学年 | 小学5年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年2月 - 3月 単位数(単位時間) | 4時間 場所 | ---

授業概要

「SPRK+」という球体のプログラミングロ ボットに、ストローやモールなどで造形を施 し、グループで協力して楽しい動きがある 「光のパレード」を撮影し、映像作品を作ります。

ねらい・目標

近年、急速に発達したプログラミング・ロ ボットを、図工の授業として取り入れられな いかという施策授業です。

「ロボットに造形物をつける」「動きを生 かすコースをつくる」ということに重点を置 き、動きと光を発するロボットをより楽しい ものにできるか?という発想・構想に重点を 置いた課題です。

「SPRK+」はプログラミングを学ぶ教材と して使用することもありますが、それを教え ることを目的とせず、複雑なパターンの動き を表現したいときに、表現の技法の一つとし て、プログラミングを自由に使わせました。

活動

「SPRK+」という光を発する球体ロボット

に、ストローやモールで装飾をしたり、ロボ ットが動くコースを作ったりして、遊園地で 夜に行われるアトラクションのような「光の パレード」をグループで作ることを目的とし て活動しています。

- 1.まずは球体にオリジナルの装飾をつけたり、 ロボットが動くコースをみんなで考えます。 オリジナルの楽しい形を取り付けていくわ けですが、ロボットの動きを阻害しない構 造や、動いたり光ったりすることで効果が ある造形として考えなくてはなりません。 そのアイデアを発想することに力を入れま した。
- 2.次に動きをつけていきます。ロボットはリ モートコントロールで遠隔操作できるので、 試運転はマニュアルで行うことが多くなり ました。

しかし、オペレーターの技術によって動き やコースが毎回変わってしまうことと、人 間の操作では、複数ある動作を同時に命令 することが難しいため、最終的に動きのプ ログラミングを考えたグループが多くなり ました。

3.授業のまとめは、図工室の机にガードレー ルを取り付けてロボットを落ちないように し、教室を暗くして動かしました。その様 子を撮影し、映像作品としました。

作品の評価・フィードバックの仕方

ロボットの特徴(動き・光)を生かした造 形とコースを協力して作ることができたか? が評価のポイントとなります。

フィードバックとして、映像作品を記録 し、「ロイロノート」にて提出してもらいま す。提出された映像は、「回答共有 | 機能に よって全員が見られる状態となります。この ことによって、自分たちのグループが作った 作品とは異なるアイデアで作られた作品を見 ることができ、新たなアイデアや造形の発見 や、動きの工夫(プログラミング)を共有す ることができます。

「評価」は、教員が児童(生徒)に対して 「価値づけ」することが目的でなく、「相互 鑑賞活動 | を設定することで「自己評価 | が 生まれ、次に繋がる工夫・表現の意欲に繋が

ることが何よりも大切だと考えています。よ って、このようなICT機器による、「回答共 有」機能を利用することも心がけています。

成果と課題

ロボット・プログラミングを利用した造形 活動は実践としてはまだまだ施策段階で、ど のような可能性があるかを試しているところ

子ども達は「動きがある造形」にはかなり の興味を示し、協力しながら様々なアイデア を試みていました。ロボットの台数が4・5 人で1台のため、グループで取り組んだとき に、もっと自由に作ってみたいという子もい ました。ロボットのハード面を揃えることに まずハードルがあります。

また、「プログラミング」に力点がおかれ てしまうと「創造性」が失われてしまうこと が難点です。







藝大

宝仙学園小学校 [東京都 | 私立]

触れて伝わる形 眼が見えない人のために

授業を行う教員 | 百瀬 剛(図工専科4,5,6年担当) 対象学年 | 小学4年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年1月 単位数 (単位時間) | 1単位(2時間) 場所 | 屋内

授業概要

「粘土」は触覚と結びつきが強い素材ですが、造形する際にはたいてい見ながら(視覚を用いて)作ります。「ユニバーサル・ミュージアム」を国語で学んだ子ども達が体験として、「触って気持ちのいい形」「目が見えない人にも伝わる形」を作り、それを実際に視覚障害者の方に触っていただき、交流を行った授業です。

ねらい・目標

4年生の国語の教科書の話(視覚障害者のための美術館の取り組み)がきっかけとなり、障害者の人たちに対する理解を広める授業ですが、そこから発展させ、図工の授業で行ってみることにしました。(図工&国語&社会の教科横断型の授業)

アイマスクをして、見ないで「触って気持ちのいい形」を作った後、目が見えない方にも伝わるような「触って伝わる形」を作ることで、触覚の感覚を呼び覚まし、その感覚の素晴らしさを再発見することを最終目標としました。

活動

前段階として: 国語の授業で「ユニバーサル・ミュージアム」の話を読み、全盲の方から「目が見えないってどういうこと?」という講義を聞き、視覚に障害を持つ方についての理解を広げています。

- 1.アイマスクをして、見ないで「触って気持ちのいい形」を作ります。「触覚」だけを頼りに作ったものを、見ないまま友達に「触って味わう」触覚の鑑賞を行います。案外、触覚だけでその形が想像できたりします。
- 2.それぞれのグループで「触って伝わる形」として、今度は見ながら制作します。テーマは「動物」としました。全盲の方に、最後に触って鑑賞してもらいます。ただ動物の形を作るだけでなく、その動物の持つ「強さ」「可愛らしさ」などを表現し、目が見えない人にもその様子が伝わるように表現の工夫をしていくことを目標として作ります。
- 3.グループで作った「動物」の作品を、全盲 の方に鑑賞してもらいコメントを聞きます。 触覚がとても敏感で正確、コメントもかな り的確なので、子ども達は驚かされます。 触覚とはこんなにすごいものなのだと再発

見します。また、「デフォルメ」されすぎてしまうと、共通するイメージがずれてしまうので、伝わらないことにも気づきます。 動物をよく観察して「リアルに作ることの大切さ」なども感じていきます。

作品の評価・フィードバックの仕方

今回の授業では、視覚に障害を持つ方に実際にコメントをいただきました。自分たちが作った動物を触っただけで、その様子まで分かる感覚と、的確な言葉の表現に大いに驚かされました。このような言葉をその場で聞けたことが、実感を伴う評価になっていると感じます。

なお、この授業の後、それぞれの子どもたちに感想を聞きました。自己評価としての達成感を聞くために「ルーブリック評価」も取り入れました。ルーブリック評価もICT機器を利用し「ロイロノート」で回収し、子どもたちにも「回答共有」して他の人がどのよう

に感じていたのかを知る工夫をします。

成果と課題

この授業は視覚に障害を持つ方と一緒に考えました。授業のコンセプトをお伝えし、4年生の子ども達にどのような粘土の造形課題にするかをいろいろ話しました。このように一緒に考えてくださる方と出会い、来校していただけるタイミングを設定することは難しかったです。

このような造形活動を通して、障害を持つ 方への理解が広がるだけでなく、自分の感覚 (触覚)を再認識・再発見している子どもが 多かったです。学習がただ机上で終わるだけ でなく「リアルに繋がること」が何より「実 感を伴う」ことにつながります。その機会を 作ってくださったことに感謝しています。

ただ、このようなリアルな学びはしたいと 思いつつも、なかなか実現できないのが現状 ではないでしょうか。







学校法人津田学園 津田学園小学校 [三重県 | 私立]

花筵令和 Beautiful Harmony

授業を行う教員 | 柿原岳史(津田学園小学校 副主任) 対象学年 | 小学5年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年2月 - 3月 単位数 (単位時間) | 2単位(80分) 場所 | 屋内(教室)

授業概要

はなむしろ

花筵をテーマに色画用紙にたくさんの花を描く。花の種類や色は指定しない。たくさんの花が廊下に飾られることで、その美しい調和(Beautiful Harmony)を鑑賞する。新しい元号にかわるタイミングで、「令和」をテーマに絵画作品制作を行った。

ねらい・目標

花や花びらの色や形の作品上での調和。また展示されたときに調和を感じられるよう、 うす桃色の画用紙に描いた。

活動

桜の花びらが散って花筵ができていたこと、新元号へ変わること、令和が「Beautiful Harmony」と訳されたことについて導入で触れた。廊下を花筵にし鑑賞することを伝える。また1人が描ける花は限られているが、5年生全員で描けば1000、2000の花が廊下に飾られ、その調和や美しさを鑑賞することが楽しみになるよう導入を行った。

描画材料はクレヨンと絵の具で、大きな花

や小さな花、色の調和を考えながら描いた。 また画用紙の外にも花筵がつながっているイ メージを持つように伝達した。

白のクレヨンで囲んだ線の中を塗り絵のように描いたり、花束に見立てたり、絵の具で 大胆に描いたりと、表現方法は様々であった。

作品の評価・フィードバックの仕方

描かれた花や花びらが、作品の中で調和が 取れているか。

展示後の鑑賞の時間では他の児童の作品の良さを見つけることができたか。

同じクラスの児童と協力して展示することで、「Beautiful Harmony」を感じることができたか。

成果と課題

展示方法が通常通りのクリップで吊るす方 法であったため、作品と作品の距離を狭くし たり、隙間を埋める工作を造ったり、展示の 工夫が必要であった。







お茶の水女子大学附属小学校 [東京都 | 国立]

「匂いのアート」 - 未知・未感の他者に劈かれるからだ-

授業を行う教員 | 小沼律子(教諭) 対象学年 | 小学4年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年、2019年5月 - 7月頃(2018、2019年の4年生に実施) 単位数(単位時間) | 2校時(90分)×6回、合計12校時 場所 | 屋内、屋外

授業概要

「匂い」という目には見えない、未知、未 感のものを感じ、様々に変換し表現していく。 また、自己や他者のふりかえりを共有しなが ら対話をくり返し、表していくプロセスを学ぶ。

ねらい・目標

本題材では、「匂い」という目に見えない ものをテーマにした。それは、発想や構想の プロセスにおいて、「感じる」ということを 重視している為で、対象に劈かれる身体性が 喪失された状況では難しい。そこでそのプロ セスにある、対象を実感し視点を変換するこ となどを通して未知・未感のモノゴトにも劈 かれていくという、人間ならではの身体性を 回復することをねらいとした。また、「匂い」 を探究し表現する中で、アートとサイエンス の共創など、分断されない学びを図画工作の 授業で体感させたいと考えた。

活動

1. 匂いとの出会い (2時間): 「モノの声を聴 く」というテーマで野外を散策し、葉や花、 実などの匂いの素材を収集。その時に自分 が感じた匂いや他者が感じた匂いを鑑賞し 合う。

2.匂いの抽出(3時間):匂いの素材をすり潰 したり、水やエタノールでうすめたりする。 抽出した色水で和紙を染めたり、抽出した 色水を容器に入れたりして、ライトテーブ ルなどで鑑賞する。



- 3.色に変換(2時間): 実物の色と、自分が感 じた匂いを表した色を絵の具で表し、色の 違いを比較してみる。
- 4.形に変換(3時間): これまでに「感じる」 ことを中心に記録していたスケッチやふり かえりを元に、自分の主題を決め、自分が 感じたことを形に表すために必要な素材を 選ぶ(木材、毛糸、針金、紙、布、音、身体、等)。 選んだ素材で匂いをテーマに表現する。



5.わかち合う(2時間):自分がどんな匂いを 感じたのか、感じたことからどのように表 現していったのか、などについて対話し、 お互いの探究のプロセスを共有する。

※感じたことは文字(擬音語・擬態語等)や絵 でクロッキー帳に書き(描き)とめておく。

成果と課題

発想や構想

子どもにとっては、頭の中だけで考える学 びではなく、他者に関わり、実感しながら、対 象の「善さ」に向かう経験ができた。また、長 いスパンの中でアートとサイエンスを往還し ながら、途切れない学びを体感することがで きた。この授業では、目に見えないものや、未 知・未感の他者を感じとるような、アートなら ではの学びが得られるのではないかと感じた。

教師にとっては、長いスパンの中でのアー トとサイエンスを往還しながら探究し表現し ていく子どもの姿が見とれた。学校教育では、 子どもの表現を個の中だけで評価しがちだが、 モノやコト、場など、様々な他者と関わるよ うな「関係の中での表現」として多様な子ど もたち一人ひとりとその個々の表現を見とる ことができたのではないかとふり返る。

今後は、表現と子どものリフレクションに どのような関連があるのかということについ て考察を深めたい。



藝大

羽村市立羽村東小学校[東京都 | 公立]

カラダで図工! 文化庁 文化芸術による子供育成総合事業~芸術家の派遣事業~

授業を行う教員|

新井英夫(ダンスアーティスト、体奏家、文化庁 芸術家の派遣事業派遣アーティスト) 古賀久貴(羽村市立羽村東小学校、図工専科事業担当教員) 主な助手・スタッフ|

板坂記代子(DANCE-LABO KARADAKARA、身体ワーク指導補助)

古川 東(身体ワーク指導補助)、橋向祐季(伴奏、音響効果)、 阪巻正志(阪巻写真事務所、映像記録、投影) 対象学年 | 小学2年

授業概要

文化庁 芸術家の派遣事業としてダンスア ーティストの新井英夫さんらを招き、身体や 身辺材、映像を活用した造形遊びを行った。 形や音、光などの要素を楽しみながら全身を 使って感じ、総合的な表現活動へとつなげた。

ねらい・目標

非言語の多様なコミュニケーションと表現 の方法を体験することで、自身の身体への自 己肯定感や、他者の多様な身体への理解・尊 重を醸成する。他者の身体や身近な素材とつ ながり、お互いを深く知り、関係づくりを行う。 身辺材や音、光などの魅力を味わい、生かす ことから、総合的かつ即興的な身体表現を行う。 テーマごとになりきり形態表現し、観賞し合

活動

児童が活動を通じて経験から発想を広げて いけるように、学んだことを振り返りつつ活 動を積み上げる全体のプログラム構成とした。

教育領域 | 教科教育

場所 | 屋内(体育館)

2019年6月5日、7月3日、9月4日

※2クラス別で実施、合計12校時

単位数(単位時間) | 2校時(90分)×3回

実施時期 |

1回目は冒頭から非言語のコミュニケーシ ョンのみで始まり、児童が惹きこまれていく 様子が見て取れた。力を抜いて身体をほぐし、 心をほぐし、児童間の関係性をほぐしていく ため、身振りや身体接触で気持ちを伝え合う 非言語の挨拶・コミュニケーションを行った り、音に合わせて身体をバラバラに動かして 止まり、できた形態を楽しんだりした。最後 に宙にたなびく「風のじゅうたん (大きなポ リシート)」を寝転がって鑑賞した。

2回目は身辺材を用いた身体ワークを行っ た。新聞紙を振ったり揉んだりする動きに 合わせて児童がなりきって動いたり、30~ 50cm ほどの木片を落とさないように丁寧に かつ面白く渡したりした。そしてグループで った。さらに木片をバチで木琴のように鳴ら し、みんなの音を聞きながら雨のように音を 重ねるコミュニケーションワークを行った。

3回目は前半に身体ワークを行った後、暗 転した会場で懐中電灯を携えて動き、長時

間露光で撮影した「光のダンス」や「光の彫 刻」を即時上映して鑑賞した。波や花火など のテーマに合わせて、工夫しながら数回ずつ 行った。最後に「風のじゅうたん」に光を当 てて、色めきながらたなびく様を存分に味わ って活動を終えた。

作品の評価・フィードバックの仕方

- グループでの表現などを相互観賞する機会 を設けた。
- 「光のダンス」や「光の彫刻」においては、 身辺材から美しい音が出せることに驚き、 デジタルカメラの長時間露光撮影の成果を 即時にプロジェクタで投影し鑑賞した。児 童は映像として見ることで、どのように動 けばいいか工夫を加えて次の活動に取り組 むことができた。

成果と課題

- 講師陣の導入により、児童はこれまで経験

- したことがないワークにも素直に身体全部 を使って没頭し、味わっていた。
- 身辺材を加えることで、相手との関係をよ り丁寧に感じながら動いていた。また、あ る種の不自由が加わることによる動きや形 態の面白さが引き出されており、相互観賞 することで客観的にもよさを味わっていた。
- 児童は新聞紙や溶け出す氷などになりきっ て、自らの身体を柔軟に動かしていた。実 物や音等で具体的にイメージさせることの 効果が見て取れた。
- さらに他の音をよく聞いて自分の音を出す ことに取り組んでいた。
- 実施後の図画工作科の他題材の導入(和紙 を揉む) において、本事業で体験した新聞 紙を用いた身体ワークを再現するかのよう に和紙になりきって思わず動き出していた。 経験がよく内面化されていたことの表れで あると思う。







金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校[石川県 | 国立] ウゴウゴファンタジー ~おいしいアニメーション~

授業を行う教員 中川佑紀(教諭) 主な助手・スタッフ ヤナギダマサミ(イラストレーター) 対象学年 | 小学2年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年1月 単位数(単位時間) | 3時間 場所 | 屋内(ランチルーム)

授業概要

こしあんとアプリ「ストップモーションス タジオ」を使いつくったコマ撮りアニメ。1 時間目。こしあんでつくった自分の名前から、 上生菓子に。そのおいしそうな上生菓子は、 口の中へ。2時間目。どこかが足りなかった り、何かが出てきそうだったりするヤナギダ マサミさんのイラスト。そこからうまれるワ クワク。それこそが「おいしいアニメ」。

ねらい・目標

- **1.**アプリ「ストップモーション」の操作を知 り、自分の思いに合うように表現すること ができる。
- 2.自分の名前やイラストからイメージを広 げ、「おいしいアニメ」の思いに合う形や 色、動かし方や撮り方を工夫し、表現する ことができる。
- 3.興味や関心をもちながら、友達とのかかわ しもうとすることができる。

活動

アプリ「ストップモーションスタジオーと 茶の湯文化が息づく「金沢」のこしあん。そ れらを使ったコマ撮りアニメ。

1時間目:

- **1.**材料とであう。
- 2. 「おいしいアニメ」の言葉からイメージを ふくらませる。
- 3.自分の名前のアニメをつくる。
- 4. 名前から上生菓子の形に変身するアニメを つくる。
- 5. 上生菓子を口に入れるまでのアニメをつく る。

1時間目のアニメーションは、自分の名前 から始まる。こしあんをひも状に伸ばし、自 分の名前をつくっていった。どんどん…ど んどん一つに集まって、おいしそうな上生菓 子の形に変身していく。その様子を細かく撮 影していき、最後には、できた上生菓子を手 り合い、よさやおもしろさを感じながら楽にとり、大きな口を開けて、嬉しそうに食べ るときの表情までをアニメーションにしてい った。

2時間目:

- 1.ヤナギダマサミさんのイラストとであう。
- 2. イラストからイメージをふくらませる。
- **3.**3人で話し合いながらアニメをつくる。
- 4.食べながら、アニメを鑑賞する。

2時間目は、イラストレーターのヤナギダ マサミさんとのコラボレーション授業。3人 で一つのアニメーションをつくる活動。どこ かが足りなかったり、何かが出てきそうだっ たりするイラストから発想をふくらませてい った。

作品の評価・フィードバックの仕方

アニメをつくっているときには、各グルー プをまわりながら、なぜその表現をしたのか (「なんでそうしたん?」)、これからどう表現し ていこうとしているのか(「次どうするん?」) などの思いやこだわりを聞き、共感し価値づ けをしていく。

鑑賞後、ふりかえりを書かせ、作品からだ

けでは伝わらない個々の思いやこだわりを評 価していく。

成果と課題

今回の「おいしいアニメーション」では、 五感をフルに活用させたいという私の思いが あった。目で本物の上生菓子を見、鼻でその 甘い香りを感じ、手でホワホワなこしあんに 触れ、耳で友達の声を聴き、アニメーション ができあがった後には、つくった上生菓子を 舌で味わった。 この授業を通して、子ども は上生菓子とアニメ、そしてたくさんの笑顔 をつくっていった。

授業をするにあたり、イラストレーター、 和菓子職人、栄養教諭、保護者などの協力や 入念な打ち合わせ。さらに、教具の吟味や材 料の準備。食品を扱うこともあり、事前に配 慮すべき事項が少なくなかった。だれでも気 軽に取り組める授業のあり方について、今後 課題としていく。





アトリエ5「神奈川県]

『まちのおと』春の聴想画

授業を行う教員 | 本田雄揮(講師) 対象学年 | 小学1-5年

教育領域 | 絵画造形教室 実施時期 | 2019年 単位数(単位時間) | --場所 | 屋内(教室)・屋外

授業概要

指導方針のひとつとしている「五感」を用 いた制作の中で「聴覚」に焦点を当て、実際に 街に出て取材し感じとった音を、絵の具の色 や線などで抽象的な絵画作品として表現する。

ねらい・目標

- 日常、様々な音が混在する中を無意識に生 活していることに気づき、それらを絵画制 作という異なる視点から意識的に捉え、新 たな価値観を養う。
- 価値基準が難解と思われがちな抽象的表現 を、自らが取材した音を用いることによっ て楽しみながら制作し、その「良さ」を体 感する。
- 筆遣いや水分量の扱いなど絵の具での応用 的な表現方法を学ぶ。

活動

1.導入。聴想画について説明。音をモチーフ に絵画制作をすることを知る。教室内の音 をオノマトペとして表現する練習。電灯を 消し、目を瞑って行う。約1分間で聴こえ

- た音を全員が発言する。その後、商店街や 公園、駅、住宅地を廻り、聴こえた音をオ ノマトペとしてメモし集める。所謂既存の 擬音に限らず、創作したものでもよい。
- 2.集めた音を、バリエーションを持たせた絵 の具の線で表す(デモンストレーション→ス ケッチブックに練習→画用紙に本番)。 低学年 は筆のみ、中学年はグレーの画用紙に筆以 外のもの(スポンジ、刷毛、フォーク、スポ イト、歯ブラシ)を用い表現する。猫や車 など具体的なものは描かない(音には形が ないから)。画面内の粗密を考えながら行 う(うるさいところと静かなところの表現)。
- 3.乾いた作品に加筆する。低学年は綿棒やフ ォークで梅雨の時期らしさを考え、絵の具 で雨の音として点描を足し、中学年は「重 ね方」をアボリジニの絵画に学び色鉛筆で 細かい表現を加える。画面の粗密を最後ま で意識する。

作品の評価・フィードバックの仕方

新たなアイデアや技法的な試みが本人の納 得の下行われているか、制作中の発言や対話、 挙動から読み取り、それを基に完成作品につ いて適切且つ新鮮な価値付けを行う。低学年

はどのような音なのか、なぜこの色を使用し たのかなどを対話し自身の制作について深め る。中学年は単なる絵の具遊びで終わらない 様、絵画的視点から画面構成や色の効果につ いて言及し、時には前述のことを踏まえた上 で加筆修正を促す。本人の自覚して行ったこ とはもちろん、無自覚で生まれた「良さ」に ついても丁寧に認め、価値を与える。

成果と課題

自らが生活している場所での音集め、それ を絵画作品に昇華させること、それらを終始 楽しんで行うことができていた。日常気に留 めない音をいつもとは異なる視点で新鮮に捉 えることの面白さを学び、多角的視野を養い、 厚みを持たせることができた。また、意図し て抽象的表現を行うに当たり、画一的な「う まい絵 | を目指すのではなく、本人の納得が 伴った「良い絵」があることを知り、絵画の 多様性を学ぶことができたのも同様の成果が 見られた。

ここでいう「納得」とは「理解」の先にあ るものとして考える。論理のみでなく体感で



行うという意味であり、生徒自身の能動的姿 勢により生じるものである。それらを奮起さ せる為、指導者は生徒自らが主題を獲得でき る場面設定、明確な理由を孕んだ言葉選びが 必須である。生徒自身が納得の下制作するこ とによって、完成作品を自宅へ持ち帰った際 の保護者の反応も変化する。美術、とりわけ 抽象表現や現代美術に苦手意識を抱く大人は 多いが、作品を前に新たな視点を得た眼差し で語る子供の言葉は納得を伝播させ、受ける 保護者も興味を抱くこととなる。後日行った アンケートによるといくつかの制作の中でこ の聴想画がダントツで人気があったことは、 非常に喜ばしいことであった。





弘前大学教育学部附属中学校「青森県 | 国立]

ダンボールアートで学校を遊園地にしよう ~2019となりのひろふ遊園地展に向けて~

授業を行う教員 | 蒔苗靖子(弘大附属中学校教諭) 対象学年 | 中学2-3年

教育領域 | 教科教育

実施時期 |

2018年10月-3月まで制作(8月に弘前文化センターで展覧会)

単位数(単位時間) 20時間 場所 | 屋内(美術室・校内・中庭パティオ)

授業概要

昨年までは「ひろふ動物園展」と称して張 り子の動物を展示してきたが、本年度は新た な試みとして、ダンボールアートに挑戦した。 弘前市には動物園と遊園地が存在しないので、 「今年の3年生は動物園のとなりに遊園地を つくった」というテーマで、展覧会に来た地 域の方をはじめ、特に小学校低学年層までの 子どもたちに楽しんでもらえるような作品を チームで考えさせ、制作させた。

ねらい・日標

主なねらいは、廃材であるダンボールをど のように作品として蘇らせるかということと、 小子どもたちが喜びそうなものは何かを十分 に話し合い、主題を決定し、作品制作に主体 的に取り組むことである。誰もが見て楽しめ るような形やデザインを構想し、加えて安全 性についても考えさせた。(『中学校学習指導 要領(平成29年度告示)解説美術編』pp.91-93 参昭)

活動

- 1.制作の対象となる年齢層や配置する場所 を考えながら作品の主題を決め、構想を練 る。プロのアーティストや一般の方などが 制作したダンボールアートを鑑賞しつつ、 遊べるだけでなく記念撮影ができるような 立体や、自動販売機や飲食スペースもある ディズニーランドやテーマパークなども参 考にした。
- 2. すべり台や昇り降りするような階段、ブロ ック的な遊具は、頑丈にするために、震災 時に被災地で作られていたダンボールのベ ッドや椅子の構造を参考にした。
- 3.彩色は重ね塗りが可能なアクリル絵の具 を使用し、ダンボールの素材や質感も生か すような彩色を意識させた。
- 4.全5クラスの25チームによる作品が完成し た。作品は校内外(附属小学校中庭を含む) での展示を試み、タブレット端末で撮影し た。動物園の隣に遊園地をつくったという 設定なので、「となりのひろふ遊園地展」 として8月3日から弘前市文化センターで 二日間の展覧会を行った。

作品の評価・フィードバックの仕方

附属小学校と中学校の間に、弘前大学美術 教育講座教授の塚本悦雄氏によって設計デ ザインされた<パティオ>という中庭があ る。無限に続く子どもたちの未来に、水の波 紋をイメージして作られた力強い抽象彫刻作 品であり、小学生はいつでも上履きで遊ぶこ とができる。自分たちの作品を配置し、「パ ティオという〈場〉と〈作品〉が相互に活き るような空間をつくるためには、どんな工夫 が必要か」を考えさせる授業を行った。その 結果、「水の波紋だから、ここを水面と考え てこの位置に置こう」「見る角度や視点を変 えて、空間を生かすように展示すれば作品も 活きる」など、作品と周囲の空間の関係を考 えながら置くようにしたという記述が多く見 られた。小学校1年から3年の児童に実際に 見に来て体験してもらい、子どもたちにどの

ような作品が喜ばれるのかを目の当たりにし、 つくる喜びや自尊感情なども高まった。

成果と課題

共同制作ならではの試行錯誤、コミュニケ ーションと対話が毎回繰り返されることによ って多面的な考え方を共有できたこと、鑑賞 者は作品を見るばかりでなく体験できたとい うことが、今回の成果の一つである。今後の 課題としては、実際に展覧会を行ったときに、 遊ぶことができる作品に対して予想外の子ど もの動きが見られたので、安全面には今後も 十分留意しなければならないと感じたことで ある。また、体験型の作品がある以上、制作 した作品が中学生の感性豊かな表現として鑑 賞されるためにも、もう少し広い空間に展示 することを配慮していきたい。



秋田大学教育文化学部附属中学校 [秋田県 | 国立]

光と明かりの演出 ~造形的な見方・考え方を働かせるものづくり~

授業を行う教員 | 伊藤知佐子(教諭) 対象学年 | 中学1-3年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 中学2年の6月 単位数(単位時間) | 50分×8 場所 | 屋内(美術·図工室)

授業概要

私たちは毎日、自然の光や人工の明かりな ど様々な光に囲まれて生活している。本題材 は、光や明かりが生み出す雰囲気や感情など の効果・演出について考え、表現を楽しむデ ザイン・工芸の題材として設定した。様々な 材料を透過して生まれる光の美しさやおもし ろさ、安らぎを感じ、光源と材料との組み合 わせで明かりを制作する。そして、明かりの 作り出す色や形、雰囲気や感情、心理的効果 も感じ取ることができるようにしたい。作品 づくりでは様々な素材に触れ、発想し、制作 の手順を考えて用途に合ったものを作る。五 感を働かせて様々な材料を選択し、試行錯誤 しながら自分だけの明かりを見付け、手作り のものを作る楽しさや、それを生活の中で生 かす喜びを味わわせたい。また、発想力、構 成力、身近な工芸品に対する関心、美的感覚 の高まりなどを身に付ける機会となるのでは ないかと考える。

ねらい・日標

1.光と明かりの演出効果に関心をもち、表現 意図に沿った材料、表現方法を見つける。

- 2.材料の特性を生かし、光と明かりの効果を 考えて構想を練ることができる。
- 3.形や色、光の効果や雰囲気を考え、様々な 技法を活用しながら制作することができる。
- 4. 互いの多様な発想や表現の美しさ、光と明 かりの演出の工夫を感じ取る。

活動

- 1.いろいろな光を鑑賞する。【鑑賞の能力】 2.参考作品を見て、材料を準備する。
 - 【関心・意欲・態度】
- 素材から発想を広げることができるよう、 紙や木、ガラス、アクリルなど様々材料を 準備する。
- 3. 材料を見ながら「思い」をふくらませる。
- 4. ランプシェードのよさや美しさ、特性を理 解する。
- 5.光源と材料を組み合わせて、「ミエルトー ク」をする。【発想・構想の能力】
- 様々な表現を試すことができるような場を 設定する。
- 色や形、雰囲気や感情などの造形的な視点 を提示し、光源と材料との関係について考 えることができるようにする。
- 6.使用する材料や用具、デザインを考え、制作

の構想を練り、アイディアスケッチをする。 「用と美」への意識を高めることができた。 【発想・構想の能力】

- 分のデザインを見直す。
- 友人の発想のよいところを見付け、シート に記入し、自分の作品のレベルアップに生 かすことができるようにする。
- ェード部分の制作をする。【創造的技能】
- デザインや素材から、構造や作り方を考え、のと考え、実践していきたい。 用具を適切に選びすすめることができよう、 試作コーナーを設置する。
- 9.色を考えたり、装飾を施したり、光のこぼ れ具合を調節する。【創造的技能】
- 光のこぼれ具合を確かめながら制作するこ とができるよう、暗室BOXを作る。
- 10. 作品を互いに観賞し、発表する。
- 互いの作品のよさを認め合うことができる よう、意見交換する場を設定する。
- 11. 身の回りにある様々な工芸品やデザイン について考える。【鑑賞の能力】
- 自分で作り上げた作品を振り返ると同時に、 身の回りにある「美術」について考えるこ とができるよう、工芸品等を提示する。

成果と課題

成果: 今回の授業は、光や明かりが生み出 す雰囲気や感情などの効果・演出について考 え、表現を楽しむデザイン・工芸の題材とし て設定した。多くの生徒が高い関心をもっ て授業に取り組むことができた。「家の玄関 に飾りたい」「両親の寝室に飾れるようプレ ゼントしたい」という声もあり、作品を「作 り」「使う」活動を通して、美術における

課題:様々な素材や材料を扱い、頑丈に組 7.友人のデザインについての発表を聞き、自 み立てたり接着したりするには、いろいろな 知識や技能が必要となる。多くの材料体験は 美術の授業の中でとても大切であるが、それ ぞれの材料に適した接着剤や接着技法も必要 となる。生徒を「ミニ先生」として活躍させ 8. 光源と素材との組み合わせを考えながらシ たりしながら制作を進めることで、集団とし ても個としても表現力がより高まっていくも





大学生

海外 藝大

杜の会

広島大学附属三原中学校[広島県|国立] デザインの扉を開こう 園児が楽しめる組木パズルのデザイン

授業を行う教員 | 平光昌輝(教諭) 対象学年 | 中学1年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年10-11月 単位数(単位時間) 8時間(50分) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

使用者を「広島大学附属三原学校園の幼稚 園の園児」と設定し、3cmと厚みのある立 体的な「組木パズルをデザインする」ことを 通して、使用者の目線に立ったデザインをし、 立体として表すために木に加工する。さらに、 本題材を行う前に学習した「色の感情やイメ ージ | の知識を活用して色を考え、安全な形 や使いやすい形、厚みを活かして平面的な組 木パズルにはない、独自の園児に好まれる遊 び方・機能を考える。

ねらい・目標

本題材では、一般的な組木パズルの厚み よりも厚い3cmの板を用いることで、単なる 「パズル」だけではなく、立体として色々な 遊び方を生徒自身が考えられるようにした。 また、使う対象を「学校園の園児 | に設定す ることで、自分ではなく他者の視点で考える。 さらに、色々な楽しみ方(形や機能)・与え る印象(色や形)・安全面・材質や手触りな どにも気付き、深く考えられるよう互いに意 見を出し合う対話を取り入れながら授業を行 っていった。

活動

- 1.導入:広島大学附属三原学校園では、今後 学校園の園児との交流を予定しており、そ のための玩具をデザインしていくことに意 欲を持たせる。
- 2.構想:デザインの視点をもとに、園児が楽 しめる組木パズルのアイデアスケッチを行 い、色や形、遊び方や機能、安全面などに ついて考えながらイメージを形にしていく。 グループで互いに意見を出し合いながら、 制作工程について計画を立て、より良いも のになるように下図をつくる。
- 3.制作:組木パズルの板に下図を写し、電動 糸のこぎりで板を切っていく。切った板や 枠などについては、生徒自身が考えた「角 をとる」ためにやすりをかけることや、小 さすぎると誤飲の恐れがあることなどにつ いて確認し、安全面にも意識して作業させ る。さらに、切った形に色を塗る際には、 正面だけでなく側面や裏の色にも意識させ、 どのように色の感情や効果を使って園児を 楽しませるか、立体としての面白さや美し さについても考えられるように指導した。
- **4.振り返りとまとめ:**できた作品をグループ 同士で交流しながらデザインの工夫につい

で、成果と課題について振り返り、まとめ を行った。また、課題点については、個々 の生徒が考え修正や改善を行った。

成果と課題

成果としては、生徒が身近な園児を対象に することで、他者の視点を意識し、色や形、 機能や材料など色々な視点から考え、既習の 知識や経験も活用して表すことができた。ま た、「人のために」という他者の立場に立ち、 相手のことを考えるという人間的な良さも表

て批評し合い、それを全体で交流することせた。また、作業の中で色々なうまくいかな い点(例えば、切ったパズルが枠にはまりにく い・他の生徒の部品と混ざり分からない等)につ いて、(最初から板を余裕を持たせるように少し カットする・自分のマークをデザインし裏に描き 加える等) 解決べき「目的」に対して考え表 していくというデザインの本質も実感的に学 べたと考えられる。課題については、授業者 として事前・事後に園児や関係者と生徒との 交流を持たせることで、さらに深く考え表す ことができるのではないかということと、立 体作品として成立するちょうど良い板厚の設 定である。







北海道教育大学附属釧路中学校[北海道|国立]

フチュウブル美術館をつくる

授業を行う教員 | 更科結希 対象学年 | 中学2-3年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年1月 - 2月 単位数 (単位時間) | 7時間 場所 | 屋内(美術·図工室)

授業概要

本題材は、展覧会のテーマ「コントラスト (対比)」に沿ったコンセプトをグループごと に考え、それをもとに美術館の建築模型を制作し、そこに選択した鑑賞作品を配置してミニチュアの展覧会を企画するものである。

美術館は鑑賞者のために様々な工夫がなされている。主に、展覧会のテーマに沿った作品の選択、作者のコンセプトの伝達、作品を見せるための空間の工夫などが挙げられる。展覧会の企画は、作品の理解はもちろん、他者への意識、空間の演出と総合的に考えなければ作ることができない。こうした活動を通して「見方・考え方」を成長させることによって、個々の感性や想像力を豊かに働かせることにつながるだろうと考えた。

ねらい・目標

生徒は、美術館学習を活かしながら、展示空間の演出の仕方によって作品の見え方が異なる事を学ぶ。展示する作品は、形や色、作者の意図、表現方法の視点で鑑賞を行い、展示のコンセプト「コントラスト」に適したものを選択する。また、実際にミニチュア模型

で展示空間を制作することを通して、コンセプトにあった作品の見せ方について考えを持ち、班活動において意見を共有し、最適な案をまとめ表現する。

活動

[図1]を参照

作品の評価・フィードバックの仕方

本題材は、架空のフチュウブル美術館のテーマ展示を各グループで企画し、選択した作品を展示するミニチュア展示空間を表現するものとした。そのため、評価は「コントラスト」に適した形や色、表現方法、作者の意図の視点から作品を意図的に選択できているか、その工夫に見取ることとした。

また、作者の意図は同じでも表現方法が異なることもあるため、作品の理解を深める上で、共通することや異なることに目をむけることが大切であると考える。したがって、個人での思考段階での見取りや、グループとしてどのような要素に視点を置いたのかを評価の対象とした。表現段階では、作品展示の配列や壁面の構成などについて、個人でどのよ

うに思考したか、また、グループ内で他者の 意見を取り入れながら協働して活動するなか で、どのように思考し表現したかについて、 蓄積をしながら評価を行った。

成果と課題

本授業は、表現と鑑賞の相互の関連を図っ

た題材である。ミニチュアの美術館をグループで検討しながら表現を行った。これまで本題材は4年間実施してきているが、中学1年生の段階において、鑑賞で仲間と意見を共有し実際に表現をするという流れについては、成果を感じられるものとなっている。







[図1]

宇都宮大学教育学部附属中学校「栃木県 | 国立]

「日本の美とはなんだろう?」-日本の美の特徴を活かした屏風制作-

授業を行う教員|浅野比呂嗣 対象学年 | 中学2年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2月-3月 単位数(単位時間) | 5時間 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

修学旅行に行く前に、日本の美意識や美の 特徴について考えさせた。そして、個々で考え た日本の美の特徴をもとに、屏風型の小作品 を制作した。3年生になり修学旅行では多く の文化財を見学した。作品制作の経験を踏ま えたうえで、美術作品や文化財を鑑賞するこ とで、更に日本の美についての考えを深めた。

ねらい・目標

造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、 品からそこにある共通点や特徴について考え 美術の働きなどについて考え、主題を生み出 し豊かに発想したり構想を練ったり、美術や 美術文化に対する見方や感じ方を広げたりす ることができるようにすることを目標とした。 鑑賞活動を導入に行い、そこで考えたり感じ たりしたことをもとに制作させた。対話的な 活動を多く取り入れることで、新たな価値と の出会いを増やし、美術に対する見方や感じ 方を広げられるように配慮した。

活動

1時間目は、俵屋宗達の風神雷神図屛風や

長谷川等伯の松林図屏風を鑑賞させた。屏風 絵の模型を使い、折りによる見え方の変化を 体感させたり、登場人物に成りきり寸劇を交 えて鑑賞活動を行ったりしたことで、屏風に 対する興味を高めさせた。さらに、日本の美 の特徴について生徒同士で意見を交換し合い、 それぞれに考えを深めさせた。

2~4時間目は、1時間目のワークシートに 記入した個人の考えをもとに、日本の美の特 徴を踏まえた屏風絵を制作させた。固定され た和のイメージを用いて表面的な表現に陥り やすい生徒には、教科書などにある日本の作 させた。

屏風作品を画材として水彩絵具の他に顔料 系のペンマーカーを用意した。マーカーは制 作時間の短縮につながった。しかし、日本の 伝統色は表現しにくいという意見もあった。 といった意見が寄せられた。日本の美の特徴 に焦点を当てたことで、日本の独特の色味な どについても感じ取り、注目できたようだ。 画面に和紙を貼り質感にこだわる生徒や曲線 を使った細かな動きを表現しようと何度も下 描きを行う生徒も見られた。これらのことか ら、生徒は自国の文化に高い興味をもち、主 体的に制作していることがわかった。

修学旅行後に制作した作品の鑑賞活動をさ せた。自分なりの考えをもって文化財を見学 し経験を積んだことで、さらに日本の美の特 徴についての考えが深まっている様子が見ら れた。

作品の評価・フィードバックの仕方

学習指導要領に従い、美術への関心・意 欲・態度、発想や構想の能力、創造的な技能、 鑑賞の能力の4つの観点で評価を行った。ワ ークシート、作品など、授業後に教師が確認 しながら評価を行う方法と、授業中の見取り を適切に組み合わせて、全員の学習状況を適 切に見取った。生徒へのフィードバックにつ いては、机間指導や作品鑑賞時を利用し対話 する中で作品から受ける印象や感想を伝えた

り、ワークシートに記入したりした。生徒間 では、鑑賞活動の際に互いに批評しあう中で、 改善点や努力点を互いに称賛しあった。

成果と課題

成果としては、修学旅行に合わせ自国の文 化について学ぶことで、生徒は意欲的に取む ことができた。また、日本の美の特徴につい て自身の考えを持たせることで、主題の決定 がスムーズにできた。作品のサイズが程よく、 短期間で集中して制作できた。

課題としては、日本の美の特徴が、安易な 和のイメージ(富士山、日の丸等)に固定され しまいその先の深い思考に至らない生徒が見 受けられた。さらに思考を深める手だてを考 えたい。







鑑賞

鹿児島大学教育学部附属中学校 [鹿児島県 | 国立]

ここにあるべきベンチとは ~使う人や用途に応じてベンチをデザインしよう~

授業を行う教員 | 前之園礼央、加治木彩音 対象学年 | 中学2年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年5月 単位数(単位時間) | 10時間(50分) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

本題材は、事前に、生徒が身の回りの「好ましい」と感じる空間や場所と「好ましくない」と感じる空間や場所を形や色彩、材料(質感)、光といった造形的な視点で鑑賞し、自分の「好ましい・好ましくない」といった感情や感覚と形や色彩などの造形の要素とのつながりについて考え、見方や感じ方を深める学習を踏まえて行うもので、学校で生活したり訪れたりする人々が使うベンチを、設置する場所や使う人の気持ち、ベンチの用途を考えデザインし、モデルを制作するものである。

ねらい・目標

- 1.知識及び技能:形や色彩、材料の質感などが感情にもたらす効果を理解するとともに、 材料を生かし用途に応じた形や色彩で創造 的に表す。
- 2.思考力、判断力、表現力等:使う人の気持ちや用途などと美しさなどとの調和を総合的に考え、形や色彩の特徴や材料の特性などを生かしてベンチのデザインを考える。
- 3.学びに向かう力、人間性等:形や色彩など から感じる感情を捉えようとするとともに、

使う人の気持ちや用途などと、美しさなど との調和を総合的に考えてベンチのデザイ ンを考え、創造的かつ主体的に表そうとする。

活動

題材の導入の段階では、学校のいろいろな場所を生徒に見て回らせたり、生徒や教職員を始め、保護者など来校される方々など、学校で生活する人や訪れる人を想起させたりして、空間や場所の雰囲気を生かし、誰がどのような目的で用いるベンチなのかを考えさせた。

例えば、「靴箱前の池の静かで落ち着く雰囲気の場所に、先輩と後輩が気軽に話したり相談したりするためのベンチがあるといいな」とか「階段の踊り場の少し寂しい雰囲気の場所を明るくしたいから、生徒が楽しくお話をして過ごしたり、来校されたお年寄りの方などが少し休めるベンチがあるといいな」など、生徒にベンチを使う人の気持ちや用途に応じた形や色彩、材料などを考えさせ、他者へ意識を広げてデザインするなどベンチの主題を明確にさせた。

そして創出した主題を基にアイデアスケッチを行わせ、目的や条件に応じた形や色彩、 材料などを考えるなど、どのようなデザイン のベンチにするか考えさせた。アイデアを展開する際には紙に描かせるだけでなく、油土を準備して実際に立体的に表してデザインを検討することもできるようにし、生徒の発想や構想が一層豊かに展開されるようにした。また、必要に応じて班でアイデアを紹介させる話し合いの場を設け、ベンチの形や色彩などのデザインと用途などとのつながりが客観的な視点からも妥当であるかを検証させた。

題材の展開の段階では、アイデアスケッチ を基に、造形粘土やポスターカラーなどを用 いてベンチのモデルを制作させた。また、造 形粘土以外にも麻布やスポンジなど多様な材



料を提示し、生徒にベンチの用途に応じて材料の組合せなどを工夫させたり、材料が持つイメージからよりよいアイデアを誘発してデザインを改善させたりできるようにした。また、学校で準備する材料以外にも、各自で材料を持参してもよいことを伝え、材料が持つイメージを生かして豊かに発想し構想を練ったアイデアがよりよく具現化できるようにさせるとともに、主体的に制作する意欲を引き出した。さらに、実際にベンチに座っている人のモデルを制作させるなど、考えたアイデアが他者に伝わりやすくなるような創造的な表現の工夫を考えさせた。

題材の終末の段階では、生徒にベンチを設置したい校内の場所をカメラで撮影させ出力し、その写真を背景にベンチのモデルを置いてカメラで撮影した画像を画用紙に貼り、文章で説明を補いながら作品を紹介するパネルを制作させた。文章にまとめることで、デザインに込めた思いや考えが他者に伝わりやすくなるとともに、自分自身の考えが整理される。これにより、学習の深まりを図った。



鳥取大学附属中学校[鳥取県 | 国立] 作品との対話 ~毛利彰の世界を通して~

授業を行う教員 | 木村信一郎 対象学年 | 中学2年

078

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年7月-9月 単位数(単位時間) | 1.5時間 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

本題材は、鳥取出身のイラストレーター毛利彰氏のご子息、関係の方々のご厚意により、実現することができた授業である。これまで、鑑賞の授業の多くは、教科書や図録、美術資料集などに掲載されている作品及びスライドで映し出した作品など、映像や印刷物を通して行ってきた。本来ならば美術館等に行き、展示されている実物の作品から、筆跡、色などをじっくりと鑑賞するほうがよいことは明らかであるが、今回の出会いにより、毛利彰氏の作品をお借りし、教室で本物に触れる機会を得た。教室で実際の作品をじっくりと鑑賞するということは生徒にとっても新鮮であり、生徒間で意見交換する中で、作品をより深く味わう時間となった。

ねらい・目標

作品の印象や直感を大事にしながら、形や 色彩などの特徴や印象などから、全体を感じ、 本質的なよさや美しさ、作者の心情や意図と 創造的な表現の工夫などを感じとり、自分の 価値意識をもって味わうことができる。

活動

学習計画(全1.5時間)

第1次(0.5時間): 事前学習として自作リーフレットを配布し、作者及び作品について各自で調べておく。

第2次(1.0時間)作品との対話:

- 1.作品①[「少年とひまわり」] 実物作品を鑑賞する。
- ①全員で1つの作品を鑑賞する。
- 2.作品② [各時代の作品] 実物作品を鑑賞する
- ①時代ごとの作品をグループでそれぞれ担 当し鑑賞する。
- ②各班で発見したことなどを踏まえてそれ ぞれの作品のプレゼンを行う。
- 3.作者について考える。

12の作品から、見れば見るほど 根像がぶくらんでいきとても奪し かったです。作品に時代が書いて あるわけではないのに時代感が 感じられあもしろいなと思いました。 そ利さんの自分の夢をわからかないと いつとことがするいと思いました。

作品の評価・フィードバックの仕方

評価は次のように設定している。

- A表現の工夫や意図などを想像するなどして、 自分の価値意識をもって作品を味わうこと ができており、友達の意見を聞き発表する などの活動を通じてさらに作品の見方を深 めることができている。
- B 表現の美しさ、色、形の工夫と、作者の意 図を想像するなどして、自分の価値意識を もって作品を味わい、言葉や文字で表すこ とができている。
- C 表現の美しさ、作者の生い立ちをリーフレットから読み取り、それを踏まえて作品を 鑑賞しようとしている。

事前に配布したリーフレットに、自身が調べてきたこと、作品①で気づいたこと、作品②で話し合われたこと(自分の考え、他者の考え)、振り返りを書き残すようにしている。その都度意見交換しながら、各自が自分の考えをしっかりと持ち、述べることができるようにしている。

ある。また、作家:毛利彰氏はイラストレーターであ り、幼少期の油彩画から、イラストレーターとして企 業に合わせたアクリル作品、晩年のオリジナル作 品と、その表現は多岐にわたる。それら時代 ごとの異なる作品と対話する中で、作者の制 作への思い、時代の流れの中での葛藤などを 感じ取らせたいと思い、授業を設定している。 実物作品や郷土作家としての毛利彰氏の存在 を知る中で、生徒は圧倒されながらも、一つ ひとつの作品に熱心に向き合う姿が見られた。 また、自他の発表を通して新たな考えを見出 し、学びを楽しむ姿もあった。参観者から は、一つひとつの作品が大変貴重で、それら を1時間の授業で扱うのはもったいないとい う意見もあった。無論、幼少期の油彩画、晩 年のオリジナル作品だけでも授業として学び を深めることはできる。作家が時代の流れの 中で何を感じ、どう向かっていったのかはそ の時々の作品にあらわれていると考えており、 授業者としては、この授業形態を維持しなが らもより深く、作品と対話し自身の思いを言 葉で伝える力につなげているか、今後も研究 をすすめていきたい。

本題材は実物作品を取り入れた鑑賞授業で

成果と課題



秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 [秋田県 | 国立] むすんでつなげよう

授業を行う教員 | 櫻田佳枝、髙橋基裕(中学部主事)、本多勝成(中学部1年担任) 目黒晃子(中学部1年担任)、樋渡実由梨(中学部2年担任)、伊岡森真由(中学部3年担任) 対象学年 | 中学1-3年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年6月 単位数 (単位時間) | 6時間 場所 | 屋内(教室)

授業概要

- 指定された数の点を好きな色のペンで画用 紙に打つ。点を直線でつないで形を作り、 できた形の中に色鉛筆や絵の具を使って、 好きな色を丁寧に塗る。
- できた形を見て自由にイメージを広げ、切り貼りして色画用紙上に表す。

ねらい・目標

絵を描くことに苦手意識をもち、人物画や 行事絵などに抵抗を示す生徒が多かったため、 偶然できた形や色を楽しみながら作品を仕上 げられるようにした。

- 自由な発想で点と点を結んだり、丁寧に色を塗ったりすることで、きれいな作品に仕上げる喜びを味わう。
- 友達の作品を鑑賞し、よさや工夫に気付いて、言葉で伝えたり、自分の作品に取り入れたりする。

活動

1.6~7人のグループを作ってテーブルに円形に座る。画用紙の裏に自分の名前を書く。

- 2.教師が打った手拍子の数を数え、同じ数の 点をペンで画用紙に打つ。
- 3.「おとなりへ」の合図で隣の友達に画用紙 を渡す。
 - 4.手拍子の数の点を画用紙に打ち、隣の友達 に渡す(自分の画用紙が戻ってくるまで繰り 返す)。





- 5.自分の画用紙が手元に来たら、点と点をペ 自分の絵を見られることに抵抗がある生徒が ンでつなぐ。 多い。これは、図工の授業に苦手意識があっ
- 6.できた形をよく見て、色鉛筆で色を塗る。 7.はさみで切って色画用紙に張り付けたり、 余白に絵を描き加えたりして仕上げる。

作品の評価・フィードバックの仕方

友達の絵をよく見て、好きなところ、工夫 しているところなどを書いた「いいねメモ」 を貼る。

成果と課題

小学校での6年間を経てから、特別支援学 校に進学した生徒の中には、絵を描くこと、

多い。これは、図工の授業に苦手意識があったり、周りのみんなのように「うまく描けない」と思っていることが背景にあると思われる。手拍子を数えて点を打ち、色を塗るという活動は、上手下手という視点で評価されないため、全員が安心して取り組むことができた。友達と画用紙を交換することで予想外の配置になり、線でつないで出来上がる意外な形を楽しんでいた。カラフルに塗り、コラージュすることでそれぞれが面白い作品に仕上げることができていた。鑑賞の際は、友達の作品をよく見て感想を交換することができていたが、具体的な観点の例を言葉で示すことで、作品をどのように見ればよいかを考えることができると思われる。



鑑賞

弘前大学教育学部附属特別支援学校[青森県|国立]

「つむつむしよう!」

授業を行う教員 | 松井麻佐江(教諭) 主な助手・スタッフ | 前田亜里沙(教諭) 他2名 対象学年 | 中学1-3年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2017年7月 単位数(単位時間) 8時間 場所 | 屋内(美術・図工室)・屋外

授業概要

様々な形、色、大きさの木端(建築資材) を材料として、自由に積み重ねて立体作品を 作る。机上での自分の作品作りをスタートに、 3.鑑賞:自分や友達の作品を鑑賞する。良い 徐々に友達と連結して大きな作品とし、最終 的には屋根のかかった半屋外で高低差を付け て制作、展示をする。

ねらい・目標

木端を積み重ねる際に、ボンドや釘は一切 使用せず、授業終了時には全員で崩し、元通 りに袋にしまうため、同じ作品は二度とでき ない。だからこそ、その時その時に選び取っ た木端の色や形をヒントに、それぞれじっく りと、また直感的に発想や構想し、積み重ね ていくプロセスを楽しむ。造形的なよさや面 白さに気付き、創造活動の喜びを味わうこと で、豊かな情操を培う。

活動

1.導入:材料や用具の準備。軍手をはめる。 小屋から木端の入った袋を運ぶ。約束事 (投げない、振り回さない。) や、作品の見方 (四方から見る。)を確認する。

- 2.展開:木端を選び、積み上げ、制作する。袋 から使用したい木端を取り出し、自分の机 へ運ぶ。自由に積み上げながら作り上げる。
- と思った作品や気に入った作品について発 表する。
- 4.片付け:作品を写真撮影後、崩し、袋にし まう。袋を小屋へ運ぶ。

単元としては、机上での1人分の作品作り →グループでの作品作り→全員での作品作り →半屋外での高低差のある作品作り、と規模 を拡大していく。半屋外での作品は一定期間





展示する。最後にこれまでの写真を基に鑑賞 会を行う。

作品の評価・フィードバックの仕方

作品そのものだけでなく制作過程も評価す る。どんどん積み上げ大きくしていく生徒や、 積んでは崩し積んでは崩しを繰り返す生徒な ど様々だが、その表情から、考えながら制作 している、工夫している、気付きがある、集 中している、楽しく活動している、充実感や 達成感を感じている等を読み取り、評価対象 とする。作品からは、バランスのよさや独創 性、テーマ性、美しさ、面白さ等を評価する。

毎時間ごとに鑑賞の時間を取り、生徒同士 の相互評価を行う。制作過程や作品は全て写 真に収め、最終日に鑑賞会を行う。鑑賞会で は付箋にコメントを書き、気に入った写真に

貼り付け発表する。

成果と課題

材料となる木端は、一つとして同じ物がな いため、生徒は毎時間どんな作品ができるか ワクワクしながら授業に臨んでいた。木端同 士がぶつかる音や木の匂いもまた、心地よい 空間作りの一要素となった。並べる、積み重 ねる、と単純な活動であるため、障害の程度 にかかわらず参加することができる。絶妙な バランスで積み上げられたときの歓声や、う っかり崩れてしまった時の落胆の声が響く中 で、思わぬ造形作品が出来上がり、生き生き と活動している様子がうかがえた。壊してし まうときの儚さと、新しい作品ができたとき の喜びから、生徒にとって楽しみの一つであ る学習となっている。















栃木県立足利高等学校 [栃木県 | 公立]

「藍染め」制作

授業を行う教員 | 林 美希(教諭) 対象学年 | 高校1-3年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | --

単位数(単位時間) | 2単位(18-21時間) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

藍染めで布の染色をする。いきなり本番の 布を染めるのではなく、試し染めを何度か行 い試行錯誤を促す。

ねらい・目標

いきなり本番の布を染めるのではなく、試 し染めを何度か行い試行錯誤を促すことで、 意図に応じて表現方法を創意工夫し、個性豊 かで創造的に表すことができるようにする。

活動

- **1.導入①**: 藍染めについての DVD を鑑賞し、 藍染めの長い歴史の中で引き継がれてきた 材料、技法、方法、様式などによって美を追 求し表現しようとする工芸の活動について学 び、藍染めの伝統と文化に対する見方や感 じ方を深めることで制作への意欲を高める。
- 2.導入②: 試し染め1。版画制作などに使わ れるウエス(白い布の小さな端切れ)を使い、 自由に技法をいくつか試す。布に藍が染ま る仕組みや、どうしたらきれいに染まるの かを考えながら試行錯誤する。

- 3.導入③:コンピューター室で藍染めの様々 な技法を調べ、作品の構想を練る。
- **4.展開:**作品のアイディアスケッチ(2時間) →試し染め2(2枚)→試し染め3(原寸大) →本番用布

表現の意図に応じて材料や技法、用具など を総合的に考え、吟味して創意工夫する。調 べた技法の通りに制作するだけでなく、構 想や表現の意図に応じて様々な技法を応用 したり、工夫を繰り返すことで自分の制作 方法を見つけ出したりして、創造的に表す。

5.まとめ | 鑑賞・題材のまとめ: 鑑賞は2階 の音楽室前に生徒自ら作品を展示し、行っ た。題材のまとめは、毎授業のリフレクシ ョンや試し染めの布、アイディアスケッチ 等を見返して本題材を振り返り、各自まと めた。作品は完成しておわりではなく、学 習をより深めるとともに、次の制作に生か したり関連づけて学んだりすることができ るよう、一つの題材がおわるごとにまとめ を制作するようにしている。

作品の評価・フィードバックの仕方

毎授業最後の5分間で生徒が行うリフレク ション(振り返り)から生徒の思いや願い、工 夫などを見取り、途中制作の過程を観察しな 造的に表すことを具体的な目標にしている。 がら評価・指導を実施した。評価は出来上がっパンフレットや本、インターネットやDVD た作品・試し染めやアイディアスケッチ、リフ レクションなど、途中成果物全てを含めて行う。では、目標に対して不十分であると考えた。

成果と課題

美術で身につける「思考力・判断力・表現 力 | のうち、造形的なよさや美しさ、表現の 意図と創意工夫、美術の働きなどについて考 えることを目標として授業を考えた。今回の 藍染め制作では工芸分野ということで、さら に、意図に応じて制作方法を創意工夫し、創

などの資料を活用してその通りにつくるだけ 実感を伴いながら理解を深めるようにするた めには、理論の学習と、実技の学習を相互に 関連づけることが有効であると考え実践した。 昨年よりも試し染めの回数を増やしたり、理 論学習と実技学習の時間を交互に設けたりし たことで、生徒は表現の意図に応じて様々な 技法を応用し、自分の制作方法を見つけ出す 姿が多く見られた。



幼児

愛知県立起工業高等学校[愛知県 | 公立]

技術の高度化に対応するリテラシーである、思考力・判断力・表現力を育成するための言語活動の充実に関する取組事例

授業を行う教員 | 疋田仁美 対象学年 | 高校1-3年 教育領域 | 専門教育

実施時期 | 通年・3学年共通(専門高校・専門科のため)

単位数(単位時間) | 4単位 - 6単位 場所 | 屋内(美術・図工室)・その他

授業概要

技術の高度化に対応したメディアリテラシーを涵養する思考力・判断力・表現力を育成するための低コスト授業。

ゲーム形式の協議・協働活動。教育コンテンツ利用・フィールドワーク・検証実験など 多元的な学習活動を通じ主体的に学ばせるアクティブラーニング。

ねらい・目標

実践にあたり以下の3点を主な学習効果として挙げる。①ゲームで意欲的に楽しく取り組める②学習内容の定着度が向上する③多文化共生社会における生きる力を育む。これらの活動の核となるのが、褒める装置としてのゲーム性である。班対抗のゲーム方式を取ることで、生徒に内面的・社会的報酬を与え学習意欲を引き出す(ここでのゲームは各班が仮想対立構造を作り目的の達成のため使用可能な学習資源のマネージメントを行うことを指す)。学習活動を通じ、生徒の意思疎通能力、協調性などを伸長させるだけでなく、学習資源を生徒自らが他者に発信する活動をすることで

記憶を定着させる。

活動

2年実習「アクティブラーンニング講評会」 (*パフォーマンス課題)*実習「作品講評会」 の改善(PDCA)

政善のねらい: 日頃楽しく作品制作に取り組む生徒達から恐れられている定例行事、それが講評会である。昨今の比較を避け個に応じた教育を受けてきた生徒にとって、自作を他作と比較し客観的に判断し内省する講評会は、経験値が少ないためか苦痛に感じられるという。しかしものづくりの現場は相対評価によって成立している。比較され優劣をつけられ選ばれるという実務社会の現実を垣間見させ、講評会の持つ教育的効果を苦痛に感じさせず与えたい。

方法: 従来どおりの作品公開陳列の後、会社と称し班分けをし、会社間で作品を交換。 発注側と請負側に分かれて、互いの作品の良い点を分析させ、改訂案を他者作品上に仮留めした透明なシートに描かせ改定案作品として企業での企画会議の体裁でコンペ形式の提 案発表をさせる。

成果と課題

効果と検証:従来方式の講評会では、自作の講評時以外は集中して傾聴できない生徒が発生し発問しても、当たり障りのない紋切り口調の返答が多かったがこの改善により、改善案を制作する作業が課せられているため、全員が終始、他作についても当事者意識を持って振り返ることができた。また、生徒間の人間関係に配慮し会社と銘打ち班単位での提案・発表としたことで、活発な言語活動が行われた。加えて生徒相互の責任感から高い制作意欲が引き出せ、他作の改訂解説を課した事で、生徒のデザイン用語語彙が豊富になる効果も得られた。





秋田公立美術大学附属高等学院[秋田県 | 公立]

美術川「フィルムカメラで運身の一枚を撮る」 大森山動物園のもう一つの魅力"飼育員さん"を撮る & 直島のフォトパンフレット制作

授業を行う教員 | 澤田弦吾(講師)、岡 知代(講師) 主な助手・スタッフ | 船橋陽馬(M部講師) 対象学年 | 高校2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 5月-2月 単位数(単位時間) | 2単位 場所 | 屋内(美術・図工室)・屋外

授業概要

フィルム一眼レフカメラを使用した写真の 授業である。カメラの使い方から現像の仕方 までを2年生全員が学習し、撮影・現像を行 う。カメラは地元新聞を通じてカメラの寄贈 を告知したところ、全員が使える台数のカメ ラが集まった。学内で撮影の練習・現像を行 った後、地元の大森山動物園に協力を仰ぎ、 動物園のもう一つの主役である飼育員の魅力 を探し、撮影・現像を行った。また、修学旅 行先である直島で地元の方々に取材し、撮影 を行う。撮影した写真をもとに直島のフォト パンフレットを作成する。

ねらい・目標

1.写真の授業を通して、映像メディア表現に 関心をもつことができる

【関心・意欲・態度】

2.撮影対象者との対話を通じて、コミュケー ション能力を高めることができる

【関心・意欲・態度】

3.カメラ・現像の作業を通じ、技術・技能を 身につけることができる【創造的な技能】

4.フィルムカメラを使用し、構図や露出などを 考えて撮影するできる【発想や構想の能力】

5.作品展示を通じ、見る人の気持ちを考えた 展示を工夫することができる【鑑賞の能力】

活動

- 5月 外部講師による写真の授業のガイダン ス(新聞社の取材:カメラの寄贈の告知 を呼びかけてもらった)と技術指導(シ ャッタースピード、絞り、感度など)
- 6月 学内でカメラの使い方・現像の仕方を 実践する。
- 7・8月 夏休み中を活用して、動物園で撮影を 行い、学校で現像を行う。地元の大森山 動物園に協力を得て、飼育員さんを撮



9月 外部講師による写真の講評を行い、動

影。撮ったフィルムの現像は学校で行う。

- 物園での作品展示を行う。
- 12月 修学旅行で訪れる直島で地元の方に取 材をして撮影を行い、それをもとにフ ォトパンフレットを制作する。
- 2月 本校の展覧会で展示し、外部講師を招 いて講評会を行う。

作品の評価・フィードバックの仕方

- 1.写真の授業を通して、映像メディア表現に 関心をもつことができる。
- 2.撮影対象者との対話を通じて、コミュケー ション能力を高めることができる。
- 3.カメラ・現像の作業を通じ、技術・技能を 身につけることができる。
- 4. 構図や露出などを考えて撮影することがで きる。
- 5.作品展示を通じ、見る人の気持ちを考えた 展示の工夫をすることができる。

成果と課題

課題としては、フィルムカメラの導入1年 目で、機材の準備が間に合わなかったことと、 教員の技術がスタート時点で足りなかったこ とである。

成果としては、地元の動物園の協力が得ら れたことと、修学旅行を見通した授業に取り 組めることである。また、地元新聞を使って カメラの寄贈を呼びかけたことでかなりの反 響があり、メディアの活用によって授業実践 なども広く伝えられることが分かった。

次年度からは、外部講師による技術的な指 導の時間を拡大することで作品の仕上がりを 期待したい。また、地域連携として今後も動 物園や商店街などを巻き込みながら、地域で の課題を共有し、地域の方々と協働で授業を 行い、ねらいの達成を目指したい。



大阪商業大学高等学校 「大阪府 | 私立]

幼稚園協力授業 木エパズル制作 コミュニケーションによるモノ作りとデザイナーの職業体験

授業を行う教員 | 久語民雄(美術科専任教員) 対象学年 | 高校2年 幼稚園 年中

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 8月-12月(2007年から毎年実施) 単位数(単位時間) | 2単位(50分×2) +夏休み宿題 場所 | 屋内(美術・図工室)・その他

授業概要

幼稚園児(系列校の大阪商業大学附属幼稚園、 力や社会、歴史的な背景を学ぶ。 年中組)を依頼者・消費者に見立て、コミュ ニケーションを何度も取り、それと材料、加 サーチし、子どもの反応もチェックしてレポ 工方法の観点からもデザインを考えた木工パ ート提出。 ズルを作る。デザイナーの職業体験。

ねらい・目標

- 園児とのコミュニケーションによって要望 や意見を取り入れ、自分の作品を振り返り、 に高校生のパフォーマンス。園児4~6名を 安全で役立てる遊具や教具として評価され 高校生1~2名で受け持つ。アイデアスケッ るデザインを考える。
- 材料の特性とその加工方法がデザインに影 児の反応をレポート(配点大)で提出。 響する事を知り、工夫し、生かす。
- 自分の作品を待っている人のために作ると いう精神的に贅沢な幸せを味わい、将来の 夢と進路決定にも役立てる。
- 園児との交流毎に振り返りを行い、文章に よる表現や記録の大切さを知り、拘る。

活動

コミュニケーションを通して「他者の意見 た木エパズルで園児と遊ぶ。作品の出し方、

や希望 | を取り入れた作品制作の予告。

玩具博物館を見学し、様々な玩具とその魅

最初は「おもちゃ」の市場商品を売場でリ

プロのデザイナーのTV番組を視聴し、デ ザインの流れ、依頼者・消費者とのコミュニ ケーションの取り方を学ぶ。

1回目の交流【高校生→幼稚園】: 入室時 チを園児に見せ、意見やダメ出しを貰う。園

その後、材料の特徴と加工方法も学び、園児 の意見を生かしたデザインを何度も考え直す。

2回目の交流【園児→高校】: 園児が制作 中の高校生を見て回り、交流する。高校生は 自分の作品を待っている園児を再確認し、喜 びを味わう。

大道芸人によるパフォーマンス講習を受け、 後日の園児との交流に生かす。

3回目の交流【高校生→幼稚園】: 完成し

プレゼンも工夫し、園児の反応をチェック。 気付いた事等を、後日レポート提出。

4回目交流【高校生→幼稚園】: お礼の寄 せ書きをプレゼント。

可能なら、各交流では触れ合い遊びや昼食 を一緒に食べ、親睦を深める中で愛情を作品 に反映させる。

作品は展覧会(3学期)や授業報告新聞で発表。 幼稚園児への指導は、幼稚園教員の協力が 必要となる。

作品の評価・フィードバックの仕方

園児との交流で園児からの情け容赦ない発 言、褒められる発言等がある。

また、園児は木工パズルに夢中になるが、高 校生はそれを見ると自信が付き、嬉しく感じる。

高校教員側の評価は、「木工パズルの優秀 さ(デザイン性、完成度、安全性、耐久性、教具 の価値等) | だけでなく、各交流後の「振り返 り」で書いた「レポート」も評価対象。

成果と課題

成果:毎年とても好評。生徒がコミュニケ ーション自体を楽しめる様になる。

また、「今までの作品が独り善がりだった」 と戒める事。自分の作品を客観視し、コミュ ニケーションによるモノ作りの新しい喜びと 可能性に気付く。

課題:授業内容をより良くするために学習 量が増え、授業時間が不足。無駄を省き、一 層効果的な授業運営が必要。社会への還元内 容の模索。





宮城県宮城野高等学校[宮城県 | 公立]

パッケージデザインを考える

授業を行う教員 | 丹羽 裕(主幹教諭) 対象学年 | 高校1年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年4月-7月 単位数(単位時間) | 2単位(16-20時間) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

既存のお菓子のパッケージデザインの工夫、 販売方法など販売促進に必要な要素を調査 し、デザインの働きについて理解を深める。 表現の意図や工夫、その多様さを理解す るために、各生徒に目的や機能を踏まえて 工夫した点や着眼点など、作品についての プレゼンテーションをしてもらった。

ねらい・目標

- 身近なパッケージに関心を持ち、色彩の効 果や形体の役割を理解する。

【関心・意欲・態度】

- デザインの情報伝達性を理解し、既存のデ ザインを基に創造的な表現の構想を練る。 【発想や構想の能力】
- コンピュータや描画アプリケーションなど の特性を生かし、目的や意図に応じて視覚 的な表現方法を工夫する。【創造的な技能】
- パッケージのよさや美しさ、生活や社会を 豊かにするデザインの働きについて考え理 解を深める。【鑑賞の能力】

活動

導入:グループを組み、「新しいお菓子を 考えよう」というテーマでアイデアを出し合 う。一つに絞ったアイデアを言葉やイラスト などで表現し、プレゼンテーションを行う。

展開:

- お菓子のパッケージデザインの要素を考え る。お菓子メーカーのホームページを参照 し、商品を売るための色彩やデザインの工 夫、販売方法などを分析する。
- Adobe Photoshopの使い方を学ぶ。
- 既存のパッケージを分解し、色彩やロゴタ イプを変化させながら、研究・分析をする。
- これまでの調査をもとにパッケージをリデ ザインする商品を決め、再調査する。
- 内容物やターゲットを考えながらパッケー ジのイメージを考える。アイデアスケッチ を行い、デザインコンセプトを設定する。
- アイデアスケッチや既存のパッケージのス キャンデータをもとに Photoshop で新し いパッケージデザインを制作する。最後に プリントアウトし、組み立てて完成。

まとめ・鑑賞:

- 全体の制作の流れを振り返り制作過程につ いて、よくできたところを伝え合う。

作品の評価・フィードバックの仕方

関心・意欲・態度:パッケージデザインの 目的、条件などを考え、表現することに関心 を持ち、主体的に取り組んでいる。また他の 生徒の作品から表現の多様さやよさ、美し さを感じ取り、理解を深めようとしている。

発想や構想の能力:形、色彩などの構成を 工夫して視覚的な構想を練っている。

創造的な技能: 材料や用具の特性を生か し、意図に応じて視覚表現を工夫し、見る相 手に情報を伝えようとしている。

鑑賞の能力:他の生徒の作品の意図や表現 の工夫を感じ取り、生活や社会を豊かにする デザインについて考え理解を深めている。

既存のパッケージやイメージの存在が強く、うに意識させる必要である。 オリジナリティを出すのが難しい。既存のも のにとらわれず発想させるために、グループ ディスカッションの時間を多く取り入れた。

成果と課題

成果:普段は見過ごしてしまうパッケージ

をよく観察したり、内容物とのマッチングを 考えたりすることで、パッケージをデザイン することへの関心や意欲を高められた。

調査を通して、商品やパッケージに施され た工夫を考察しデザインの働きについての理 解を深めることができた。また、それにより パッケージデザインに対する考え方に変化が あらわれ、自己の表現に生かすことができた。

課題:パッケージのリデザインをテーマに 作品を制作したが、限られた時間の中で既存 の商品をもとにどこまで変化させ、作り込ま せるかを検討する必要がある。とくに制作時 のICT機器の利用は、生徒の能力を十分把握 し、取り入れ方を工夫する必要がある。

形態や色彩や配置など、具体的なデザイン を考える際には、常に客観的な視点に立つよ

グループワークなど協動的な学習を充実さ せ、主体的な学びを高める研究により時間を かけるべきであったと考える。

題材に関連する他教科と連携することで生 徒の言語活動が一層発展し、表現力や鑑賞能 力が高まると考えられるため、教育課程全体 の視点に立って指導計画を考える必要がある。







097

埼玉県立新座総合技術高等学校 [埼玉県 | 公立] 夜行高速バス「ブルーライナー」のデザイン

授業を行う教員 | 青木邦眞、坂田希究、関野栄美、並木通男 対象学年 | 高校2年、3年 教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2015年 単位数 (単位時間) | --場所 | 校内(デザイン実習室)、 校外(フィールドワーク)

授業概要

096

平成27年度、埼玉県教育委員会では、職業教育を主とする専門高校や総合学科高校が、学校・学科の枠を超えて「商品開発チーム」をつくり、企業と連携して新商品の企画開発や販売などに取り組む「実践的職業教育グローバル事業」を実施した。この事業において、本校デザイン科生徒12名と総合ビジネス科生徒8名で構成するチームが企業と連携して、夜行高速バス「ブルーライナー」の内外装およびサービスのデザインに取り組んだ。

ねらい・目標

ターゲットは、夜行高速バスを一番多く利用する20代後半女性とし、「安心」「安全」をコンセプトに商品開発を行った。車両をデザインするにあたっては、単なる外観のデザイン(ラッピングバス)にならないようデザインコンセプトをしっかり考えていくことにした。「どのようなデザインにするのか」である。

活動

1.情報の収集・調査 2.コンセプトを立てる 3.企画提案 4.具体化 の4段階のステップで取り組んだ。情報の収集・調査では、バス会社へのインタビューや夜行バス乗車体験などのフィールドワークを行った。特に夜行バスを知らない我々(生徒と教員)は、その実態調査のために埼玉から大阪まで0泊3日の夜行バス体験ツアーを行った。人と直接会って話を聞いたり、実際に顧客の立場になって体験するなどの行為は、生きた情報を得ることができる。人間はさまざまな感覚を組み合わせて一つの体験として捉えているので、現場に行ってはじめてわかる雰囲気も含めてインプットとして大切にしていかなければならないと感じた。

コンセプトを立てることと企画提案はワークショップ形式で行った。ワークショップでは意見の拡散と収縮を繰り返し案を煮詰めていった。意見が出しやすいよう3~4人の小グループで行い、マインドマップ、ブレーンストーミング、ペルソナなどの手法を用いて多様なアイディアを出していった。

作品の評価・フィードバックの仕方

具体化では内外装とサービスのデザインに取り組んだが、具体的なデザイン試作を含めながら行うことが多く、人の意見をその場で絵に表すことができる生徒の活躍が目立った。特にイラストやデザインがコンセプトを牽引する場面もあり、上手下手よりもアウトプットに抵抗がないことの方が重要であると感じた。また、高校生のデザインである以上、高校生の感度を大切にすることになるが、指導する側にとってその加減は大変難しい。

成果と課題

学生時代では一人で行うデザインの課題が中心になるが、社会に出ると誰かとコミュニケーションせずにモノが生み出されることはない。実際、デザイナーの仕事の中には関係性をよくするための工夫や構造を考えていくことも含まれていくことになる。この事業を通じて他者とのかかわりの中でモノが出来上がっていくことを経験した生徒たちの今後の活躍を期待するとともに、デザイン教育の広がりと一般化に向けた活動に発展させたい。







筑波大学附属高等学校 [東京都 | 国立]

川になる(美術1)ジュゼッペ・ペノーネの鑑賞と制作

授業を行う教員 | 小松俊介 対象学年 | 高校1年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年6月

単位数(単位時間) | 4時間(50分×4) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

ジュゼッペ・ペノーネの作品「川になる 3」(いわき市立美術館蔵作品)を題材に作品制作を通して鑑賞を深める。対象作品は、河原にある石を星取り法で模刻し、本物の石と模刻した作品を並べて展示したものである。授業では、石ではなく紙粘土で模刻し、三原色カラー(アクリル絵の具)で彩色を施す。最後に本物の石と制作した石を並べて鑑賞する。作家の作品制作への取り組みを追体験することで、作品の本質へ近づき共感することを目指した。

ねらい・目標

「自然石をコピーして実際に並べる」と頭で考えると大したことはなさそうであるが、 実際に本物の石を交えて作品を並べると、本物と偽物の境がわからなくなる現象が起こる。 本物の石が偽物っぽく見えてきたり、本物と 思って手に取ると軽いといった逆転現象が起こる。自然石には同じ形の物は存在しないという当たり前のことであるが、私たちがいかに対象を漠然と認識しているかということに気づかされる。ペノーネの作品を通してコン セプトを楽しむような取り組みにする。現代 アートを楽しむための導入題材にしている。

活動

- 1.ペノーネの作品鑑賞:ペノーネ作「川になる3」の鑑賞スクリーンに映して生徒にどのような作品か考えさせる。意見を吸い上げて、同じ形の石であることに気づかせ、全く同じ形の自然石があることへの疑問を投げかける。その後、作品のコンセプトの説明を聞き、理解する。(10分)
- 2.模刻:河原で拾った石(形や色は様々)から一つ選択し、紙粘土で模刻する。石は両手で握れるサイズなので触りながら石の形を確かめる。高さや幅、地面との接地面の形もよく観察させる。ヘラを使って面の意識をもって模刻する。(90分)
- 3.彩色:色料の三原色について知識としては 理解していても実際に色を作る機会はそう 多くない。自然石の複雑な色味を観察しな がら三原色+白で色を重ねながら彩色を施 す。紙粘土の白地をすべて覆い尽くし、色 が塗られることで重厚感が増してくること を楽しみながら制作する。(80分)
- 4.鑑賞:実際に制作した作品と本物の石を無

作為に並べる。意見交換や感想を述べ合う。 色では三原色カラーを用いることで「色をつ展示の方法について検討する。 くる」という意識が強調され12色入りの従

作品の評価・フィードバックの仕方

模刻・彩色の部分での評価や、自己評価及び鑑賞カードによる評価・フィードバックを中心としている。形態については、対象の石の特徴を捉えているか、凹凸や形の変わり目が模様のように表面的になっていないか、などに注目する。彩色に関しては、実際の色と離れていても、現実味を帯びて存在させることができれば良しとしている。鑑賞では作品を個々に鑑賞するのではなく、全体を無作為に並べることでより自然の状態に近い形式で鑑賞を行い、非日常の違和感を感じられるように工夫している。写真で撮影すると本物と偽物の境界がよりわからなくなる。

成果と課題

石という自然物を対象にすることで、客観 的に形態や色彩を観察することができる。彩 くる」という意識が強調され12色入りの従来の絵の具セットを用いるよりも複雑な色味を表現することができた。この三原色カラーを使用した展開は、他の題材にも応用できる。

この題材の主眼は、ペノーネの作品についてコンセプトの面白さや重要性に気がつくことにある。作家のコンセプトに基づいて作品を制作し、目の前に出現させたことで写真では伝わりきらない作品の魅力を体感することができた。制作を通した鑑賞活動の一つの型として、可能性が見えてきた。学習評価については、フィードバックの方法も含めて今後の課題である。





キラキラ

東京都立工芸高等学校「東京都 | 公立] デザイン実習(写真)「写真集をつくる」

授業を行う教員 | 川人 武(教諭) 主な助手・スタッフ | 小平雅尋(市民講師) 対象学年 | 高校3年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月 - 10月 単位数(単位時間) 5単位(30-35時間) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

3学年の写真選択講座で実施する発展的制 作課題。写真集の作成を目標に、撮影を授業 時間内外で継続して行う。各自で撮影、プリ ントした5枚の写真を毎回の授業で机上にな らべ、質問や感想を述べ合ったのち、廊下の 与えられた壁面に自由に貼り付け展示する。 この作業を継続する中で写真表現における自 身のテーマや視点の獲得を目指す。展示した 写真から使用する写真を選別したのち、編集 ソフトを使用し、写真集の入稿データを完成 させ、印刷業者に外注、製本する。

ねらい・日標

- 写真を通して自然や社会に対し関心の目を 向ける視点の獲得、興味関心を抱くもの・ ことの発見
- 写真表現に必要な知識・技術、および関連 する自然科学分野の学習

主な学習内容

- **テーマ設定:**自身のテーマや視点の獲得 (自分の身の回りで起こる出来事や社会が抱え る課題に目を向ける)

- 写真表現:カメラの使用方法および撮影技 法、ライティング、色調補正等の技法
- 造本・印刷:紙および製本の種類、特性
- **デザイン:**紙面の構成、タイポグラフィー
- 発表の技術:展示、口頭発表などによるプ レゼンテーション

活動

- スタジオや屋外等で随時撮影を行う。撮影 した写真の中から5枚を選び、毎週の授業 に持参する。
- 生徒が持参した写真を机上に並べ、互いに 鑑賞したのち、廊下の壁面に見せ方を工夫 しつつ自由に展示する。
- 自身の撮影スタイルや好む被写体を徐々に 見つけ出し、写真集のテーマを具体化する。
- 有名な写真家による写真集を定期的に紹介 し、プロの作品に対する見方、考え方に触 れる。
- 写真集に使用する写真のセレクション、 PCを使用した写真集の編集作業。
- 写真集の印刷入稿、文化祭における写真集 の展示

作品の評価・フィードバックの仕方

- 毎回持参する写真作品について、教員コメ ントによるフィードバック
- 壁面に展示した写真についての自己評価
- 壁面に展示した写真についての外部(廊下 を通る他の教員や友人) からの評価
- 入稿前の写真集データ確認、教員コメント によるフィードバック
- 完成した写真集のプレゼンテーション、教 員コメントによるフィードバック
- 完成した写真集の作品展示 (文化祭)、外 部(他の教員や友人、来場者)からの評価

成果と課題

撮影及び撮影した写真の恒常的な展示、写 真集の作成及び展示により、鑑賞する他者を 意識しつつ自身の作品と向き合い続ける作業

を作品制作の中で行うことができた。写真は 自己と外の世界との関わりを可視化し、自分 の視点を広く社会に開くことのできるメディ アであり、写真表現への興味をきっかけに、 様々な教科にまたがる学びのモチベーション を発動させることが今後の目標である。





栃木県立足利南高等学校[栃木県 | 公立] クラフトデザイン: 和紙「育てる紙」

授業を行う教員 | 野口徳雄(教諭) 対象学年 | 高校3年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2018年、2019年 単位数(単位時間) 2単位 場所 | 屋内(美術・図工室)・屋外

授業概要

クラフトデザイン|陶芸・木工・金工・和 紙(鑑賞・「育てる紙」): 自校の中庭の畑で育 てた楮やトロロアオイを使用して紙漉き体験 をする。複数の本物の和紙の鑑賞と合わせて、 自ら作る足利南高校100%の和紙のしおりに、 1年間の共に過ごした光や風を感じつつ、伝 統文化や風土、環境などについても考えを深る活動でもある。 めていく。

ねらい・日標

和紙や手漉紙を知るためには、本物を使用 したり、直接触ったりするのが一番である。 日本産の伝統的な和紙の素材を使用し、日本 の和紙の産地で熟練された職人の手漉きの技 によって漉かれた紙を和紙度100%というな らば、私たちの周りにはどれ程の和紙度100 %の紙があると言えるだろうか。本物に触れ るのであれば、生徒と共に、生徒自身と近し い自校で育てた素材を使い、伝統文化や風土、 環境などの未来につながる和紙を作り味わい たいと考えている。また、その年々の和紙の 味わいを楽しむことのできる感性を育む切っ 掛けとしたい。

活動

和紙の主要な素材である楮と流し漉きに必 要なトロロアオイを学校の中庭の畑で育てて いる。これまで授業者自身が訪問した東日本 の和紙の産地では、自ら育てる、もしくは地 域で育てている地元の楮を大切にしている。 それは楮を育てると共に、風土や地域を育て

生徒と同じ時間と光と水などの環境を共有 する素材で、年度末にしおりなどを作る。合 わせて複数の本物の和紙と市販されている 洋紙を一緒に鑑賞し、それぞれの産地や素 材、用途なども確認する。そして伝統文化や 風土、環境を考えると共に、自らの学校(足 南)100%の紙を味わう。

地域には飛駒和紙があり、地元の産地の楮 の株を分けてもらっている。管理職の許可 を得て畑を開墾。2018年度の生徒は4月に 石拾いからスタート。本年度は2年目のため、 昨年度からの畑を使用している。

畑作り・種まき

5月 苗の移植・水やり

6-9月 草むしり・水やり

10月 トロロアオイの根を冷凍保存

12月 楮の刈り入れ 1月(4時間)本物の和紙の鑑賞・楮を煮て 皮剥ぎ・黒皮むき・楮の白皮の 煮熟・楮の叩解(手打ち)・紙漉 き(しおり・はがき)・乾燥

作品の評価・フィードバックの仕方

鑑賞活動として、本物の和紙をみたり、触 ったりした印象と、自分たち自身に近しい本 物の素材を使用して作った和紙の印象の違い を言葉にする。また栃木県の多くの高校では 卒業証書として烏山和紙が使用されているこ とを踏まえ、その好ましい使われ方や、これか らの生活に合った使い方などに考えを深める。

成果と課題

大きな意味で、今回の授業を通して、和紙 のもつ多様な価値観を知らせることができる と考える。時代の変化で、日本の木と紙の文 化は、大きく変化している。様々な産業が興 る一方で、淘汰されつつも残されている伝統 文化をどのように身近に感じるかが今後も課 題として残っている。これから20年後には、 現存の伝統的なものが、技術だけでなく素材 や道具などの面からも大きく失われることが 予想される。伝統文化の文化的な側面が、私 たちの未来に大きく影響すると考え、この危 機感と存続の有用性を今後も確認していく。







多様な学び

東京家政大学「東京都」私立

基礎造形「風とあそぶ」「わたしの好きなもの」

授業を行う教員 | 手嶋尚人(教授) 主な助手・スタッフ | 栗山由加(助教) 対象学年 | 大学1年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月 - 6月 単位数(単位時間) 2単位(70時間) 場所 | 屋内(教室)・屋外

授業概要

106

「風と遊ぶ」をテーマとし、作品を野外に 展示すること、自分より大きなものを条件に、 自由に立体・空間作品を制作する。

ねらい・目標

本学に入学してきている学生は、高校にお ける美術教育さえ受けていない学生から美術 大学進学のため専門的に学んできた学生まで、 制作経験に幅があることが大きな特徴のひと つである。1年次の必修科目であるこの基礎 造形では、創作活動の第一歩として、風とい う漠然としたテーマだけを手がかりに、自由 という難しい課題にチャレンジさせる。また、 自分より大きなものを制作せるという物理的 なハードルを設け、かなりのエネルギーをか けた作品制作に挑ませ、これを乗り越えるこ とで自信がつき造形表現活動のスタートが切別に行っている。 れる様にと考えている。

活動

課題説明:「風とあそぶ」をテーマとして 自分よりも大きなものの制作を行う。

- 素材は限定しない。
- 作品は野外(学内指定の範囲)に展示を行 うことも留意した上で制作を行うこと。

実践1:作品展示範囲を見学したのち、作 品のエスキースを行い、制作に取り組む。

実践2:完成作品を野外に展示する。

講評:展示した作品を鑑賞する時間を設け

たのち、教員からの講評を行う。

作品の評価・フィードバックの仕方

作品制作のための材料は、いくつかは共通 材として提供するが、基本的には各自で作品 に適した材料を探すことを期待している。

また、自然の中に配置するということで、 自然に負けない空間を感じる立体作品とする。 制作は各個人であるが、助け合うことは奨励 している。作品の企画・計画段階におけるエ スキスや制作段階での技術的なサポートは個

日曜日に講評会を行い、各自の作品の前に おいてプレゼンテーションを行う。また、後 日、作品に関するレポートを提出させている。

成果と課題

素材と向き合い、イメージを形にすること の難しさや面白さを知り、経験によって自信 を持ち、各々の課題に気づくことで、今後の 作品制作へ取り組む姿勢・意欲を育むことが できたのではないかと考えている。

まで慣れ親しんだ素材を選ぶ様子が多く見ら れるが、身近なものやイメージに沿ったもの を新たに見つけようという素材への関心も引 き出されているようであった。何よりも一人 で作品制作に踏み出す力が養われるのではな いかと考えている。課題としては、授業外にお いても多くの作業時間を要するので、そうし 素材を自由に選ぶことができるので、これた時間での安全管理が重要であり大変である。







109

國學院大學栃木短期大学 × 真岡青年会議所「栃木県 | 私立] 真岡発☆市民による「子どもの絵」の審査会

授業を行う教員 | 名取初穂(國學院大學栃木短期大学 准教授) 対象学年 | 年少 - 中学3年

教育領域 | 美術教育×地域連携 実施時期 | 2016年(平成28) - 現在に至る 場所 | 久保講堂 (栃木県真岡市)

授業概要

國學院大學栃木短期大学美術研究室は、近 年、一般社団法人真岡青年会議所(以下真岡 JC) の青少年育成事業に携わっており、地域 で開催される真岡」C主催のワークショップ への参画や児童美術展の支援を行っている。

本実践は、真岡の美術展*における新たな 試みとして、真岡JC第48代理事長 伊澤学と 筆者が2016 (平成28) 年9月13日、久保講堂 にて、"子どもによる、子どもの絵の審査会" を立ち上げた挑戦的な取り組みである。

この「子ども審査会」は、その後さらなる 進化を遂げながら継続的に行われ、今秋で4 年目を迎えることとなった。

* 芳賀地区(真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町) において真岡JCを中心に1980 (昭和55)年よ り継承される市民運動から誕生した児童美術展

ねらい・目標

まち全体で、「子どもの見方や感じ方」に 耳を傾けるということを大切にしたい。

審査員を務めた子どもには、自身のまちの 文化創造の一役を担っているという主体的意 識の萌芽が見込まれる。また、2017(平成 29) 年度より、公開審査会当日、会場に集った 地元市民による「子ども審査ペんてる賞 |* の選考枠を設置しており、大人も子どもも含 めた「市民」の文化創造への加担を意図した ものである。

*「子ども審査ペんてる賞」:株式会社ペんてる協 賛への謝意を込めて新設した賞

活動

"子どもの声を、大切にしたい。"との想 いから、歴史ある美術展の一角に、子どもた ちが審査員を務める部門を開拓した。また、 かつて同じ場所で、日本で初めての「児童画 公開審査会」*が行われた史実に敬意を表し、 「子ども審査会」を「公開審査」としている。

審査当日、会場となる久保講堂には、放課 後、次々と子どもやその保護者、一般市民の 参観者がやってくる。審査員の子どもたちは、 講堂の床一面に並べられた約1000点に及ぶ 作品(平面・立体)の中から、心に留まった 作品を選び取っていく。そうして最後に選出 した作品について会衆の前で紹介し、選考理 由を自分の言葉で語るのである。

美術展に寄せられた全学年の出品作から選 出することは数量的に困難であるため、審査 対象を年長(または年中)の作品に絞り実施 している。「子ども審査会」後には専門家に よる従来通りの審査も行われるが、子どもた ちが選んだ作品も同様に表彰式にて「子ども 審査特別賞」として表彰される。

今秋の審査会では、会衆の中から「市民審 査員」を募ったところ、初めて大人も子ども も手を挙げた。最年少は、4歳であった。

* 久保貞次郎は1938 (昭和13)年に真岡小学校校 庭に講堂(現:久保講堂)を竣工し、そこで第1 回目の児童画公開審査会を開催した。

成果と課題

真岡は昭和初頭より久保貞次郎(Sadajiro Kubo.1909-1996) の美術教育運動が展開さ れた土地であり、この地で開催される美術 展の審査基準には「創造美育」の視点が含 まれる点が特徴的である。「創造美育」とは 1952 (昭和27) 年に久保を中心に提唱され た民間美術教育運動理念を指し、子どもの個 性の伸長を教育目標としている。かつて、子 どもの絵には独自の意味や価値があるとする 「創造美育」の視点が真岡を起点として日本 全国に波及し、子どもの絵の本来的な価値が 承認されたことは周知のとおりである。

しかしながら、現在の真岡JC を中心に展 開されるムーブメントを俯瞰するとき、「創 造美育 | の理念を継承しながらも、決して過 去の踏襲に留まらず、若きエネルギーは常に 新たな展開を模索し、実現させ続けている。 この、真岡の日々新たなる展開を筆者は「現 代創美」と称し、今後も共に挑戦し続けなが ら参画していく所存である。





工芸基礎 糸を用いて自画像を制作する

授業を行う教員 | 遠藤 透(教授) 対象学年 | 大学1

110

教育領域 | --実施時期 | 2018年4月-6月 単位数(単位時間) | 2単位(90分×8) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

する。布・包装紙・ボタン・ストローなどの 身近な素材でも構わない。

ねらい・目標

自画像を描いた事がある学生に、ペンや絵 の具ではなく、違う素材で自画像を描くこと で表現方法について考えさせる。作業工程を 区切ることでテンポよく進めるようにする。 1年生最初の作品制作であり、多くの素材に 触れ合うことや道具の使い方を学ぶ。

活動

1限目: ①これまで制作された自画像作品の ファイルを鑑賞してもらう。

> ②カメラやスマホで自画像を撮る ③鏡で自分の顔をスケッチさせる。

2限目:① B3パネルにケント紙を水張する

②乾く間に図案を考える。

3限目:①完成した図案を水張りしたB3パ

ネルに描く。

②必要な材料や道具を書いてもらう。

(材料や道具は各自で用意してもらうが、 個人で準備できない道具は大学で用意する)

B3パネルに、ひもを用いて自画像を制作 4-6限目:制作。パネルに各自が持参したひ もやいろいろな素材を両面テープ やのり等の接着剤で付ける。

7限目:作品を完成させ提出する。

8限目:講評会

①作者一人一人に作品の解説をして もらう。

②作品の撮影会を行う。



作品の評価・フィードバックの仕方

作品をみんなで鑑賞し合い、どのように感 じたかを話し合う。1年生の始まりに、自画 像を通して自分がどの様な性格であるのかを 伝えることで、親睦が生まれることを望んで いる。また、表現方法が変わることで素材に 興味を持ってもらうことが狙いである。撮影

した画像を作品集にして鑑賞してもらうこと で、違った味わいを感じられる。

成果と課題

絵画とは違った素材による表現方法を知る ことができたと思う。



113

富山大学 芸術文化学部[富山県 | 国立]

美術科教育法Ⅲ、美術科教育法Ⅳ

授業を行う教員 | ペルトネン 純子 対象学年 | 大学3-4年、大学院1-2年 教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年4月-7月(前学期) 単位数(単位時間) | 2単位(90分×15回) ※2科目を連続して開講しているため、実際には180分×15回、4単位分になっている。 場所 | 屋内(教室・その他)

授業概要

112

美術科教育法Ⅲ及びⅣの中で、美術科の研究 授業を行っている。研究授業の対象者は、高 岡工芸高校デザイン・絵画科の生徒(1回の 授業当たりの生徒数は約40名)。

ねらい・目標

授業目標:教育実習に不可欠な教員の資 質・能力を実践から学ばせ、教育する責任と 喜びを理解させること。

工夫点:グループで研究授業のための指導 案を作成させ、グループで生徒の指導にかか わらせる点。グループで実践させることによ って、単独で指導する際には見えてこない問 題点を見いだせるようになる。

活動

- 高校生に向けた学習指導案(3回分)を作 定める契機になっている。 成する。
- 高校教員とともに研究授業の学習指導 +B31案について検討する。

- 研究授業の準備を行う。
- 研究授業を高校の教室で実践する。
- 富山県立高岡工芸高等学校の教員と連携し、 高校教員とともに研究授業の振り返りをする。

作品の評価・フィードバックの仕方

高校生に対する評価:

高校教員とともに検討。

大学生に対する評価:

研究授業への取り組みを通して行う。

成果と課題

研究授業を受ける高校生にとっての成果:

芸術を学ぶ先輩であり仮教員からの指導は、 通常の教員からの学びよりも直接的な理解を 得られることもある。また、大学進学を現実 的にとらえる契機にもなっている。

研究授業をする学生にとっての成果:

教師の仕事の一部を教育実習に行く前に体 験でき、教員採用試験を受験するか否かを見





多様な学び

新渡戸文化短期大学 [東京都 | 私立] 生活学科 児童生活専攻 3年専攻科 造形表現コース(保育者養成)

絵具の動き 乳幼児の自発的な造形表現=遊びから考える

授業を行う教員 | 浅羽聡美(講師、アトリエル・マタン) 対象学年 | 大学3年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年9月 単位数(単位時間) 3時間 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

114

造形的な活動において、子どもたちは作品 に残すことを意識せず、モノを変化させるこ と自体、また、その行為や刻々と変化する現 象に興味を持つことが多くある。それはとき に作品を残すこと以上に、子どもたちの感性 を揺さぶる。特に絵具は、力や手先の器用さ を必要としなくても無限に変化させていくこ とができる魅力的なモノであるが、子どもた ちが絵具で描くのではなく、絵具で遊びはじ めたとき、その行為を止めてしまう保育者は 少なくない。保育者自身が子どもの感動に共 感できる感性を持ち、遊びと造形表現を切り 分けることなく、子どもの表現行為を捉える ことが求められる。子どもに教えるためでは なく、子どもが自発的に表現する姿を入口に し、自身がさまざまな表現体験を積み重ねて いく年間30コマの授業のうち、2コマを使っ た制作である。

ねらい・目標

技術偏重、作品主義的な美術から解放され、 及する。最終的に3分以内の映像にまとめる。 遊びの感覚を大切に造形表現する経験を重ね

ることで、将来、保育者として子どもの自発 的な表現に、同じ表現者として共感できる感 性を育てる。

活動

導入:1~5才の乳幼児の自発的な表現に おいて、描くことと遊びが切れ目なく行われ ていく動画を視聴する。子どもたちが、絵具 の色彩の美しさ、刻々と変化するその様に心 動かされていることに気付く。

制作:スマホの動画編集アプリの使い方を 確認する。不透明絵具(アクリルガッシュ、ポ スターカラー等)、透明絵具(アクリル、水彩絵 具等)、インク、食紅、水、洗濯糊、サラダ 油、炭酸水、牛乳等を使い、「絵具の動き」 を生じさせ、それを撮影する。準備室の出入 りを自由にし、素材や道具として何を用いて もよく、自分で必要なモノを自宅から持参し て行ってもよい。一人で制作するか、共同で 制作するかは学生に任せる。撮影場所、背景、 ライティングも適宜、考慮し、BGMをつけ、 編集するなどし、映像作品としての表現も追

鑑賞と振り返り:制作された動画をプロジ

ェクターで投影し、鑑賞する。映像ごとに感 想をシェアする。制作を振り返り、制作中、 自分の中でどんなことが起きていたか、また、 こうした造形表現は子どもの育ちにおいて、 どのような意味があるかを考える。

作品の評価・フィードバックの仕方

今回の授業に限らず、作品には優劣をつけ ないことを伝えている。それによって評価を 気にすることなく、自分の感覚に向き合いや すくし、直感的・衝動的に、実験・冒険でき る場をつくる。制作中に適宜、それぞれの表 現に共感を持って、そこから感じたことを言 葉にする。本人の中に表現したいイメージが あれば、それを実現するための技術的アドバ イスをするが、言葉をかけることで集中が途 切れないように配慮している。評価は、制作を 通して起きた自分の中での変化や気付きが意 識され、それを、保育者としてどのように活 かしていくかイメージできているかどうかを、 毎授業の最後の振り返り時に記入するワーク シートで確認する。また、文章力の差を配慮 し、対話的に考えを促し、確認するようにも している。それは、10人程度の少人数の授業 だからできることであろう。

成果と課題

学生の振り返りの言葉からは、授業での自 身の制作体験から、人にとっての造形表現の 意味を考え、将来、保育者として子どもとど のように関わっていくかに思いを至らせてい ることが窺われる。けれど、卒業後、実際に保 育現場に入ると、上司や同僚から理解を得ら れず、子ども主体の表現活動とは程遠い、保 育者主導の造形を行わざるを得ない現状も少 なからずある。私は、保育者養成課程だけで なく、保育士や保護者、そして広く一般に、 幼児教育における造形活動の意味を問う場を さまざまな形でつくっているが、そうした場 がまだまだ足りないことを痛切に感じている。





117

長岡造形大学[新潟県 | 公立]

基礎造形実習 | (5科目)(描写)(造形)(素形材)(デザイン)(複合造形)

授業を行う教員 | 専任教員全員、非常勤講師8名 主な助手・スタッフ|教務補助職員全員 対象学年 | 大学1年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 1年次前期

単位数(単位時間) | 2単位(90分×2コマ×15週) 〈上記副題の5科目があり、計10単位となる〉 場所|屋内

授業概要

初年次教育として、前期を通して描写、色 彩、立体の基礎的な課題を行う。課題は全学 科共通である。1年次学生約250名を、学科 混在で8クラスに分け制作に当たる。後期に は、この前期の成果を踏まえて、学科ごとの 基礎造形実習Ⅱへと進む。

ねらい・目標

本学は多様な学生が入学してくるため、入 学時点での学生の基礎的造形力の修得程度に は大きな幅がある。そのため、全学科の学生 にとって必要と考えられる基礎造形力の底上 げを目的としている。入学時点で修得程度の 高い学生については、さらなる力の向上を目 指す。また半期を通して午前中を毎日この授 業時間に当てることで、作業の反復により制 作に取り組む姿勢を身体に染み込ませていく。 また、課題の組み立ては、描写を行なったら翌 週は色彩、さらにその翌週は立体と、特定の課 題が続かないよう進行する。そして、色彩の 課題で学習した色の仕組みや構成をその後の 着彩や立体に生かすなど、前の課題での学習

が次の課題に繋がっていくよう工夫している。

活動

授業日(月曜日から金曜日までの原則5日間) の毎日午前(2コマ)に受講する必修の授業 であり、1週間で1課題、15週で15課題を 行う。各課題では、用具・画材の扱いを一か ら学習する。例えば描写では、鉛筆の削り方、 持ち方、モチーフに対する体の向き、構図の 捉え方から指導を行い、色彩では絵の具の溶 き方、烏口による美しい直線の引き方、美し い平塗りの仕方、立体では、カッター・定規 の扱い、スチレンボードを図面に沿って断面 が90°、45°になるよう丁寧にカットすると ころからである。これらの作業の中には、コ ンピュータを使えば一瞬でできてしまうのも のもある。しかし、手仕事により作業の精度、 緊張感というものを体感として学生に理解し てもらう。そして、材料の特性・扱い、パー スペクティブ、色彩の仕組みについて学習し、 徐々に自然物の描写や平面・立体における構 成の学習に移っていく。最終課題ではコンク ールを行い、学生の半期の基礎造形力の修得 程度を確認する。

作品の評価・フィードバックの仕方

毎週金曜日に作品講評会を行う。講評会で は、教員が優れた作品ならびに非常に興味深 い作品、多様な視点・感性を感じさせる作品 を選び、コメントする。それにより、学生は 自作の現状を掴んでいく。また、教員は個人 個人の作品についてもコメントし、改善点等 をアドバイスしていく。それを受け、学生は 次課題の制作に生かす。課題は採点した後返 却し、学生は個々の課題の評価・フィードバ ックを確認する。

また、各課題終了時に作品の出来具合・授 業のレベル・授業内容の理解・授業指導内容 の満足度・課題の難しかった箇所・この課題 で得たものについて、授業内アンケートを学 生から取り、担当教員全員で共有および確認 し、次期授業に備える。

成果と課題

初年時に一年次学生全員がこの授業を受講 することで、着実に基礎造形力の底上げが図 られている。これにより、学年が上がり、自 由なテーマ・アイデアを形に起こす課題でも、 作品の質が保たれていると考えている。しか し、この授業は全学科の専任教員で運営し、 きめ細やかに指導を行なっているため、教員 の負荷が大きいということがある。どのよう に合理化していくかが今後の課題である。





武蔵野大学 教育学部[東京都 | 私立]

ART×哲学プラクティス・作ることと哲学することによる探求 あらわれるかたちの意味

授業を行う教員 | 生井亮司(教授) 対象学年 | 小学1-6年、大学1-4年 教育領域 | --実施時期 | 1年次前期

単位数(単位時間) | 2単位(90分×2コマ×15週) 〈上記副題の5科目があり、計10単位となる〉 場所 | 屋内(美術・図工室)・その他

授業概要

本授業は作品制作とそれを反省的に読み解 通して体験する。 く「哲学対話 (p4c)」を循環的に行い、造形 的な制作過程に哲学的なテーマが内在してい ることを実感するとともに芸術体験そのもの を主題化することをめざしている。

また、そうしたテーマを対話的・協同的に 探究することが新たな世界の見え方を開示し たり、制作者自身の変容を促すこと、また他 者をケア的に理解することを目的として行っ ているものである。

本活動の制作では既存の意味や言語的な捉 え方から逃れ、現象そのもの (例えば色や形 そのもの)といった造形要素からの影響を受 けながら、いわば制作者自身が外界からの問 いかけに対応していくかのように制作を展開 できるようにした。

ねらい・目標

りを通して制作することを楽しむとともに、 私自身の考えや感覚が外界と関係すること、 あるいは関係していることこそが「私」のあ り方であるということを実制作と哲学対話を

また、ある「体験」が哲学対話という探求 の共同体の中で語られることによって「経 験 | へと質的な転換が図られることを目的と している。

活動

ファシリテーターの促しによって素材や環 境、あるいは身体的な行為によってなされる 造形活動を行う。

参加者が素材や環境そのものとの出会いが 可能となるようにファシリテーターの発話や 行為には十分な注意が必要となる。

制作(鑑賞)ののちに、哲学対話と行う。

「制作で感じたことは何か」「なぜそう感 じたのか」「もしそうだとするなら、作ると いうことはどういうことかし「それはいつで も成り立つことかしなどといった問いをかさ 素材や環境といった外的なものとのやりと ねていくことで、制作することの面白さや、 奥深さを対話によって探求していく。

作品の評価・フィードバックの仕方

ぬらし絵(にじみ絵)を行った後にその過 程でどんなことが起こっていたのか、 どの ようなことを思っていたのか、というところ から対話を行った。 ぬらし絵は明確な目的 がないところから始められ、刻々と変化する 現象に対峙していくような行為である。そ うした、「目的一手段」の関係ではない制作 体験を言葉にすることは難しいことであっ た。そのため、なかなか言葉にならなかった が、その沈黙の時間が大変に有意義な時間で あった。(語らない、容易に語れないこと)ポ ツリポツリと発せられる言葉はまさに言葉が 生成してくる、新たな自己が生成してくるよ うな過程であった。なんとか絞り出すように、 「まだ世界にないものをつくれる」という発 言には嬉しくなった。

成果と課題

活動の中で制作者の意識がいかに変容する のか、そのためにファシリテーターがどのよ うにふるまう必要があるのか、またそこで語 られる言葉の質については今後検討が必要で あると考えている。





東京学芸大学[東京都 | 国立]

Mapping A/r/tography in Tokyo

授業を行う教員 | 笠原広一(東京学芸大学教育学部 准教授) 対象学年 | 大学院1 - 2年

教育領域 | --実施時期 | 2018年10月-2019年1月 単位数(単位時間) --場所|屋内・屋外

授業概要

120

A/r/tographyの理論と実践に基づき、国 内外の大学院生とともに東京を歩き、芸術的 な視点からの感受認識と省察、芸術表現と記 述を通して、自分たちが「いま・ここ」にい る意味を考える大学院での授業実践である。

ねらい・目標

あらかじめ答えが定まっていない探求活動 や、進むべき道や取り組む活動の手段などが プロセスの中で生成的に立ち現れてくるとい う、芸術による探求を進むファシリテーション と共同実践の進め方、模索の仕方を工夫した。

活動

リタ・アーウィンによるアートグラフィー (a/r/tography)の理論と実践に基づき、a/r/ †の三つの文字が意味する、芸術家 (artist) /研究者(researcher)/教育者(teacher) といった複数の異なる立ち位置とアイデンテ ィティの間にある自分という存在を「歩くこ と」(walking)を通して見出していく実践で ある。参加者はそれぞれが現在、東京で暮ら

し学んでいる経緯を話し、そこから自分に関 連のある、歩いてみたい場所を提案する。順 次その場所をメンバーと歩きながら、そこで 感じられたこと、見たもの、考えたこと、想 像したことなどを共有し、そこから場所と自 分との間の対話を深めていく。その場所にな ぜ惹かれたのか、そのきっかけとなった過去 の記憶とは何か。その記憶や思い出と現在こ こに自分がいることのつながりとはなんなの か。こうしたことを、歩くことの体験とその 感受認識の省察、表現として何かを形にして みることで捉え直したり、その印象や過程、 省察を言葉にするなどしながら、自分につい ての新たな発見とこれからの方向性を見出し ていく自己の探索的で創造的な探求活動であ る。参加した大学院生は国内各地からやって きた者もいれば、東京出身でその後東京を離 れる者もいれば、中国など海外からの留学生 もいる。この実践の期間中、ともに東京を歩 くという巡り合わせの中で、それぞれの人生 の道が交差し、ともに人生の道筋を織りひろ げながら取り組んだ実践である。

作品の評価・フィードバックの仕方

この取り組みは秋学期(後期)の大学院の

授業として行った。10月に始まり、12月に 中間報告会を実施し、学内外の研究者や他大 学院生らとともに取り組みの過程を共有し、 フィードバックを得ながら進めた。12月に は一度ここまでの取り組みをテキスト化した が、院生からはもう少し自分にとって手応 えのある「何か」になっていく (becoming) ように取り組みを深めたいという意見があ り、1月に展覧会として、探求のプロセスを 展示・開示することにした。あわせてギャラ リートークとインターナショナル・セッショ ンを行い、カナダのブリティッシュコロンビ ア大学のリタ・アーウィン教授や博士課程院 生の森本謙氏とネット中継でこの取り組みに ついて議論を深めた。こうした重層的な評価 とフィードバックによって、参加者にとって 意味ある探求が生成していった。また、その 成果はアートグラフィーとしてテキスト化さ れ、『アートグラフィー:芸術家/研究者/教 育者として生きる探求の技法』(Bookway学 術出版)から刊行予定である。

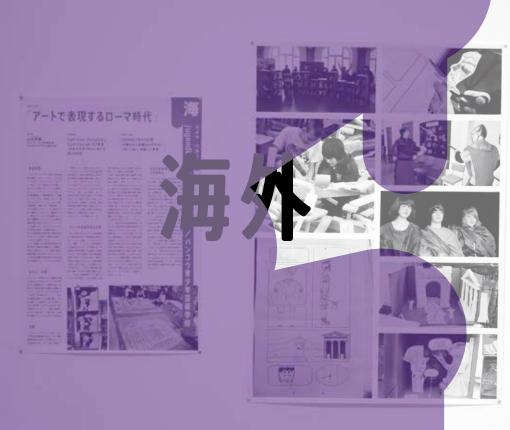
成果と課題

自己の探索的で創造的な探求活動としての 取り組みが大学院での実践として形にできた 点は成果であるが、理論的な深化やアウトプ ットの形にさらに可能性が広がるような取り 組みを模索していく必要があると考える。









University of Minnesota Duluth [アメリカ合衆国 ミネソタ州 | 公立] Painting II, and III

授業を行う教員 | 中島隆太(准教授) 対象学年 | 大学1-4年 教育領域 | 幼児教育 実施時期 | 2017年8月 単位数 (単位時間) | 3 credit course (4 hour/week)

単位数(単位時間)| 3 Credit Course (4 nour / week 場所 | 屋内(教室)

授業概要

124

本講座では、制作を主体としたスタジオ形式と、美術史とセオリーを主体としたセミナー形式の両面で構成されている。課題は2週間に一度あり、学期の終盤には各学生のコンセプトに準じた自由課題を制作する。各課題と同時進行で現代美術における絵画表現をセミナー形式で発表する。

ねらい・目標

本講座での目標は美術活動を6段階に分ける。(①きっかけ②リサーチ③コンセプトの構築④技法の選択⑤制作⑥批評)各課題においてこれら6段階の相対的関係性を議論することで、仮説・実験・結果・考察を意識的かつ明確にし、より責任ある美術制作を目指す。これにより、内面的な感情や好みといった曖昧さに埋没しがちである個人としての目標と課題を客観化し再評価する。

活動

Class Schedule Week 1 イントロダクション

Week 2 & 3

Project #1『最悪の絵を描こう』: 可能なかぎり最悪な絵を描く。何をもって最悪なのかを考え、それを説明・実証すること。

Week 4 & 5

Project #2『オマージュ』:作家を2人選び一作品の中で二人のオマージュを作る。尚、作家①に対してヘコンセプトのオマージュとし、作家②に対しては技法的なオマージュとする。何故二人の作家を選んだのか、オマージュとしてコンセプトと技法の関係性が説明できるようにすること。

Week 6 & 7

Project #3『あなたの為に』: 美術とは作品を見る客体ありきで成立する。この課題では、作品を鑑賞する相手をあらかじめ設定し、その相手の立場(テイストや文化的背景等)からのみ作品の題材、コンセプト、技法等を選択し作品とすること。

Week 8 & 9

Project #4『コラボしよう』: 社会的素材を見つけ、その事象に対しての研究を調査する。調査されたデータや結果を考慮し絵画として表現すること。尚、コラボレーションなので各参加メンバーの役割を明確にすること。

Week 10-14

Final Project 『自由制作』: 制作の意図 (コンセプトとメソード) を提出したうえで制作に入ること。また、完成した作品は必ず2 ページのステイトメントと一緒に発表すること。

作品の評価・フィードバックの仕方

フィードバックは制作前のコンセプト発表時、制作途中、講評会の3工程で随時行う。

作品の評価は、リサーチ・コンセプト・技法・作品のコミュニケーション能力・口頭での発表と自己評価で総合的に評価する。各作品に多くの時間をかけていないので、作品の完成度よりも前説した6項目の関係性をどこまで考慮し効果的にそれを作品に取り込んだかに重きをおき、作品を評価する。尚、ファイナルプロジェクトにおいて、自由な課題のなかで授業内容を理解度と応用を再度評価する。

成果と課題

本学部では絵画を専攻するにあたり、全く 学生の技量を評価しておらず、アメリカにお いては学生の知識と技量の幅は非常に広い。また、クラスの大半はデザインや美術教育を専攻している場合が多く、講座で求められているレベルでの美術制作に関わった者がすくない。其の上で、短期間の授業期間に講義内容を把握し実践する事は非常に難しいと考えている。しかし、学生にのこされた時間を考慮すると必要な内容であり、情報提供を遅らせてしまうと、卒業制作や大学院進学に大きな支障をきたすす恐れがあるため、学生はケースバイケースで評価している。また、インスタレーションなどの表現が物理的にできない事もあり、学生達の現代美術作家としての将来が懸念される。





ーになると、自分の記憶を頼りに描く傾向が

あったので、そこを何とか取り除くためにも

モチーフ選びを色々と検討してみたいと思う。

127

Ayasota Art Studio, Many Rivers Montessori [アメリカ合衆国 | 私立]

"Small Things"

授業を行う教員 | 河口 彩 対象学年 | 小学1-6年、中学1-3年、高校1-3年 場所 | 屋内(教室)

授業概要

身近にある小さなものをモチーフに選び、 その造形をよく観察して描く。また小さなも のを大きく描くことで、そこから生まれる意 外さや面白さを感じ、これまで知っているよ うで知らなかったものを発見していく。

ねらい・目標

今回の授業では子どもたちが「見ること」に より集中できるよう、あえて小さいモチーフ を選んだ。あまり普段気に止めないような小 さなものでもよく見ていると、これまで見え なかったものが見えてくる。自分の目を通して 得た自分だけの発見や感動を大切にしながら 描く。画面に描いていく時、実物よりもずっと 大きく描く。そうすることで自分の見ているも のを拡大されたスケールの中で、よりたくさん 描くことができるのではないかと考えている。

活動

導入: 普段身近にあってよく目にするも のでも、一つひとつよく見るとこれまで気 づかなかったいろんな発見があることを伝 える。それらをたくさん描き出せるように、 あえて紙の中では大きく描くことを説明する。

- 1.下がき:水彩紙に鉛筆また耐水性ペンでモ チーフを描く。まずはしっかり見ることか ら始める。記憶を頼りにせず自分の目で 様々な角度からよく観察する、そしてその 中で面白いなと思ったところから描いてい く。モチーフは実物よりもグンと大きく描 く。消しゴムを何度も使う生徒にはペンを 使って一度で描くように促す事もある。
- 2.着彩:下がきが終わったら水彩絵の具の準 備をし、着彩に取り掛かる。いくつかの 注意事項を伝える。(水加減、明るいところと 暗いところを探しながら丁寧に描いていくこと、 チューブのままの色だけでなく、こだわりを持 って自分の色を作ること、大筆、中筆、小筆の使 い分け、色を変える際は筆をよく洗うことなど)
- 3.片付け: 道具を元の場所にしまってパレッ ト、水入れを洗う。モチーフが食べ物の場 合はみんなで最後に食べる。

作品の評価・フィードバックの仕方

1時間の授業では鑑賞する時間がない為、 制作途中に各々の良いところを見つけて積極 的に評価するようにしている。また、工夫し

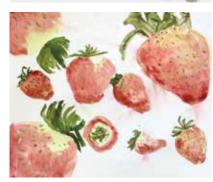
ているところや面白いところを他の生徒にも 紹介することで、感想を引き出し、それぞれ に刺激を受けながら活動的な時間になるよう にしている。

成果と課題

小さなものを原寸大で描くことはなかなか 難しいので、大きく描くことでその苦手意識 を減らすことが出来た。また、よく観察する ことから、一つのものに対しての異なる視野 を持つことが出来た。ネジなどの金属パーツ は、知っているようであまりよく見たことの ないものだった為、先入観が少なくその分モ チーフの構造をしっかり見ようとする姿勢が 見られた。それに対してイチゴやブルーベリ









Jugendkunstschule Pankow パンコウ青少年芸術学校「ドイツベルリン]

『アートで表現するローマ時代』

報告者 | 山成美穂 (プロジェクトの指導補助者・2008年文化庁海外派遣研究員) 対象生徒 | Carl-von-Ossietzky-Gymnasiumの7年生 (日本の中学1年生にあたる)約200名

教育領域 | --実施時期 | 2009年2月の5日間 (月曜日から金曜日の午前中(9時-12時) に連続して実施)

授業概要

このプロジェクトは、ベルリンの学校外教 育施設であるパンコウ青少年芸術学校の主 催により実施された学校と学校外教育(社会 教育) の連携によるアートプロジェクトであ る。青少年芸術学校は、子ども達の余暇をア ート教育によって充実させるためにつくられ たドイツの公的な社会教育施設の総称である。 プロジェクトのテーマは「ローマ時代」。ロ ーマ時代について調べて学んだことを様々な アートにより表現するというコンセプトで、 「ラテン語による立体漫画作り」「建築模型 作り」「風景のジオラマ作り」「衣服をデザ イン・製作しておこなうファッションショー 企画」「壁画制作」「演劇公演」「版画表現」 「イラスト表現」「アニメーション制作・上 映 | 「陶芸によるオブジェと器製作 | 「ロー マ時代のメイクをして写真撮影 | など、合計 16種類のアートプログラムが各々の表現を 専門分野とするアーティストによって企画さ れた。各プログラム10~15人の生徒が参加 し、生徒達が最もやってみたい表現手段で各 専門家の指導を受けながら、ローマ時代への

理解を知識としてではなく体感して学んでい く。プロジェクトの最後には展覧会が開催さ れ、保護者と市民に公開された。アート表現 と歴史の授業を融合する大掛かりなプロジェ クトで、多彩な表現と知的な学びの交わる面 白さを堪能することができるものである。

ねらい・目標

ヨーロッパの歴史において重要な位置を占 めるローマ時代について、その時代の文化を 実践的なアート表現を通して主体的かつ自由 な発想で体感的に経験することがねらいであ る。その時代のストーリー、町並みや建物の 様子、どんな服を着て、どんな人間が、どんな 器でどんなものを食べて、どんな音を聞いて 生きていたのか、時代の息吹をイマジネーシ ョン豊かに創意工夫しながら感じ取り、五感 を通した主体的な体験としてインプットする。

ドイツの美術教育の実情

子ども達(児童・青少年達)に対するドイ ツの美術教育は、絵画や彫刻などの造形美術

デザイン、建築、ファッション、舞台芸術な どの教育も含まれる。その教育には、学校教 育と学校外教育の枠組みがあり、学校外教育 も公的な資金援助を得て行われているものが 多い。学校と学校外の両者におけるドイツの 美術教育の目的に変わりはなく、その理念に は三つの柱がある。一つ目は、美術作品や美 術史に親しみ文化的な価値を理解すること。 二つ目は、美術表現について習うだけでなく 自ら実践し表現する技術を養うこと。三つ目 は、表現の発表を通して積極的に社会参加す ることである。学校における教育では、作品 制作の他に美術における基礎知識の習得に重 点がおかれ、美術史や作品分析の試験、作品 の成績評価が課されている。大学入学資格を 得るための一般教養の試験科目の中にも美術 が含まれている。学校外の枠組みでは、より 個人的で専門的な興味に基づく自由な学びや 自己の内的な発見が深められている。近年で は、休暇期間を利用した学校と学校外の連携 によるアートプロジェクトも活発に行われて いる。ドイツ社会において、学校の美術教育 は、全ての子ども達が平等に美術の教育をう ける場としての役割を果たし、学校外の美術 教育は、自発的な意思で個性を成長させるた めの役割を果たすと同時に、異年齢の仲間や 別の学校の仲間、芸術家と出会う社交の場と しても大切にされている。

の教育以外に、メディア表現、グラフィック

日本の美術教育との接続点

ドイツでは、現在も半日制の学校が多く存 在し、生徒達の余暇の時間が多い。そのた め、学校教育だけではなく公的な援助を得た

余暇教育の内容が充実し、学校とも連携を図 って行われているのは自然な流れである。そ の点において日本とドイツでは教育の社会的 な構造の違いがあるが、しかし、事例にあげ た『アートで表現するローマ時代』のような 総合学習的なアートプロジェクトを日本でも 行うとするならば、有意義で面白いものにな るだろうと考える。ヨーロッパにおけるロー マ時代と同じように、日本の子ども達にとっ ても日本史の様々な時代における文化の息吹 を、このプロジェクトのように様々なアート 表現を通して実践的に追体験することは実現 可能である。自由で柔軟な発想を持つアーテ ィストと共に、楽しみながら様々な表現方法 を習得し、仲間達とシェアできるとしたら非 常に豊かな経験になるだろう。引率する学校 教員にとっても、日常の教育方法や教科の枠 を離れた新鮮な学びの喜びになるのではない だろうか。







東京藝術大学 × 東京大学 おドローイング演習 ドローイング演習 ドローイング演習 ドローイング演習とワークショップ

授業を行う教員 | O JUN (教授) 主な助手・スタッフ | 高木紀久子(東京大学芸術創造連携研究機構特任助教) 小津航(東京藝術大学油画専攻教育研究助手) 対象学年 | 大学1-4年 + 大学院1-2年 教育領域 | --実施年・時期 | 2017年7月 単位数(単位時間) | 8単位(180分) 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

132

東京大学教育学部総合教育科の学課特設科目である「超ドローイング演習」(担当教員: 非常勤講師OJUN)内の課外授業として東京藝術大学に場所を移し、履修生(東大生)と藝大油画専攻第3研究室(OJUN研)の修士、博士課程の学生でワークショップを行う。

ワークショップでは"お題"を出し、個人 あるいはペアでドローイングのエクササイズ を行う。また、国内外の画家や美術家の作品 画像、制作動画を使いながら創作のプロセス と制作方法を検証する。その中から幾つかの 制作方法を実際に体験してみる。

ねらい・目標

様々な専門教科を学んでいる東大生にむけて、ほとんど未経験か専門外である美術の実践的授業を行う。東大生と藝大生が創作の基本的表現行為であるドローイングを合同で行うことで、様々な経験値や専門性をもとにドローイングについて考察、実践する。また学生間の交流を通して思考と実践経験を共有し、各々の思考領域を刺激することを試みた。

活動

導入:ドローイングのエクササイズを行う。 教員が出した"お題"を短時間(15分、10分、 5分)でドローイングする。次に2人1組になって1分間自由に会話した後、自分の言葉の 中から相手が選んだモノやコトを描く。

実践1:学生たちに様々な画家、美術家の作品画像を見せ、各作家の簡単な解説と特徴をレクチャーする。次にその中から何人かの制作動画(今回はジョルジュ・ブラック、ピカソ、カレル・アペル、ジャクソン・ポロック、ブライス・マーデン、デ・クーニング、村上三郎、手塚治虫、棟方志功、リヒター等)を見せながら、彼らの制作方法の意味や時代背景について話す。

実践2:制作動画の中からリヒターのスキージ絵画と村上三郎の紙破りのパフォーマンスを行う。リヒターのスキージ絵画では、全紙大の厚紙を床に置き、その上に置いた画材(アクリル絵の具)を、同じ厚紙を重ね合わせて作ったスキージで掻きとってゆく。筆触とは違う絵の具の塗り広がり、物質としての絵の具の"重さ"を実感する。

実践3:村上三郎のパフォーマンスを体験 する。模造紙を重ね合わせた大きな紙面を用 意する。それをパーテーションの二つの壁の間に張り、紙面の向こう側に学生1人を配置する。他の鑑賞者(学生)は紙面のこちら側にいる。向こう側にいる学生は自分のタイミングで紙に突進して紙面を突き破る。行為者は単純な行為の持つ遊戯性、それに伴う一瞬の身体感覚を体験する。鑑賞者は、行為者が紙面を突き破る際の大きな音を聴き、その身体が現れる様子を目撃する。これらの行為と方法を理論的に理解するだけではなく、実際に体験することでより理解を深め、身体的気づきや発見を導き芸術的行為の意味や問いをあらためて考察する契機とする。

作品の評価・フィードバックの仕方

今回のワークショップではドローイングの 制作自体よりも、身体行為、思考実験として 各々がどのような体感、実感、気づきがあっ たのかが重要であるので、活動後にそれぞれ の感想を話してもらった。

道具づくり(スキージ、大紙面つくり)は経験的に要領を得ている藝大生が率先して行い、

東大生はそれを手伝うというかたちが自然と できた。協力、協働、個々の体験を実践的に 行えた点を総合的に評価した。

成果と課題

学生たちは、これまで美術作品と作家の制 作方法について学び、その制作動機や歴史的 意味を既知のものとしているが、今回のワー クショップでそれらを追体験したことで、よ り理解を深め、新たに個人的な身体記憶を獲 得できたのではないか。通念として私たちが 持っているモノやコトの自明性を検証する機 会になったように思う。また創造や創作にお いて"遊び心"が実はとても重要であり、そ の中に新たな方法や思考が待機しているとい うことを、両校の学生は今回の授業で共有で きたのではないか。それぞれの専門分野でこ の結果や経験を生かしていくことは課題であ る。専門分野以外の視点から積極的かつ横断 的に考察と試行を行っていくことは必要な事 であると考える。次代を担う両校の学生の交 流は、今後さらに行われていってほしい。



135

東京藝術大学 絵画科 油画専攻

油画1、2年生選択カリキュラム モザイク実習 大理石モザイク・レリーフの制作 ~自然素材と自己の表現

授業を行う教員 | 工藤晴也(壁画研究室教授) 主な助手・スタッフ | 大西利佳(壁画研究室教育研究助手) 対象学年 | 大学1-2年 教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年5月13日 - 6月7日 単位数 (単位時間) | --場所 | 屋内

授業概要

134

実習では「素材と自己の表現」という原初 的な関わりをテーマに、この本質的な問題と 向き合い、モザイクやレリーフの制作を通し て石材の質感や加工技術を身体的に経験・理 解しながら絵画表現に展開し、自身の未知な る能力を引き出す機会とする。

モザイク:大理石を割った小片(テッセラ) を様々なパターンに組み合わせて、セメント モルタルで固めながら壁画を制作する。

レリーフ:大理石板表面を彫り込み(サンドブラストマシン使用)図像を制作する。

ねらい・日標

西洋美術史と、絵画表現や技法の学習・習得を通して、絵画表現の基礎力の向上を目指す。実習から得た経験をもとに、素材と自己の関わりを考察する機会を与える。モザイクやレリーフなど石材を用いた表現は、ギリシャ・ローマ美術に代表されるように長い歴史があるが、教員によるガイダンスでは歴史的側面および現代表現への対応例の紹介も含めて指導する。よって、授業後は実習経験が学

生個人の様々な制作展開への素材や技術的応 用能力の向上を目標としている。

活動

ガイダンス:スライド上映と教員による説明

技法の実践・素材を用いた自由表現:実際のモザイク技法の実践=原画から実際にモザイク作品を作り上げる制作工程を指導する。 石材の加工技術を学びつつ、特質を理解し、表現の可能性を探り、素材が作品に直結する制作展開をさせる。

完成作品について説明させる・教員による 講評: 完成した作品をもとに、実習の中で 成功した点、失敗した点などから得られた成 果を述べさせる。また、学生自身が資料から 学習し、考察した点も述べさせる。教員によ る講評と評価、今後の展開への指導。

作品の評価・フィードバックの仕方

原画がモザイクやレリーフの表現としてどのように翻訳され、石材の特質をどのように理解し、表現に応用できたか。この二つの点を重視しつつ、古典的解釈による表現や、独

自の解釈による表現など、学生それぞれの創作の原点を理解しながら個人の目的がどこまで到達できたか、また到達できなかった点とその原因は何かを指摘し、問題点を明確にした。完成した自身の作品を見て改めてモザイクやレリーフ表現の魅力を知る学生も多く、この経験を生かし、次の作品にチャレンジしたいと希望する学生もいた。

成果と課題

授業を通して素材の特質や技法に興味を持 ち、積極的な参加姿勢がみられ、その結果、 全体的に密度の高い作品が作られた。今後の 学生自身の制作において、この授業から得ら れた経験を生かし、新たな創作の展開を期待 したい。

毎日決まった工程と制約された時間内に完成させなければならない為、授業参加への集中力と制作の計画性が重要である。授業者の課題としては、用意した石材が色彩によって消耗量に偏りがあり、度々不足分を補給しなければならなかった。授業準備段階で十分に検討する必要があった点を反省し、今後の授業運営に生かしたい。







東京藝術大学 絵画科 油画専攻

油画1、2年生選択カリキュラム 坂田ゼミ 劇場にて ~共鳴する身体と色彩~

授業を行う教員 | 坂田哲也(油画専攻教授) 主な助手・スタッフ | 星野歩(油画教育研究助手) 対象学年 | 大学1-2年

教育領域 | 専門教育 実施年・時期 | 2019年の約1ヶ月 単位数(単位時間) --場所 | 屋内(絵画棟大石膏室)

授業概要

136

林立する石膏像の空間の中に、補色関係に なるコスチュームを着た女性が、寄り添う・ 佇む・繰り返す・動く(すれ違う)・集合する、 1.レクチャーを行い、絵画表現における色 といった色彩とフォルム、自身の視点の絵画 表現の基礎を学ぶ。

入試から解き放たれ、1年あるいは2年が 経過した作者自身の創作を存分に発揮し、色 彩の基本である色の三原則・光の三原則を基 に、その色彩の揺れ動く様を、現在の視点で 捉える。

目の前に繰り広げられる現実(大石膏室の 空間と身体との有り様)を、新鮮な気持ちの中 で、また自身の絵画力によって、視覚的体験 を絵画表現する。

ねらい・目標

学部1、2年生対象のカリキュラム。入試 を終え大学に入ったあと、「何」を描くのか 定まらない時期でもある1年生と、自分の表 現の幅を広げながら模索している状態である 2年生が、1日目は基礎的な表現を行いながら、 様々な紙媒体・画材を用い、実験的に絵画に

おける自己の表現の幅を広げることを試みる。

活動

- の三原色の取り入れ方などを巨匠の参考 作品、文献などテキスト、画像を用いて 講義を行う。画材などもその時に説明。 その後、会場となる石膏室の床にロール 布など全員で設営する。
- 2.4人のモデルさんがポーズをとる。石膏室 の広い空間、石膏像、三原色のロール布を 敷いた会場で制作を開始する。様々な画材、 媒体を試し、実在する石膏像・身体を通 して自己の創作表現の幅を広げてゆく。
- 3. 講評会にて、まず学生同士で作品を鑑賞。 そして個々の作品を順番に講評。今後の作 品展開のヒントを発見する機会とする。他 学生の作品を味わって鑑賞することで、自 分の作品の良さにも気がつくことができる。

作品の評価・フィードバックの仕方

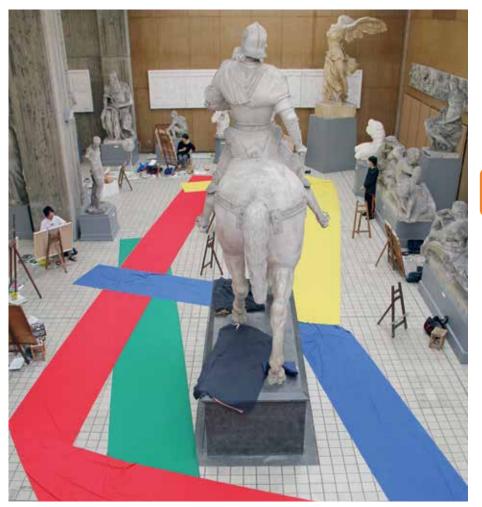
学生一人ひとりが、何を感じ、作品を制作 し、取り組んだのかをフィードバックする。

例えば光、色、空間の大きさ、大石膏室とい い異空間である石膏室で感化された学生は、 う場所、モデルの動きに感化され、新しい試 みに挑む様を個々に評価する。この体験を存 ていくかを見守りながらも展開に期待する。

成果と課題

様々な画材を用い、普段身を置くことのな

自分の可能性を再発見し、制作の新たな方向 性を探る。空間に三原色を用いること、モデ 分に今後の制作に活かし、どのように変化し ルを描くこと、各々の作品の方向性に、どれ 程リンクさせられるか。個人差はあるが他に もきっかけを作り、誘発させる要素を取り入 れながら、さらに豊かな授業展開へと進化さ せ、継承していきたい授業である。



139

東京藝術大学 デザイン科

デザイン実技 I-II-a

138

「Future Vision -家族のカタチ もし自分の性を選べる社会ができたなら-」

授業を行う教員 | 藤崎圭一郎(デザイン科 教授)、 Sputniko!(デザイン科 准教授) 主な助手・スタッフ | 青沼優介(デザイン科 教育研究助手) 一乗ひかる(デザイン科 教育研究助手) 対象学年 | 大学1-4年、大学院1-2年

教育領域|専門教育 実施時期 | 2019年7月 単位数(単位時間) 7単位 (他の実技課題と総合して評価) 場所 | 屋内

授業概要

性転換の技術が発展して、自分自身で自分 の性を決定するのが当たり前の社会が到来す る。そのとき、家族のカタチはどうなるか? この設定に従って、グループごとに「ひとつ の物語」をつくる。その物語の世界観をもと に「作品」を制作する。

ジェンダー、フェミニズム、LGBT、代理 母出産などをリサーチして、現代の家族のあ り方への問題提起、もしくは未来への提案と なるような作品を制作すること。

ねらい・目標

- ジェンダーに関わる社会課題を考察する
- スペキュラティブデザインを学ぶ
- ストーリーテリングを学ぶ

活動

- ストーリーテリングワークショップ
- 3回のレクチャー (Sputniko!+長谷川愛、井

上岳一、武藤香織+今泉真緒)

作品の評価・フィードバックの仕方

それぞれ30分程度のプレゼン及び講評を 行った。教員からの一方通行の講評を避ける ため、学生から積極的にコメントを求めて、 作品を通してジェンダーの問題を考える批評 空間の創出を目指した。





東京藝術大学 デザイン科 デザイン実技 I-II-a 「調べる」

授業を行う教員 | 藤崎圭一郎(デザイン科教授) 主な助手・スタッフ | 小金澤京(デザイン科 教育研究助手) 田羅義史(デザイン科 教育研究助手) 対象学年 | 大学1-4年、大学院1-2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年10月

単位数(単位時間) | 7単位(他の実技課題と総合して評価) 場所 | 屋内

授業概要

デザイン基礎課程(観察と表現一自然と人間):

さまざまなデザイン領域に対応できるよう に自然と人間を通して、デザインの基礎とな る観察と表現を学ぶために理論、情報、機能 の3つの領域の実技課題を行う。

デザイン実技 I-II-a/観察と表現「調べる 『川』利根川・荒川・多摩川水系」

水系という視点で地域・歴史を見る。作品 形式は自由。制作に併せて、取材に使ったフィ ールドノートも評価の対象とする。調査ノート を各自必ず制作すること。ノートは展示され、

ねらい・目標

- 綿密なリサーチとともに制作する姿勢を学ぶ。
- リサーチ法を学ぶ。

活動

- 学生を連れて、埼玉県立川の博物館の見学 を行う。
- 学生自身が「足を使って」川の実地調査な

どを行い、リサーチノートにまとめる。

作品の評価・フィードバックの仕方

学生が3分のプレゼンを行い、それを受け て教員が2分程度の講評を行う。埼玉県立川 の博 物館の学芸員を招聘し、教員とともに 講評を 行っている。優秀作品は川の博物館 で展示を行っている。

成果と課題

自分の制作した作品に対する理解を深める 評価対象となる。独自のノートをつくること。ために、制作プロセスの中での気付きをまと めた1600字程度のテキストを書かせ、作品 写真とともに提出、全作品を掲載した冊子に まとめている。







東京藝術大学 先端芸術表現科 インタビュードローイング

授業を行う教員 | 日比野克彦(先端芸術表現科教授) 主な助手・スタッフ | 菊地良太(先端芸術表現科 教育研究助手) 対象学年 | 大学1-4年、大学院1-2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年5月 単位数(単位時間) | 15時間 場所 | 屋内(教室)

授業概要

142

- ふたりひと組になり、互いに相手の事を聞 ーイングする。
- 4日間でクラスメート全員をインタビュー ドローイングする。
- 4日間で23人のクラスメートに描かれた 23枚の自分が出来上がる。最終日に23枚 1.チケットの相手を探しペアを組む。 もらい、「インタビュードローイングコレ クション | として各自保管する。

ねらい・目標

今回のモチーフ (対象) は喋ることができ ます。聞くと応えます。インタラクティブに 反応します。モチーフを取材し、語りかけな がらドローイングすることが、インタビュー ドローイングです。視覚的な情報だけでドロ ーイングするのではなく、対象物(人)から 様々な情報を聞き出して対象物(人)を描い てください。

語り合う、見つめ合う、感じ合う、互いが互 - ドローイングの為の画材は、鉛筆、木炭、 いのリアクションにリアクションする微かな 動き、僅かな仕草、細やかな呟き。自分の反

応が相手に伝わる。相手の反応が私に伝わり、 それが手に伝わり、鉛筆に伝わり、そして画 面に現れる。瞬間瞬間に反応している私の全 き出しながら、顔、姿、心情、思考をドロ てが絵を描くという行為につながっていく。

活動

1~5を繰り返す。

- の自分をクラスメートからプレゼントして 2. 相手が見つかったら、チケットを半分に切り、 自分の名前の方を画面右上に貼り付ける。
 - 3. インタビュードローイングする。
 - 4. ドローイングが完了したら、フィキサチ ーフをかける。
 - 5. 完成したドローイングは相手にプレゼン トし、受け取ったドローイングは自分の 名前の書いてあるカルトンに収める。

諸条件:

- インタビュードローイングする時には、イ ーゼルを使用すること。
- 紙はイーゼルに立てたカルトンに設置する こと。(うつむいて描かないこと)
- コンテ、パステルなど、モノクロのものを 使うこと。

- 制作はアートスペースで行うこと。
- 集まった23枚を1枚ずつ全て写真撮影し、 講評会前に提出すること。

成果と課題

入学して間もない学部1年生にとって、ク ラスメートの一人ひとりと初めて話をする機 会となり互いを知ることができた。外見を描 くだけではなく、会話を通して相手の内面 にも触れたことで、表現にも幅が生まれた ようだ。また相手が描いた自分を見ることで、 自分のあり方を考えるきっかけにもなった ようだ。





東京藝術大学 先端芸術表現科 メディアアートとコーディング

授業を行う教員 | 古川 聖(先端芸術表現科 教授) 八谷和彦(先端芸術表現科 准教授)、濵野峻行(先端芸術表現科 非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 平瀬未来(先端芸術表現科 教育研究助手) 対象学年 | 大学1-4年、大学院1-2年 教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月 - 7月(前期) 2019年10月 - 2020年1月(後期) 単位数(単位時間) | 各4単位 場所 | 屋内

授業概要

メディアアート (特にデジタルメディアアート) の制作に用いられる技術的諸概念を、演習を通じて修得する。学生が作品制作に必要な手段を自ら選択し、適切に組み合わせて構成する活用力を養うことを目標とする。そのために各種デジタル表現を支える理論的基礎を技能として積み重ねることと、科学技術のアートへの活用可能性について議論することの両面を並行して行う。

ねらい・目標

前期:ウェブテクノロジーをベースとする コーディングの基礎と聴覚表現を中心に取り 上げ、論理的思考による組み立てから創作の 思考につなげる体験を得ることをねらいとする。

後期:各種センサ・デバイスの活用と視覚 表現を中心に取り上げ、コンピュータの基礎 と先端的な技術に関する知見を拡げ自らの制 作に活かすことをねらいとする。

活動

前期:

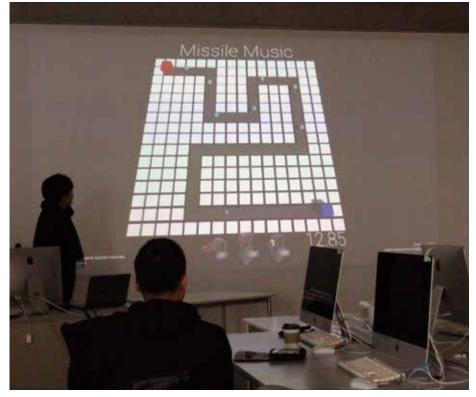
- コーディングの基礎 (ウェブテクノロジーをベースに)
- 聴覚表現
- 照明機器

後期:

- センサ・デバイスの活用、 共通基盤の理解
- 視覚表現
- 先端的な技術

授業 HP:

https://sites.google.com/view/mediaart-coding





東京藝術大学 先端芸術表現科 IMA 実技IIーI スタジオ選択①「工作」

授業を行う教員 | 佐藤時啓(教授)、小沢 剛(教授) 表 良樹(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 折原智江(教育研究助手) 対象学年 | 大学2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月-5月 単位数(単位時間) 4単位(57時間)

場所 | 屋内(取手校地メディア棟 1階工作室(スタジオ))

授業概要

146

共通の鉄材による立方体を制作する事によ って、1年次に経験しなかった鉄材の切断や 溶接について集中的に学ぶ。次にその後、各 自が関心を持つ世界を鉄の立方体の中に実現 させる。最終的には個々のユニットをそれぞ れ接合出来る構造とし、接合することにより 予期せぬダイナミックな空間が出現する。

ねらい・日標

と「手段」の両方の関係を行き来しつつ、作 品制作を行う。実践的な制作作業を通して、 プランを形にする経験を重視する。



活動

鉄の立方体(600×600×600)を制作後、立 方体の中を制作する。立方体と立方体を繋ぎ 合わせて、最終的には一つのオブジェにする。

1週目:スタジオの使用方法を学んだ後、 履修者全員で溶断、溶接をしながら鉄フレ ームを完成させる。ホームセンターに行き、 様々な素材や工具について学ぶ。

2・3週目:各自、立方体の中の制作プラン を発表。制作については、その制作方法にあわ せて面談・制作相談を行いながら進める。完成 素材の様々な側面を意識しつつ、「表現」までの工程に責任を持ち、独自でリサーチ、試 作と改善を行う。

> 4週目:立方体の中の空間が完成後、学生 で話し合いながら構成を決めていく。搬入は、 他の学生と協力しあって、一つの構造体とす る。講評会は各自の立方体の空間についてプ レゼンをしながら行う。

作品の評価・フィードバックの仕方

テーマから発展させた、制作の過程と成果 物としての作品(展示方法、プレゼンテーショ ンを含む)を評価する。

成果と課題

実作の過程で、素材は想定外の振る舞いを 見せることがあるが、それが作品にとってど作で活かす事が出来るだろう。

のような意味や効果を持つことになるのか考 える機会になった。制作のなかで生じるさま ざまな事象に柔軟に対応する経験を今後の制



東京藝術大学 芸術学科

148

古美術研究旅行 古美術研究 1:11

授業を行う教員 | 松田誠一郎(教授)、佐藤道信(教授) 片山まび(教授)、須賀みほ(准教授) 対象学年 | 大学2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月-2020年1月 単位数(単位時間) | 10単位(90分) 場所 | 屋内(教室・屋外)・屋外

授業概要

古美術研究旅行は、奈良・京都の約40ヶ所 の寺社・美術館を訪れ、日本の古美術品を見 学する研究旅行である。東京藝術大学では大 正期(1912-1926)から、古典美術学習のため のカリキュラムとして、古美術研究旅行が実施 されてきた。現在でも、美術学部の全学生が参 加する、東京藝術大学を象徴する教育カリキ ュラムの一つとなっている。通常は非公開の ために一般の観光客としてはみることのでき ない作品も、多く拝観・観覧することができる。

ねらい・目標

前期の古美術研究|では、日本・東洋美術 史研究、工芸史研究で必要となる、先行研究の 整理、図版の収集、プレゼンテーションの方法 等の基礎を身に付ける。後期の||では、日本美 術史・日本工芸史上の重要作品を実見するこ

活動

前期の古美術研究|では、後期||の旅行で 見学予定の作品等について、演習形式の授業

を行なう。各学生が担当作品の調査・発表を 行ない、それについて、参加学生全員と教員 とで議論する。

後期の||は、現地研究のための旅行である。 2週間にわたり、京都・奈良の約40ヶ所の寺 社・美術館を訪れ、日本の古美術品を拝観・ 鑑賞・観察する。旅行は、奈良の本学附属古 美術研究施設などに宿泊しながら実施される。

作品の評価・フィードバックの仕方

各学生は自身の発表テーマについて、前年 度中にガイダンスに参加することで決定する。 その後も発表内容については指導教員と相談 し、また発表直前にはリハーサルも行うなど、 発表以前に十分な準備がされるなかで、教員 をはじめとするスタッフからコメントが与え られる。すなわち、フィードバックは発表の 時点だけでなくむしろそれ以前の時間の中で 綿密に行われてゆく。評価についてはこうし とで、実作品の鑑賞・観察の基礎を身に付ける。 た過程を承けて、シラバス記載のとおり発表 内容を基準に行われる。

成果と課題

成果は主に次の3点がある。第1に、美術

史・工芸史を研究する上で必要となる作品を 観察する方法や、その前提となる礼儀や研究 姿勢を、実地に学習できること。第2に、国 宝や重要文化財をはじめとする貴重な作品に 接する際に要求される、文化財保護の観点か らの心構えやマナーを学習できること。第3 は、古美術作品の単体としての意味や価値だ けでなく、それらが置かれている場の意味や 機能を総合的に学習できることである。課題 は、そうして得られた成果や、作品の実見か

ら得られたインスピレーションを、卒業論文 に集約される学術研究に発展させ、社会貢献 につなげることにあるといえる。





東京藝術大学 芸術学科 課題演習(西洋美術史|・||)

授業を行う教員 | 田辺幹之助(教授)、佐藤直樹(准教授)、越川倫明(教授) 対象学年 | 大学院1-2年

教育領域 | 専門教育 実施年 | 2019年4月 - 2020年1月 単位数(単位時間) | 4単位 場所 | 屋内(教室)

授業概要

西洋美術史の研究法を演習形式によって修 得する。西洋美術史専攻大学院生の中核授業。 た基礎的な知識に基づきつつ、問いを立て、

ねらい・目標

以下を達成目標とする。

- 参加者各自が自分の研究テーマを追究する の成果は、ほかの参加者の研究成果発表(発 こと。

活動

授業計画と内容: 西洋美術史専攻大学院生 を対象とする必修科目である。各自の研究テ ーマもしくは指定されたテーマについての研 究発表、および教員と参加学生によるコメン トと討議を中心とする。

作品の評価・フィードバックの仕方

平常点とレポートにより評価する。

成果と課題

第1の成果は、参加者がこれまで学んでき 作品や作家について客観的に観察・分析し、 史料や文献を調査し、得られた知識と結果を 理論的にまとめあげるという、西洋美術史の 基本的な方法論を実践できる点にある。第2 表テーマは様々な地域・時代・分野にわたる)を - 演習の場でプレゼンテーションを行うこと。 聴くことにより、より多角的な知識と視点を - 議論・質疑応答のスキルを身につけること。 獲得できる点にある。第3の成果は、研究発 表後の質疑応答を通じて、ディスカッション の能力を養うとともに、研究をさらに発展さ せることができる点である。





東京藝術大学 芸術学科

基礎造形実技IA·IB

152

授業を行う教員 | 村山悟郎(非常勤講師)、鷹野 健(非常勤講師) 永井文仁(助教(写真センター)) 対象学年 | 大学1年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月 - 2020年1月 単位数(単位時間) | 計8単位 場所 | 屋内(美術・図工室)・屋外

授業概要

美術・芸術に関する理論(美学・美術史な ど)を専門とする芸術学科の学生にむけた、 実技の授業。美術を中心とする諸芸術に関す - ほかワークショップ、実技科学生との共同 る認識を深めるために、油画等の基礎的な実 技を身につける。

ねらい・目標

美術を中心とする諸芸術に関する認識を深 めるために、基礎的な実技を身につける。

活動

とくに特徴的な活動は、各学生が任意の実 技科学生についてインタビュー等のリサーチ を行ない、当該実技科学生の作家活動や制作 作品を批評する小論集を作成すること。授業 全体の内容は下記のとおりである。

- 版画実習
- 素描
- キャンバス下地制作実習
- 油画制作
- 写真実習

- 小論集作成

- 進級作品制作
- 進級展運営
- 講評
- 授業等

作品の評価・フィードバックの仕方

講評のほか、学生たち自身の企画によるア トリエ展を開催。履修学生と担当教員のほか 学内の公衆からのコメントなども集めてフィ ードバックとする。また講評時にも学外から 現役のキュレーター、批評家、ジャーナリス トなどを招聘し、履修者自身の試みに対する 多角的な視点を得る。

成果と課題

成果は、美術・芸術の制作実技や技法、創 作過程、展示の実際などを、実体験とともに 身に付けることができたことといえる。課題 は、そうして得られた成果をもとに、アーテ ィストや作品に対する理解を深め、今後の学 術研究や批評活動、展覧会運営、社会貢献な どに発展させることにあるといえる。





東京藝術大学 芸術学科

美学演習I

154

授業を行う教員 | 林 卓行(准教授) 対象学年 | 大学2 - 4年 大学院1 - 2年 教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年4月 - 7月 単位数 (単位時間) | 2単位(90分) 場所 | 屋内

授業概要

現代の美術について、美学あるいは芸術哲学の観点から、文献を精読することで考察する授業。本年度前期はWhitechapel Gallery / MIT Press刊行の定評あるアンソロジー "Documents of Contemporary Art"シリーズより、Lisa Le Feuvre (ed.), Failure (2010)を選んだ。

〈失敗〉といえば通常の芸術制作においては忌避されるものだが、現代においては失敗こそが、ときに作品の領域を拡張するなど、必ずしもネガティヴな意味だけでそれをとらえることはできない。さらにこの概念を現代美術のコンテクストに位置づけた場合、それはどのような射程をとりえ、またどのようにして批評的に機能しうるか。授業では広く古今から集められたテクストを演習形式で精読することで、詳細かつ多角的に検討する。

ねらい・目標

美学/芸術学/美術批評の研究および実践 を行う上で必要な、諸概念の運用能力を身に つけること。

活動

授業はゼミナール形式で行う。具体的には、 各学修者があらかじめ文献中の希望するテク ストを選択し担当テクストを決めておく。授 業ではまず毎回の担当学修者がそのテクスト について発表を行う。担当学修者はテクスト の内容を要約・説明するとともに、随時ほか の参考文献から情報を補充し、またテクスト 中に登場するものを中心に、作品図版を提示 する。ついでそれに対してほかの学修者がコ メントを加えつつ、全員でディスカッション を行う。ここで発表者は演習全体の司会とし て、ほかの議論の整理と運営を行う。なお全 員が期末レポートとして、自身の担当したテ クストについて、授業時のコメントやディス カッションの内容も踏まえつつ論じたレポー トを提出する。

作品の評価・フィードバックの仕方

主として発表者のプレゼンテーション終了 後のディスカッションの段階において、ほか の履修生と授業担当教員によるフィードバッ クが行われてゆくが、必ずしも両者ははっき りと分けられてはいない。ディスカッション の進行のなかでそれらコメントは有機的に変化してゆき、またときにはほかの履修者によるコメントと教員のそれとのあいだのハイアラーキーや役割は交錯する。発表者はそのすべての過程を自身のフィードバックとして受け止めるとともに、必要な場合は授業終了後の担当教員との面談によってその定着を図る。成績評価はこの発表からディスカッション/コメンタリーまでの一連の過程とその内容を総合的に考え決定される。

成果と課題

ここでは著作権の問題もあって掲出することはかなわないが、授業担当者の想像以上にすぐれた発表が大多数であったことをまず記しておきたい。読解の精確さはもちろんだが、画像のレイアウトや引用文の選択、発表全体の構成などによって、学修者が自身の考察を明快に表明できているプレゼンテーションが

大半を占めた。要点の整理されたプレゼンテーションはおのずと他学生の議論を促し、授業担当者として、各回のディスカッションを通じて "failure" の諸相が明らかになった。また授業後のレポートを通じても、各自の理解を深める機会があっただろう。各学修者にとっては発表の準備、当日の発表とディスカッション運営(そしてほかの学修者の発表時にはディスカッションへの参画)、事後のレポートと3つに分かれた段階を踏むことで、テクストと作品の有機的な理解につながったものと思われる。





157

東京藝術大学 美術研究科 芸術学専攻 美術解剖学

授業を行う教員 | 布施英利(美術解剖学准教授) 主な助手・スタッフ 小山晋平(美術解剖学 教育研究助手) 対象学年 | 大学院1-2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年の前期・後期 単位数(単位時間) --場所 | 屋内(教室)・屋外

授業概要

156

美術解剖学は、美術を学ぶものが創作のた め、また美術作品の研究のために、人体の形 態と構造を研究する学問です。あるときは骨 を手にして、またあるときは生体を観察して、 人体の形態と構造を徹底して理解することを 目指し、いわば「自然」を美の最高の教師と して、芸術の本質に迫ろうというものです。

活動

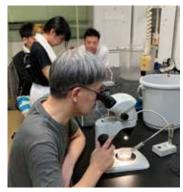
講義としては、美術学部の全ての専攻の学 生を対象に、人体の骨や筋肉について学ぶ美 術解剖学Aと、人体とそれ以外の生物の体に ついて学ぶ応用的な内容の美術解剖学Bの授 業を開講していますが、美術解剖学専攻の修 士課程では、講義、演習、また解剖実習など を通して、より専門的で高度な美術解剖学を 学びます。 講義は、マクロ解剖学や形態学、 生体観察など、また美術史の中の人体表現の 研究、造形表現の諸技法などがあります。ま た海や森の大自然の中にでかけて自然観察の 実習も行います。古美術研究旅行や美術館見 学など、美術の現場での実習も行います。こ のようにして自然と古典に学ぶことで、美へ

の理解を深めることを目指します。大学院修 了には、論文の提出が課せられますが、芸術 への考えと経験を言葉で整理しまとめること は、芸術へのスタンスがより明瞭になり、研 究や作品の制作への力となることでしょう。 博士後期課程では、より明確な研究テーマを 決めることが求められます。博士論文の執筆 に向けて、オリジナルで完成度の高い研究を まとめるべく、上記の講義・実習などに加え て個別の講義・演習を行います。

成果と課題

学生数(2019年5月現在)

修士:4名 博士:1名







東京藝術大学 美術教育研究室

構成論及び演習し

158

授業を行う教員 | 木津文哉(教授) 主な助手・スタッフ | 迎星二(非常勤講師)、横山麻衣(教育研究助手) 対象学年 | 大学院1年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 半期 単位数(単位時間) 2単位 場所 | 屋内(教室、美術・図工室、その他)

授業概要

美術作家として必要かつ不可欠なものは教 養に他ならない。では美術制作における教 1.2.3.モデル使用による描画 養とは何か。そもそも作家とは何を指すの か。本授業では美術制作に関わる専門知識は もちろんのこと、既存の作家に見られる創造 の原点や作品が生み出される経緯などを解説 し、それらを視覚資料で確認することにより、 8.小品制作:描画の実際 作家における教養とは何か、あるいはその知 識の広汎性について思考する。演習として平 面絵画の技法(油彩・テンペラ・エアブラシ等) による小品制作も行いつつ、作品制作の周辺

ねらい・目標

制作における教養や制作背景についての問 題の立て方を獲得する。ならびに、自身が指 導する立場になった時に十分な解説が出来る ように、システマティックな制作理論を解説 することができ、身体的だけではない制作上 の理論構築の手法を獲得する。大学院・美術 教育研究室に在籍する修士課程学生の履修必 修科目である。

活動

前期(取手校地):

4. イントロダクション:美術作品の種類と範囲

5.美術作家の個性と作品

6.小品制作:テーマと構図/基底材制作

7. 小品制作: 支持体と基底材/媒材と描画材料

作品の評価・フィードバックの仕方

自ら立てた研究課題への取り組み、発表・ に存在する様々な事象について解説していく。 報告の準備、展示発表の実態、意思交換等の 振り返り状況、他学生への相互リスペクトか ら、総合的に評価する。教員が適宜、研究に ついて助言、サポート、講評することでフィ ードバックを行う。







東京藝術大学 絵画科 日本画専攻

箔講義 平押し

160

授業を行う教員 | 月岡裕二(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 川崎麻央(教育研究助手) 対象学年 | 大学1年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2019年7月 単位数(単位時間) 4時間 場所 屋内(教室)

授業概要

学部1年生を対象に箔講義(平押し)を行 う。銀箔・切り紙(あかし紙)・油・胴刷り・ バレン・箔箸を使った箔のあかし方 や、ド ーサ液を使った画面への箔押しの仕方を一か ら学び、伝統的な箔押しの工程を体験する。 特別講師に日本美術展覧会 会員の月岡裕二 先生を招聘し、より専門性の高い授業を行う。 細かく裁断した箔を使い修復をすすめる。補 また金属箔の見本を見せつつ、金属箔の種類 や特性を学ぶ座学授業も行う。

ねらい・目標

伝統技術を学び、日本独自の装飾技法の体 得を目的とする。さらに金属箔の上から岩絵 具で絵を描く為の下地作り(ドーサ)や、伝統 的な箔押用具の使用方法など、学生たちが今

活動

導入:金属箔についての座学。金属箔の扱 い方や箔押しに必要な道具の種類や特性につ いて学ぶ。また、箔を日本画制作と併用して いくための下地の知識について学ぶ。

実践1:講師指導のもと、油を付けたあか し紙に、金属箔(銀箔)を定着させる「あか し」をし、各自雲肌麻紙を張った木製パネル にドーサ液を塗り平押しをする。その後、乾 燥させる。

実践2:一晩乾燥させたパネル表面を、コ ットンや手で軽くはたき、箔の未定着部分の 補修作業をおこなう。講師指導のもと、各自 修後、表面にドーサを数回引く。道具を洗浄 し、終了とする。

作品の評価・フィードバックの仕方

箔押しの過程において随時技術的なフィー ドバックを与えていく。

座学及び技術演習の授業のため、作品評価 には重きを置かない。今後、技能演習を経て 後研究を進めていくための知識の幅を広げる。 学んだことを生かした作品を描いた 学生に 研究会などで講評しながら、技能の定着を図 るとともに、授業内容の理解度を評価する。

成果と課題

箔押し講義を通して、様々な道具や技法を 学び、金属箔を扱うときに使用する箔箸を各 自使いやすいよう刃物で先端を細く加工する ものだ | という講師の指導が、学生たちに最 などの一連の工程を体験することで、何をど のように生かしていくかということを考える きっかけになったと思う。「道具というもの は、自分たちの使いやすいように変えていく

も響いたように感じた。また、今後箔を効果 的に使った作品を鑑賞する時間を設けるなど、 さらに理解し実践していきやすいよう改善し ていきたい。







東京藝術大学 絵画科 日本画専攻

授業を行う教員 | 寺内秀一(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 吉田侑加(教育研究助手) 対象学年 | 大学4年 教育領域 | 専門教育 実施時期 | --単位数 (単位時間) | --場所 | 屋内(教室)

授業概要

大作 裏打ち講義

162

卒業制作(150号)で使う麻紙の裏打ちを 行う。表具屋、寺内遊心堂の職人を講師に迎 え、実際に裏を打つ作業を見ながら裏打ちの 方法を学ぶ。講師の実演後、2日間かけて学 生全員で裏打ちの作業を行う。

ねらい・目標

日本画科では卒業制作で必ず150号を制作しており、そこで使用する大型サイズの麻紙はそのままでは強度が弱いため、裏から別の紙を貼り、麻紙の強度を上げることを目的としている。麻紙の強度を上げることで、大きな画面サイズでも絵具の作業がしやすくなり、作品の経年劣化も防ぐことができる。

活動

事前準備:正麩糊を前日に濾し、用意して 変重要であると考える。 おく。

1.裏打ち道具の説明、及び、糊の濃度の説明: 裏打ちで使用する特殊な道具(刷毛、百目 打ちなど)の扱い方を学ぶ。また大作の裏 打ちでは二つの濃度の糊を使うため、糊を どの程度水で薄めるか目で見て確認する。

- 2.裏打ち紙を大作サイズに合わせて継ぐ:裏 打ち紙である細川紙はサイズが小さいため、 150号の麻紙のサイズに紙を継いでいく。 紙の端に糊をつけ紙同士を繋ぎ合わせる。
- 3. 麻紙の裏に裏打ち紙を打つ: 麻紙に糊を塗り、裏打ち紙を貼っていく。シワになりそうな所はたたき刷毛でたたいて伸ばす。
- **4.麻紙の乾燥:**裏打ちの終わった麻紙は平ら な状態で一日乾燥させる。

成果と課題

実際に職人の手作業を見学することで、紙の持ち方や刷毛の力加減など、本を読んだり耳で聞いただけでは知ることのできない感覚の仕事を学ぶことができた。大作の裏打ちは、将来日本画制作をする上で必ず必要になってくる技能であり、学生全員に大作の裏打ちをさせることは後世の作家を育てるためにも大変重要であると考える。





発想や構想

高校生

多様な学び

東京藝術大学 絵画科 日本画専攻 和紙講義

授業を行う教員 | 西本幸宏(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 伊東春香(教育研究助手) 対象学年 | 大学3年

教育領域 | 専門教育 単位数(単位時間) | 90分 場所 | 屋内(教室)

授業概要

和紙の製造工程の映像視聴したのち、和紙 の歴史や素材の説明を行った。小津和紙から 提供を受け、事前に学生に配布した和紙のサ ンプルをもとに、彩色した際の効果の違いに ついて感想を述べてもらった。

ねらい・目標

現在、日本画の基底材として使われるのは 主に和紙である。作家にとって身近な物であ りながら、どのように作られているのかを知 らない人も多いため、和紙を熟知した小津和 紙のマネージャーである西本先生を招聘し、 知識を深める。実際に原料や様々な和紙に触 れることで、学生の興味を引き、様々な角度 から和紙を考えるきっかけとする。

活動

事前に、配布した4種類の和紙のサンプル いてもらう。

1.和紙の製造工程の映像の視聴:普段使用し

ている和紙が出来上がる工程を見る。普段 使用している和紙が手間をかけて丁寧につ くられている様子を学ぶ。

- 2.和紙の原材料に触れる:原材料である植物 を手に取り、種類や特性について学ぶ。
- 3.和紙の強度実験: 学生一人一枚ずつ短冊状 の和紙とコピー用紙を配り、引っ張り合っ て、和紙の強度を体感する。様々な和紙を 手で破くことができるか試してみる。
- 4.感想を述べてもらう:事後に、和紙講義の 感想や和紙サンプルの描き心地の感想を書 き、各自復習をする。

成果と課題

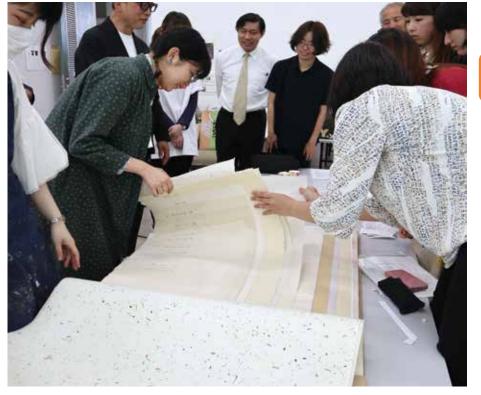
普段当たり前のように使っている和紙が、 職人による様々な工夫から生まれていること を改めて実感し、知ることができた。

手漉きと機械漉きの紙の違いや、材料によ る紙質の違いを、見本帳を使い実際に手に取 って学ぶことは、学生にとって新たな発見が あっただろう。また、配布された和紙サンプ に、絵の具や墨をつかい描き心地を試してお ルに描き心地を試してもらうことは、和紙の 種類による滲み方や表情の違いを実感し、和 紙の特性を理解するきっかけとなったと考え られる。

学生一人ひとりが絵画表現の中のひとつと して、和紙の選択肢を増やし、日本ならでは の素材を大切に使用してくれることを願う。







167

東京藝術大学 建築科

設計製図 | 小規模多機能型集会施設 拡張された家

授業を行う教員 | 藤村龍至(准教授)、宮崎晃吉(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 山川 陸(教育研究助手) 対象学年 | 大学2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | --単位数(単位時間) ---場所 | 屋内(教室)

授業概要

学部2年生前期の第2課題として、「住宅」 より大きく、いわゆる「公共施設」よりは小 さい、「小規模多機能型集会施設」を設計す る。長期の課題期間を利用した構築的なプロ セスとするため、各回明確な課題定義を与え、 シャレットによる知識の定着を図る。各回自 覚的にフィードバックを繰り返すことにより、 以降の設計に取り組む際の基礎となる知識・ 技能を習得する課題としている。

ねらい・日標

- 1.住宅地に建つ「住宅以上、公共施設未満」 の集会施設(300㎡程度)のスケールを正 確に設計できるようになる
- 2. 「ふらりと立ち寄れる」「ひとりで過ごせ る | 「少人数(10人)や大人数(100人)で 集まれる | 公共空間を想像する
- 3.周辺の文脈から建築を定義するだけでなく、 建築が敷地を超え、文脈を再定義する建築 を想像する

活動

スケジュール:

5月 16日[木] 課題発表・敷地・参考事例 見学

> 23日[木] 001案講評会+002案シャ レット / エリアリサーチ・ 課題の発見・機能の定義

30日[木] 002案講評会+003案シャ レット / 配置の定義

6月 6日[木] 中間講評会(003案)

13日[木] 004案講評会+005案シャ レット/ 構造の定義

20日[木] 005案講評会+006案シャ レット/開口・仕上げの定義

26日「水」 006案講評会+007案シャ レット / 使われ方の定義

7月 4日 [水] 007案講評会+008案シャ レット / プレゼンテーショ

ンの定義

10日[水] 最終講評会(008案=最終案)

17日[水] 全体講評会(3、4案程度選抜)

進め方:課題発表では、敷地・参考事例の 見学、周辺地域で活動されている方へのヒア リングを実施した。

設計条件として必要諸室に面積評を付す一 方、「地域の発展のために供する用途」を各 自設定することとした。

「構造の定義」では本科構造設計研究室の 金田充弘氏の指導を受け、実際の建築設計に 近いプロセスとした。

毎週の講評会では各人のプレゼと教員によ - 設計規模に対して十分な期間設定の課題の る個別指導を行った。その後、翌週定義付け たい内容に関するレクチャ・シャレットを実 施した。

作品の評価・フィードバックの仕方

- 毎回の講評会においては図面 (1/50) と模 型 (1/50)を対象に講評を行う
- 毎回の講評会後、翌週目標に向けたレクチ ャとシャレットを実施し、知識の定着を図る
- 本課題において評価の対象となる成果物は 「寸法や構造、仕上げ等が図面において正 確に表現されたもの」と定義する
- 敷地の範囲内にとらわれることなく、この

建築ができることで周辺のエリアがどのよ うになるか、いかに波及していくかを常に 考えること。建築のその先にどのような地 域の未来を想定しているのか

成果と課題

発想や構想

- ため、構造・仕上げ等の詳細な設計に踏み 込んだ議論ができた。
- 参加学生はアイデアから設計を立ち上げ、 フィードバックにより発展させる方法を体 得できたものと思われる。
- 議論の前提となる作図能力・知識不足が例 年目立つため、作図指導の補講や実習の必 要性を感じる。
- 授業者としては、シャレットの導入が翌週 に向けた案の発展を後押しすることが確認 できた。悩んで手が止まることを防ぎ、議 論を即座にフィードバックする習慣がつく ものと思われる。



幼児

東京藝術大学 建築科

プレディプロマ サイトとプロット

授業を行う教員 | ヨコミゾマコト(教授)、田村裕希(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 徳山史典(教育研究助手) 対象学年 | 大学4年前期

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 学部4年前記 単位数(単位時間) --場所 | 屋内

授業概要

卒業設計のための、敷地に対する多様な視 点を得ることを目的とした課題。建築科の課 題でありながら建築を設計せず、卒業設計の 敷地(であろうエリア)を3つの視点で描き分 けた配置図(サイト)とその概要(プロット) を成果物としている。

活動

建築を設計しないと図面は描けないが、敷 地があれば配置図は描ける。敷地は様々な事れない。 物の関係性から読み解くことができ、その関 係性は配置 (関係の) 図として描ける。何を どう描くか決めることを通して、敷地を読み 解く目線を発見し、張り巡らされた関係性の 一端を担う建築における、設計の射程を定め ることをねらいとしている。

作品の評価・フィードバックの仕方

毎週全員に対してエスキースを行い、それ ぞれのテーマに対して改善のポイントや違っ たアプローチのための導線を提示したり、図 法に対する助言をした。どのような視点で複 数のドローイングを描き分けるかという点に、 特に重点をおいて指導をした。

成果と課題

短い期間の中でそれぞれ個性豊かな成果物 が仕上がり、中にはこちらの予想を超えるよ うな概念や表現方法も見られた。

学生によってはA1サイズのドローイング 3枚(=3つの視点の描き分け)というルールが うまく機能しない事もあり、フォーマットの 設定については今後検討の余地があるかも知





171

東京藝術大学 工芸科

工芸科(彫金/鍛金/鋳金/漆工·木工/陶·磁·ガラス造形/染織) 各分野別技法演習及び技法研究

授業を行う教員 | 工芸科常勤教員全員、工芸科非常勤教員全員 主な助手・スタッフ | 工芸科教育研究助手全員 対象学年 | 大学1 - 4年、大学院1 - 2年 教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2018年後期 単位数 (単位時間) | 10単位 場所 | 屋内(教室・その他)

授業概要

実材を使った実技教育を基礎とし、各専門 課程では道具作りからそれぞれの素材感を重 視した高度な伝統技法の習得と造形表現への 展開までを養っていきます。また自己の確立 を目的に設定されたカリキュラムに沿って、 最新の技術と情報を取り入れた少人数制の個 人指導も特徴のひとつです。





ねらい・目標

歴史の中で研鑽された技芸と知識を修得し、 さらにその成果を革新し発展させ、広く世界 文化に貢献する能力を育成。各自の分野にお いて、真摯な姿勢をもって世界で活躍してい くためさらに探求する。

活動

工芸科は、彫金/鍛金/鋳金/漆工・木工/陶・磁・ガラス造形/染織の各分野毎に授業を行なっている。

《鍛金授業の例》

2018年後期 10月1日-1月16日

AM9:00-12:00

鍛金分野学部2年生

鍛金技法演習 I-Ⅱ(a.変形絞りの為の原型制作/b.変形絞り制作)

a. 変形絞りの為の原型制作:原型のサイズは250×250×高さ200mm程度とし、水粘土で制作する。今年度のモデルは「ジャック・ラッセル・テリア」とした。絞り技法の

特徴や工程を踏まえ、各自の造形から制作可能な形、不可能な形を考慮しながら粘土原型を完成させる。完成後、石膏取りを行う。

b.変形絞り制作:各自制作した原型をもとに1.2mm厚の銅版から地金取り(必要な銅版のサイズを計算し、材料取りを行うこと)を行う。焼鈍加工、酸洗い、水洗い、絞り加工を繰り返しながら制作を進めてゆく。制作する形状によって地金が薄くなりやすい部分、厚くなりやすいところを考慮し、地金を寄せて溜めたり、打ち延ばすことで地金の厚みをコントロールすることを学んでゆく。また、状況に応じて金鎚、当金等の道具を適宜選択していくことで、制作物と道具の関係性を習得していく。

成果と課題

鍛金の根幹をなす技法のひとつである、変 形絞りの実践により、制作工程や段取り、地 金の延性を介した厚みのコントロールや、着 色技法等をふまえ各自の作品研究へと展開し ていくことが出来る。発想の手掛かりや幅広 く知識、技術、考え方を習得することが目的 である。課題としては、基本の回転絞りから 変形絞りへの応用にうまく対応できなかった 学生がいた場合、取り組み方に差が出てしま う事が挙げられる。



鑑賞

173

東京藝術大学 美術研究科 文化財保存専攻

油彩画修復実習

授業を行う教員 | 土屋裕子(教授)、伊藤由美(非常勤講師)、田中智恵(非常勤講師) 対象学年 | 大学院1 - 2年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 通年 単位数(単位時間) | --場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

油彩画の保存修復技術を学ぶ。修復前に光 学機器を用いて目にみえない作品内部の状態 を観察・記録する。さらに光学調査の結果を ふまえて目視の観察をおこない、作品の作画 技法や保存状態の原因を探っていく。それら の結果をもとに、作品の修復仕様を作成し、 作品の修復を進める。

ねらい・目標

ろんのこと、修復方法や修復材料に関して、 いくつかの選択肢のうち修復対象作品に対し、 連の修復作業を実施し、最後に報告書を作成 なぜその材料を使うのか、なぜその方法で修 復をおこなうのか、常に理由を考えながら理 論構築することも学ぶ。そのようなトレーニ ングを積みながら、保存修復を研究活動とし て位置づけていく。

活動

復理論について、これまでのどのような考え のもと、どのような修復がおこなわれてきた により、学生の技量や理解度などを把握する

のかを学ぶ。

実践1:油彩画の光学調査をおこなう。正 常光写真、側光線写真、赤外線反射写真、紫 外線蛍光写真、X線透過写真などを撮影し、 目にみえない作品内部の状態を把握し、記録 する。

実践2:光学調査の結果を用いながら作品 を目視で詳細に観察し、作品の構造や保存状 態を記録し、損傷の原因を推定する。その上 で、修復内容の検討をおこない、修復仕様を 作成する。

実践3:修復仕様に基づいて、絵具の剥落 修復の実習では基本的な技術の習得はもち 止め、カンバス補強、画面クリーニング、欠 損部の充填・補彩、ワニス塗布、額装など一 する。

作品の評価・フィードバックの仕方

指導教員は修復作業の各工程において随時 技術的指導をおこない、学生は学年末までに 一連の技術実習を経て、学んだことを盛り込 んだ修復作品の詳細な報告書作成を通じて、 導入:修復についての座学。修復事例や修 各自の理解度を確認することができる。指導 教員は修復作品および報告書を点検すること

ことができ、学生にはさらにそれをフィード バックしていく。なお、座学と技術実習の授 業であるため、作品評価には重きを置かない。

成果と課題

修復理論や光学調査を含めた一連の修復実 習を通じて、油彩画の扱い方や基本的な修復 技術を学び、油彩画を芸術作品としてだけで はなく物質としてとらえることで、作品理解 がより深いものになっていくと期待できる。 手先の技術を磨くだけでなく、文化財の保存 や修復技術について、より良いものを目指し て常に考える習慣を身につけ、研究していく ことが課題である。





175

東京藝術大学 彫刻科

174

彫刻実技Ⅱ-I 金属(基礎実技·課題制作)

授業を行う教員 | 大巻伸嗣(教授)、本郷芳哉(非常勤講師) 主な助手・スタッフ | 鈴木弦人(教育研究助手) 対象学年 | 大学1-4年、大学院1-2年

教育領域 | 専門教育

実施年・時期 | 2019年4月8日 - 5月25日 単位数(単位時間) | 9単位

場所|屋内

授業概要

金属素材(鉄)を使用した制作の基礎実技 授業。基礎技術実習、技術課題制作、課題作 品制作、3部構成になっている。

ねらい・目標

課題を通じて、金属彫刻制作の基本的な技 術と安全について習得する。金属(鉄)、ガ ス溶接、ガス溶断、電気溶接、機械操作につ いての知識を得る。それらの技術を元に作品 を制作する。

活動

課題:

1.基礎技術実習:

- ト・ナット、ネジ等の締め付け)
- 切断切り出し(シャーリング、高速カッター、 こととする。) ガス溶断等)
- 表面仕上げ(黒皮残し、グラインダー仕上げ、 鏡面磨き、錆付け、オイルでの焼きつけ、塗装等)
- 2.技術課題制作:箱イス制作
- 3.課題作品制作:

「テーマ]

みえないもののイメージ

―時間をかたどる―

[課題文]

"みえないもの"とは、どのようなもので あるか。皆さんにとってそれぞれの経験など から、考察をして制作しなさい。

例えば、神話や伝承をイメージとして定着 させる試み、つまり物語を視覚化させる試み は、いわば時間にかたどりを与えるものであ るといえる。

"みえないもの"には様々な事象を想像し、 広げ、繋げていく可能性を持っている。

2年生になり基礎的な技術学習だけではな く、空間や場、彫刻をそれぞれに設定し、テ ーマを解釈して制作しなさい。但し、素材は 鉄を主に用いることとする。

(鉄材は基本的に一人15kgとし、研究室でまと - 組み立て方法(ガス溶接、アーク溶接、ボル めて発注する。但し、追加で材料が必要な場合は スタッフと相談の上、自己負担で追加購入できる

作品の評価・フィードバックの仕方

金属作品制作過程において随時技術的なフ ィードバックを与えていく。

座学及び技術演習の授業と2種類の作品制 作の課題がある。技術演習を経て学んだこと をいかし、課題作品の制作を行う。授業内容 の理解度と発想、課題制作への取り組み姿勢、 の広がりと新たな発見を目指す。 提出作品の内容等を総合的に評価する。表現 力や造形性、空間性、素材の特性などについ て考察が見られたものを評価する。

成果と課題

金属という素材を扱う経験から、彫刻制作







東京藝術大学 美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻 グローバルアート共同カリキュラム パリユニット

授業を行う教員 | 毛利悠子(講師/現代美術家)、李 美那(准教授/キュレーター) Emmanuelle Huynh(教授/コンテンポラリーダンサー、振付家) Didier Semin(教授/美術史) 主な助手・スタッフ | 赤尾 木織音(特任助手) 対象学年 | 大学院1年

教育領域 | 専門教育 実施時期 | 2018年4月-7月 単位数(単位時間) | 5単位 場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

東京藝術大学(以下:本学)と協定校のパリ国立高等美術学校(Beaux-Arts de Paris 以下:BAP)の共同授業が、本専攻の特徴的なカリキュラムのひとつである「グローバルアート共同プロジェクト パリユニット」において開講されています。

本プロジェクトは、日仏の学生が両国を往 来し、対話と協働作業によって文化の共通点 や差異を学ぶ現代アートの社会実践を目指す ものです。

2018年度は、本学GAP専攻に在籍する修士1年生より8名、BAPから選出された学生10名の計18名が参加しました。

ねらい・目標

本共同授業は「ART AS EXPERI-MENT: Performing the School / アートは実験であり、学校はパフォーミングの場である」をテーマとし、学校を実験の場として捉えて展開しました。

両校のヴィジョンや教育方針が交差し、参

加者自らがお互いの学校について考察すること、そして身体表現やインスタレーションの 実験を取り入れた共同授業でのコラボレーションを通して、人としての存在と関係性、そこに生まれる空間などに対する意識を研ぎ澄まして作品として結実することを目標に構成されました。

活動

BAPで初の身体表現の教授として着任した、エマニュエル・ユイン教授と本専攻の毛利悠子講師によるワークショップを中心に、自らの身体を気づかせること、一人の身体の動きを、二人そして複数人の身体に呼応させることを主題に据えた授業が展開されました。

また、李美那准教授とディディエ・スマン 教授によるレクチャーや展覧会鑑賞も実施さ れました。

2018年4月から5月は参加学生を対象に事前授業として、成果発表会場の視察や鑑賞授業、英語のポートフォリオ作成などを行い、共同授業の第1セッション(5月18日-6月1日)をフランスのパリで、第2セッション(7月9

日-7月22日)を本学取手校地、上野校地、成 果発表会場である草月会館で実施しました。

作品の評価・フィードバックの仕方

両校の教員がプロジェクト全体における参加学生の活動について意見交換を行い評価しました。

特に身体と空間を介した表現力、グループ ワークの中での貢献度や取り組み方などを包 括的に評価し、学生からもプログラムや教員 に対するフィードバックを受け、次年度の組 み立てに反映させました。

成果と課題

最終的な発表方法は舞台作品として一つの形をとり、そこに至るまでの身体と意識の関係性を意識化させる多様なワークショップは、ほばパフォーマンスとは無縁の平面作品や立体という視覚芸術を学んできた学生たちにとっては、とても新鮮な驚きに満ちた経験であり、新たな感覚や視点を覚醒させることになりました。







公開授業

学校教育関係者を対象に、東京藝術大学の授業実践の 公開見学者を受け付けました。



1. 絵画科油画専攻

講師:田沼利規

日程:10月17日(木)10:00-12:00

内容:絵画科油画専攻の学部1、2年生を対

象とした銅版画実習。

講師による実演を織り交ぜつつ行った。



2. 絵画科日本画専攻

講師:手塚雄二

日程:10月17日(木)10:30-11:30

内容: 手塚雄二教授が退任展に伴い、日本画 学生に向けた公開授業を行った。

本画に至るまでの素描や下図等の展示を通 して、より良い作品にするための制作過程を

学ぶ機会とした。



3. 先端芸術表現科

講師:日比野克彦

日程:10月18日(金)9:00-12:10

内容: 学部1年生のカリキュラムでは「工作・ 立体造形」「写真」「デザイン」「身体」「映 銅版への描画、腐蝕、刷りのレクチャーを、 像 | 「音楽」など様々な領域やメディアを学ぶ。 今回は「映像・音楽」の講評会を公開した。



4. 美術教育研究室

講師:木津文哉

日程:10月29日(火)14:00-16:00

内容: 既存の作家に見られる創造の原点や作 品が生み出される経緯を解説し、それらを視 覚資料で確認することにより、作家における 教養とは何か、あるいはその知識の広汎性に ついて講義した。



5. デザイン科

講師:藤崎圭一郎

日程:10月31日(木)9:30-12:30

内容: さまざまなデザイン領域に対応できる よう、理論、情報、機能の3つの領域の実技

課題を行った。

この課題では、「川」を調べることで、自 然と人間をとおして、デザインの基礎となる 観察と表現を学んだ。



7. 工芸科染織研究室

講師:橋本圭也

日程:10月23日(水)10:00-12:00

内容: 工芸科染織分野の学部 2年生を対象と

した染織技法演習 Ⅰ-Ⅱ。

この演習では二重織の技法と表現を学ぶ。 他学年の授業と合わせて研究室を公開した。



6. 保存修復油画研究室

日程:10月31日(木)14:00-14:50

内容:油彩画の保存修復技術を学ぶ。

肉眼と光学機器等を用いた修復前の観察結 果をもとに、作品の修復仕様を作成し、それ に基づいて作品の修復を進めていった。



「私が受けた美術教育」

「私の受けた美術教育」

アンケート対象: 東京藝術大学美術学部 ・研究科の現役学生

企画概要

「こんな意識を受けてみたい」という配かかけ に最もサアリティを持って多えられるのは誰だ から、それは原業を使ける立場にある意識・学 また、他のの学生をあるのはテ、キマツをよ 表に、「現内教育の思い止アンと 本集例では「私でより」

DE DESCRIPTION DE LE CONTROL D

Annellant represent

Honvienneu

100,00 mm - 00 0000 1000 mm - 000 00 00 1000 mm - 000 00 1000 m

CALCADA DAS CONTRACTOR CONTRACTOR



THE PERSONNEL .

B1 - 146

The Parameters

教育の部間に

=

(4)

E CONTRACTOR

書頭の向き

- 18.00 - \$100 c

NAMES AND ADDRESS OF THE PARTY OF THE PARTY

-

The second

連続教育の方法



Eccamicvood

- month







藝

東京藝術大学美術学部社の会|杜の会学生委員会 「私の受けた美術教育」

アンケート対象|東京藝術大学美術学部・研究科の現役学生 アンケートテーマー「あなたが受けた美術教育の中で印象に残っているエピソード」

杜の会学生委員会

杜の会とは、昭和61年に発足した東京藝 術大学美術学部・研究科の同窓会組織であり、 学生は入学と同時に杜の会の会員資格を得る。 これまで卒業制作展や退任展、学内環境の改 善など様々な事業を助成し、世代を越えた縦 のつながりを実現してきた。

そして今年4月、杜の会・日比野克彦会長 の呼びかけにより、同窓会機能を活かした現 役学生による現役学生のための組織"杜の会 学生委員会"が立ち上がった。本委員会では、 学内の場所を活かした展示や、学内環境の改 善、プロジェクトなどへの協力および参加を 学生主体で行なっている。

本学の学生たちはほとんどが個人で制作や 研究を行なっているが、本委員会は科や専攻 さらには学年を越え"東京藝術大学"という 括りで、自らのいる場所を確認できる組織を 目指している。

企画概要

「こんな授業を受けてみたい」という投げ っている思い出は何ですか? かけに最もリアリティを持って答えられるの は誰だろう。それは授業を受ける立場にある 生徒・学生だ。朴の会学生委員会は今夏、本

学学生を対象に「美術教育の思い出アンケー トーを行った。本展示では「私たちが受けた 美術教育」として回答の一部を紹介する。

幼稚園から大学院まで、あらゆる課程での 思い出が寄せられた。なかでも美術に強く惹 かれるきっかけを物語るものが多く、そこに は成績と単純に結び付けられない美術教育の 特性が現れていた。

「毎回、授業時間内に課題を終えられなか った」という学生のエピソードを例にみてみ よう。本来、授業として一定の評価をする場 合、定められた時間内に基準を満たせていな い生徒の評価は低くなるだろう。しかし、こ こでは結果だけではなく制作過程の広がりを みた先生の考え方が、彼と美術の距離を近づ けるきっかけとなっている。

このように本学に入学した学生の多くは、 成績評価以外の観点で、美術に強く惹かれる 瞬間があったのだ。それは美術との本質的な 「出会い」と言えるかもしれない。

こちらの展示を通して、自分自身の経験を 思い返していただけたら嬉しい。

あなたが受けた美術教育の中で、印象に残

『 おう、 やっていい、 やってみな。』

「おう、やってみな」高校の美術の先生は そう言って、わたしの伝えたいこと、面白い ことをいつも大事にしてくれました。実は美 術に苦手意識があったわたしは、その授業で 表現の意味と力を知りました。

2011という年、わたしは高校3年生でし たが、周りの世界が妙なものに映りました。 震災後に現れた、被災地応援や復興、そして 絆といったテーマ、その民主的プロセスを経 ていないポジティブな熱狂。一方で同級生の 多くは、大学受験で「正しい解答」を示すた めに脇目も振らず奮闘していました。「もっ と一人ひとりの考え方、ものの見方があっ たはずなのに…」そう思うわたしの避難先は、 自分の表現ができる美術の授業でした。そし てそこで描いた作品の一つが、同年の文化祭 のポスターになりました。

実際に学校中に貼りだされているのを見 て、感動したのを覚えています。それは"自 分が描いたものが評価された喜び"だけでは ありません、それは一人の生徒が知っている こと、感じたこと、そしてやりたいと思うこ とを作品に表すことができれば、受け入れて もらえると知った感動でした。さらにその先 生は私が描いた文化祭の名称「蹊」という文 字に、漢字とローマ字の双方が隠れていると 指摘して下さり、それを聞いた生徒たちはポ スターを縦にも横にも、逆さにも貼ってくれ ていました。正しい向きなんて人それぞれで いいんだ、と嬉しくなったのを覚えています。

振り返ってみれば、美術の授業で作った 作品は当時のわたしにしか作れないものばか りでした。たとえ政治的な指導が入ってしか

るべき案であっても、作品として完成させる ことができたのは先生のおかげです。高校卒 業後わたしの表現する内容は、興味や知識の 広がりとともに変化しています。しかし、今 でも自分自身の考えをもっと世に表してみよ うと思えるのは、「やってみな」という先生 の声が力になり続けているからです。



田中ジョン直人

(GAP 修士課程当時:成蹊高等学校 高校2年-3年)

『教育の隙間に』

中学時代、美術の授業で行う課題で自分は 毎回必ず提出期限に間に合わず、マイペース に自分が納得のいくまで制作してしまうよう な生徒でしたが、美術の先生はそれについて 怒ったり提出を急かしたりすることはなく、 むしろ「期限はもうええけえ自分が納得する までやれ」と言ってくれました。

自分にとってはそれがすごくありがたいこ とでした。

校則や求められている常識、提出期限など 縛られるものが多い学校という環境のなかで、 美術はおおらかな隙間であるということを感 じられたからです。

自分はしょっちゅう机にラクガキをして怒 られていましたが、その美術の先生は立場上、

大

ラクガキを注意しつつもその絵をみて感想や アドバイスをくれました。

自分が美術の大きさ、広さに触れて惹かれ たのはこの先生のおかげだと思います。



船田健介

(油画科2年/当時:広島市立矢野中学校3年)

『ものが素材になるとき』

このエピソードは美術ではなく書道の授業 でのものです。それは書を習う前に、自分の 印を作る授業でした。消しゴムや木を彫って 作る簡易的な印とは違い、白渓石という目の 細かい硬度の低い石を鋼の印刀で彫って作り ました。石を加工する…。普段生活するな かでとても硬くて重い物だったので、その石 を材料として扱う作業にとても感動したのを 覚えています。 白渓石を掘る印刀は鉄を加 工し、より硬度を高めた鋼を使用しており、 それにも衝撃を受けました。

石が金属で削れることや鉄の硬度がかわるこ とから、道具と素材の関係、素材の持つ可能性に とても興味が湧きました。私が工芸科に入学し たのは、ここでの経験がきっかけとなっています。

野田怜眞

(工芸専攻漆芸 修士課程

当時:起工業高等学校2年生)

『表現の向き』

母の部屋の段ボールに大切にしまってあっ た鍵かけ。幼稚園で母の日のプレゼントとし て作ったものです。

子供たちが話したり、はしゃいだりしな がら思い思いの絵を描く中で、先生は「色が 素敵ね!|「お母さんは何が好きかな?」な どと声をかけてくれました。今考えると、作 品を受け取る人について想いを向けるという、 少し「お姉さん」になる姿勢を学べたと思い ます。その後、私が作った鍵かけは双子の弟 が作ったものと共に冷蔵庫に貼り付けられ、 私たち兄弟も少しずつ使い方を覚えていきま した。同時に、家族で私たちの鍵かけを見な がらそれぞれの個性について話したり、私が 小学校高学年になっても母が「あなたはあの 頃から絵が得意だったわね」と言ってくれた りしました。この鍵かけは何年もの思い出を まとい、時には私を励ましてくれます。



山本彩乃

(芸術学1年/当時:江戸川台幼稚園 年長)

『美術教育の力』

ポジティブ面:小学五年年の時、図工の 先生に「貴方の絵はとても良い! 才能があ るわね! 描く事が好きなら休み時間図工室

を開けるからおいでして言われて自信が付き、 それからの2年間は休み時間を外遊びと作品 制作に費やしました。当時私は将来きっと絵 か歌の道に進むのだろうと思っていました。

沢山のアドバイスをもらいながら色々なコ ンクールに出させてもらったおかげで、表現 する事に対して抵抗なく、今もなお自信を持 ち続けられるようになりました。

ネガティブ面:コンクールやアドバイスを 通じて、どんな絵がウケるのか、審査員や先 生がどういった絵を描いたら喜ぶのかわかっ てしまい、正直言うと、先生や両親のために 描いていた面があります。

今思うと悪いことではないけれど、もう少 し自由に自分の表現の為に描いても良かった な…と思います。



小坂初穂 (油画科2年

当時:御殿場市立御殿場南小学校5年生)

『作品を伝える見方と言葉』

日本美術史の授業が大学美術館の収蔵庫前 室のようなところで行われたことがあります。そ れはディスクリプションの練習をする授業でした。

部屋に衝立が置かれていて、その奥に実 物の作品が掛けられていました。学生の一人 だけが衝立の奥へ行き、実際に作品を見なが

ら、衝立の手前にいる作品が見えない学生た ちに口頭で説明をします。そして説明を受け た学生たちは、そこから想定される作品をス ケッチで再現するという内容でした。

しかし学生によっては説明が漠然としすぎ て、何が描かれているのか、どのような作品な のか、さっぱりわかりませんでした。私自身もそ のような漠然とした説明をしていたことに気 がつき、これでは駄目だと思い知らされました。

私は以前、ディスクリプションとは作品を 見ていない人でも、どのような作品か目の前 に浮かぶように説明することだと教えられ、 それでわかった気になっていました。ところ が、実際にやってみると、頭で理解していた ものとは異なり「伝わる」説明が必要なのだ と知りました。何をどうのように説明しなけ ればならないのか、ディスクリプションのな んたるかをこの授業を通して体得することが できました。それは言葉で伝えていく美術史 の基本を身につけられる貴重な経験の一つだ ったと思います。



和田千春 (芸術学 日本東洋美術史 博士課程 当時:東京藝術大学修士課程)

学生座談会 ~美術の時間はわたしにどんな影響を与えたか~

日程 | 10月27日(日) 14:00-16:00

会場|東京藝術大学大学美術館 本館地下2階 展示室1

参加者 | 小坂初穂(油画専攻2年)、 田中ジョン直人(グローバルアートプラティクス専攻修士1年)

船田健介(油画專攻2年)、 松永亮太(文化財保存学專攻保存修復油画博士課程) 山本彩乃(芸術学専攻1年)、 和田千春(芸術学専攻日本·東洋美術史博士課程)

現役の杜の会学生が集まり、自らが受けてきた教育を踏まえて、 美術教育のあり方を議論した。

松永: それではまず、朴の会のブースに出 展いただいたそれぞれの作品と、その作品に 関する授業について教えてください。今やっ ている制作についても、ぜひ。

小坂: 油画専攻2年の小坂初穂です。

小学校の時に読書感想絵画コンクールに出し た作品を展示しました。「自分の表現したい こと | と「審査員にウケる絵 | が混在した絵 です。この頃は狙ってコンクールに出せばい つも金賞だったのですが、この絵では自分の 表現したいものを入れてみようと。結果は予 想通り銀賞でした。(笑)

テーマにしています。

修士1年の田中ジョン直人です。

高校の頃に選択科目の美術で制作した文化 祭のポスターを展示しました。ポスターなの で、文化祭の名前や開催日など、情報を乗せ てデザインしなければいけないのですが、自 しました。

学部では農業をやってたのですが、最後は 美術史で卒業しました。アートは危険でもあ るけど自由。今は社会におけるアートの立ち 位置みたいなことを考えながら、取手キャン パスで畑を耕しています。

船田: 油画専攻2年の船田健介です。

これは中2の美術の授業で作ったものです。 あまり覚えてないのですが、ガラスを掘って 着色するもの。もともと詰め込むのが好きで、 モチーフを増やしたらガラスを掘る作業が全 然おわんなかった。(笑) 先生は、単元が終 わっても『やりきれ』と言ってくれて、俺だけ 現在の制作は、自分の過去や現在と社会を ずっとこれをやってたんです。放課後も使い ながら仕上げたときには「よく頑張った、い 田中: グローバルアートプラティクス専攻 い作品だよ」と褒めてくれました。自分はそ こで助かったというか。時間やカリキュラム が厳格に決められてる教育のなかで、美術だ けはルーズというか寛容。これが「美術の時 間は教育の隙間だな」と思ったキッカケです。

絵画科なのでもちろん油絵もやりますけど、 分はファインアートや美術史からアプローチ いろんなメディアの選択肢を持っていたいと 思っています。自分は、美術のプレイヤーと

それ以外の人の分断がすごく気になってるの で、両者の橋渡しになれる作品を作れたらと 思っています。

山本 : 芸術学専攻1年の山本彩乃です。

展示したのは、幼稚園のころ母の日のプレ ゼントで作った鍵かけです。幼稚園の先生に お母さんは何が好き? と聞かれ、一緒にチ ューリップ見に行ったな、花火も見たな、と 考えながら作ったものです。もともと小さい 頃から美術は好きだったのですが、大人にな って美術をやろうと思ったのは「鑑賞」を好 きになってからです。今は美術史や美学をや っています。

和田: 芸術学専攻、日本・東洋美術史研究 室博士課程の和田千春です。

わたしは修士で受けた日本美術史演習での ノートを展示しました。収蔵庫の前室に衝立 が用意され、学生が1人だけ向こう側で絵を みる。その学生の説明を聞きながら、こちら 側の学生がスケッチをするものでした。「川 考えていきたいと思っています。

みたいなのが、、、木が、、漁師のような人が 歩いていて、、ここにハンコがありますが読 めません」みたいな。そんな説明を聞いても スケッチできないんです。川ってどこに?漁 師はどんな格好でどこへ向かっているのだろ う、と。そもそも油絵なのか日本画なのか。 木も葉があるのか、葉をまとめて書く作家も いれば、一枚一枚書く作家もいる。困りまし た。よく教授に「君はディスクリプションが ダメだね | と言われてたんですが、この授業 を経て少しマシになったと。大事なきっかけ の授業です。(笑)

松永 : 文化財保存学専攻、保存修復油画研 究室博士課程の松永です。

私は今回の企画を担当した杜の会学生委員 会の委員長を務めています。普段は現代美術 の保存について研究しています。「保存」す るには作品を理解しなければならないので、 この大学で作品を作っている人たちと一緒に



大

ディスカッション: 経験した美術教育について どう考えるか

松永: さっそく本題です。学校の制度のな かで、美術を学ぶメリットデメリット。言い 換えると「集団の中で美術を学ぶこと」につ いて。先ほどの「時間のなかで終えられなか った」という船田くんのエピソードは考えさ せられますね。

船田: 美術に限らず芸術科目は、数字以外 の観点から評価できる唯一の科目かなと思い ます。「美術は教育の隙間」とよく言ってい るのですが…答えのない問いに対していかに 反応するか。

「制度のなか」では、適切に運用されれば メリットばかりだと思うのですが、不適切な 運用になってしまうと危険だなあと。

松永 : 不適切というのは…

船田: 美術教室でのアルバイトで目の当た りにするのですが、「これは、こうやって書 くものです」「絵の具はそんなに出しちゃダ メ」「その書き方は違うよ」とか言っちゃっ たりして。先生の方から、子どもに「評価で きるわかりやすいもの」を求めているんじゃ ないかなと。

一同: ああ~

船田: その子の表現をいかに広げるかとい う点から外れてしまってる。すると他の科目 と同じように正解があるように感じて、子ど もも「先生が喜ぶもの」を求めるようになる。 自分はこれが不適切かなと思う。

松永 : 美大受験の教室だとデッサンの描き 方を教えるというのはありますが、絵画教室 でも「これが正解」と暗に提示するようなこ

とはある。小坂さんの言っていた「審査員ウ ケがいい絵」もそれに近いんでしょうか。

小坂: 例えば、アニメやイラストのキャラ クタータッチの絵もあるけれど大人はそれを 認めない。目の前にある感動を書いて欲しい、 というエゴがあるように感じます。

船田くんが言った通り「こうやって書きな さい」は、子どもの人生を無視することでも あると思います。やりたいようにやったら先 生や大人が喜ぶものに当てはまらない、だか らちょっと苦手だと思う、好きじゃなくなる。 これはあると思います。そういう観点の科目 じゃないのに。



山本:一つ思ったんですけど、先生たちも 最初は「自由に書きなさい」と言いますよね。 なのに、なぜか構図が決まっている。シャボ ン玉の絵なら上から吹いている人、下に見て いる人、髪が風になびいてる。色々あるのに。

美術の自由って制約がないことではなく、 "制約を自分で組み合わせられる自由"かな と思うのです。その認識がズレて、自由の取 り違えが起きてる。先生は言わないけどなん か求められてるものがある…と気づいて応え はじめる。そこで自由の取り違えは発生して いるのかなと。

田中: もちろん評価はあっていいのですが、

"その物差しを自分で規定できる"というのが、 生まれたものですか?自発的に? 美術の自由なんじゃないかとも思います。コ ンクールの話は、メリットがデメリットに転 じてしまってるのかもしれません。



自分の創造性が抑え付けられたと 感じたことはあるか

小坂: 大人のニーズに応えれば結果は返っ てくると思うのですが、表現したいこととぴ ったり重なるわけではないですよね。自分の 表現をやったら、期待に応えて獲た居場所を 壊すことに繋がるのではという怖さがありま した。誰かの目を考えて描いてしまう。

松永 : 逆に自分の創造性を美術教育が見出

してくれたというのはありますか?

和田: ああ、デッサンは写真み たいに綺麗に描けると高い評価に なると思うんですけど、私はそん なことはできませんでした。ある とき「抽象画のように、絵の中に ふたつ意味を込める方法で描いて みたら」と言われ、道が拓けたこ とがあります。

松永:「自分のデッサンがダメ だ」というのは、美術教育の中で

和田: そうですね…。いや、私はシュール レアリスムの絵画が好きでよく見ていたので、 どうしたらあんなリアルな絵がかけるんだろ うか、自分の絵はダメだなと思ってたのかも しれませんね。

鑑賞よりも制作中心型の授業が 多いことについて

松永 : 鑑賞が授業の中で取り入れられるこ とへの可能性についてはどうですか。

山本: 芸術学には、造形を中心に読み解く ことと、作品の背景にある思想を読み解くこ との2つありますが、今はどうしても思想み たいなのは見落とされがち。鑑賞の授業でも 作品の世界に触れて終わってしまうことは多 い気がします。

作品の思想について「そうなんだ」と自分 とは別物として終わるのではく、その人の立 場に入り込んで、その思想をもってみる、と いうのが大事なのではと思います。

松永: 理論でも制作でも、対象の立場に入 り込むというのは大事かもしれません。僕ら



藝大



は、人の作品からたくさん影響を受けますが、すぎてしまった | ということはありますか? 鑑賞の教育ってなんでしょう。

ですか。美術教育はそもそも、鑑賞に圧倒的 当時の人だったら、りんごをみて何を感じる に重きを置くべきだと思っています。

るのは全体の1割に満たないですよね。その 1割未満の人って、誰かに言われなくても美 術をやるんですよ。そしてほとんどの人は、 鑑賞で美術と関わっていく。なのに鑑賞につ いては、何も言われない。「自由にみていい んだよしだけですよね。

鑑賞での自由は一定のリテラシーがあって 成立するので、そこをうやむやにして自由と いうのは良くないですよね。

松永: その反面で、宗教画などを見るとき に意味を知りすぎていて本を読んでいるよう に感じることもあります。絵の見方で「知り

山本: 知りすぎるというより、時代の違い 船田: 少しメッセージがずれますが、いい を踏まえる、というのは大事な気がします。 とか直感に働きかける装置だったかもしれな 美術教育を受けても美術のプレイヤーにな いけれど、今の時代を生きてる私たちにとっ ては、そうではない。美術作品はその人の主 観を暴走させる装置ではないので、鑑賞には 補助線のようなものが必要だなと思います。 それがないと、自分だけで物語を広げていっ てしまう危うさも。

> 松永: なるほど。自分なりの解釈がいきす ぎたら、作品が自分のための感情の装置みた いになってしまう。これは美術以外にも言え ると思います。

> 例えば数学をやっていても、今は当たり前 に数字がある時代なので、0をみて驚きで震 えるとかはないですもんね。(笑)

山本: だから、時代の目や時の立場を持つ ことが大事なのかなと思います。

こんな授業が展開されたら面白い

田中: 美術って、自分の内面との対話です から、自分に期待しなきゃいけない科目だと 思います。自分に期待したことを他者にうま く伝えられる方法を勉強する

小坂: 加えて、内面との対話だけでは表現 は生まれてこないと思うんです。時代や人と の関わりもあって表現が始まる。伝えたいと き、他者がそこに絡んでくる。私は他者の目 線と自分の表現したいことをどう結びつけら れるのかを考えていきたいです。

船田: 自分は一つの課題ごとに展覧会をや って総括するのがいいなと思います。作家が いて、キュレーターがいて、デザインする人、 鑑賞者、それぞれの役割で展覧会を作る。美 術教育ができることは、美術を取り巻く枠組 みを教えるものかなと。美術には多様な在り 方があり、文脈があり、こんな作法もありま す、と。

松永: 展覧会の形式で、美術をとりまく関 係性を見出すのは面白いですね。

田中: いまここで意見を言い合っているこ と自体も、いろんな立場で議論できる美術の 役割であり、面白いところですよね。

小坂: 一つ付け加えたいのが、美術史のな かでものを語ろうとせず、産業や科学、社会、 経済などと混ぜながらそれぞれの見方を提示 していくと面白くなると思います。例えば絵 具を科学的に見たり、画材の変化を産業の発 展と重ねてみたり。そうした美術との関わり

方もあり得る。

山本: 同感です。表現したいという気持ち は一つでいいけれど、そのための方法は多様 でいいと思います。その方法の選択肢を作る のが大事かなと。



松永: 確かに選択肢を広げることは大事で すよね。保存修復でいうと、例えばパフォー マンスで使った装置を残したからといって、 そのパフォーマンスが保存できたとは言えま せん。ですから、音楽での「再演」「再現」 の視点を入れみたり、領域を超えて考えると 可能性が広がります。

美術教育でいうと、美術は他の教科とつな げられる可能性に富んでいるので、制作でも 鑑賞でも「美術」に囚われず、多様な視点を もてる教育が行われるといいなと感じました。 そうして美術への多様な関わりを持たせるこ とが、結果的に表現の選択肢を広げる良い美 術教育になるのだと思います。

本日はありがとうございました。



総合地球環境学研究所

『 国連子供環境ポスター原画コンテスト』

国連子供環境ポスター 原画コンテスト

『国連子供環境ポスター原画コンテスト』は、国連環境計画(UNEP)と、地球環境平和財団(FGPE、日本)が、民間企業の協力等を得て、世界の中学生以下の子どもを対象に行っている事業です。毎年環境問題に関わるテーマを掲げ募集を行い、まず国連の6つの地域事務所(アジア・太平洋、西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中米・南米)で予備選考を行います。

その後、上位作品はケニアのUNEP本部、 日本、ヨーロッパなどで実施されるグローバル部門の最終審査に臨みます。優秀作は国連のカレンダー・絵葉書等に採用されるほか、世界各地で国連の行う環境に関わる催し物の折に展示されています。総合地球環境学研究所はこの事業の協力機関であり、コンテストの全応募作はすべて総合地球環境学研究所に寄贈されています。

取り組みの内容

総合地球環境学研究所(地球研)は、「地球環境問題の根源は、人間文化の問題にある」という認識のもと、世界各地をフィール

ドに異分野融合型の研究活動を通して、地球 環境問題解決に向けた実践的な研究を行う国 立の研究所です。

地球研は、研究者だけでなく、一般の人々との交流も重視しています。優れた研究成果も実践で通用しなければ意味がありません。 具体的に社会をより良いものに変えてゆくのには、どうすればいいのか。それを研究者だけでなく、一般の人々と「共に」考えるのが地球研の「総合地球環境学」ということになります。

今回、一緒に地球環境問題を考えた「仲間」は、滋賀県の草津市立・渋川小学校の6年生の皆さん。これまでも、国内外で同様のワークショップを行ってきましたが、絵の持つ訴求力と、そこから喚起された子どもたちの感性や考え方には驚かされることがあります。一つの絵をめぐって子どもたちがどのようなことを感じたのか。海外の子どもたちの作品と、渋川小学校の生徒によるキャプションをご覧ください。

総合地球環境学研究所・コミュニケーション部門・教授 阿部 健一





大

東京藝術大学×東京都美術館[東京都 | 連携事業 | 国立·公立]

Museum Start あいうえの ダイバーシティ・プログラム

授業を行う教員 | 伊藤達矢(東京藝術大学特任准教授) 稲庭彩和子(東京都美術館 学芸員) 、 渡邊祐子(東京都美術館委託専門家) 鈴木智香子(東京藝術大学特任助手)、 山﨑日希(東京藝術大学特任助手) 熊谷香寿美(東京都美術館 学芸員) 対象 | 社会的困難を抱える子供たち

実施年·時期 | 2017年4月 - 現在 場所 | 美術館

授業概要

Museum Start あいうえの は上野公園に 集まる9つの文化施設が連携し、文化財を介 して子供と大人が共に学ぶ環境をデザインす るプロジェクトである。その中からダイバー シティプログラムについて紹介する。ダイバ ーシティプログラムでは、貧困状況にある子 供や海外にルーツがあり日本でカルチャー・ ギャップを感じる子供を支援する団体、児童 養護施設など、外部の機関と連携をしながら、 自由に作品を鑑賞する活動を実施している。 主に美術館や博物館で大切にされている作品 を子供と大人が対等な関係で対話をしなが ら、自由に鑑賞する活動を実施している。ま た、鑑賞を深めることを目的とした造形活動 の時間なども取り入れている。プログラムに は、アート・コミュニケータ(とびラー)や 学芸員、大学の教員が子供たちの伴走役とな り活動を共にし、コミュニケーションを大切 にしたプログラムとなっている。

ねらい・日標

子供たちは対話を通して作品を鑑賞する中で、他者との感じ方の違いを発見し、考え方の違いに気付く。また、一人の子供の発言を他の子供たちや大人がしっかりと聞き(受け止め)、それ肯定してゆくプロセスの中で、子供たちの自己肯定感や多様性が育まれる。さらに、子供たちの伴走役となるとびラーにとっては、等身大で社会的な課題に関わることのできる場となる。

活動

事例:海外にルーツを持つ子供たちを支援するNPOとの協力事例

連携: NPO法人多文化共生センター東京

会場:東京都美術館「BENTO おべんとう展

一食べる・集う・つながるデザイン」

参加者:海外にルーツのある子供14名(9歳

~17歳)、保護者3名

ファシリテータ:鈴木智香子

期日:平成30年8月25日

導入:アートスタディルーム (ASR) にて 導入。グループごとにテーブルに着席し、自 己紹介。続いてアイスブレイクは、小倉ヒ ラクのアニメーション作品《おべんとう DAYS》を見て体を動かす。次に鑑賞する 「BENTO おべんとう展」について、展覧会 の趣旨や、展示されている作品を紹介。その 際作品画像を印刷したアートカードを使うこ とで鑑賞への期待を膨らませる。

午前 | 展示室にて鑑賞:子供たちととび ラーはグループになり、展示室へ移動。世 界各地から集められた様々な形のお弁当箱 や、マライエ・フォーゲルサングの体験型の 作品《intangible bento》では、お弁当の精霊からお弁当の目には見えない側面にまつ わる10種類のストーリーを聞くことができる。また北澤潤による誰かと一緒にお弁当を食べる時の「おすそわけ」に着目し、美術館の中でその気持ちや文化を考える《FRAGMENTS PASSAGE―おすそわけ横丁》などを鑑賞。

お昼 | お弁当をみんなで食べる: 昼食は、 出品作家の料理家大塩あゆみがつくったお弁 当が用意された。お弁当に使用された野菜が 子供たちの目の前に展示され、コンセプトや 素材の魅力が作家から紹介されたのち、子供 たちは作家と共にお弁当を味わった。

午後 | お弁当をテーマに造形活動:鑑賞を深めることを目的とした造形活動を行う。テーマは、「だれかのために作るお弁当」。出品作家の一人である小山田徹の《お父ちゃん弁当》に倣うワーク。手順はワークシートを使って「だれかのために作りたい」お弁当の設計図を考える。次に、そのスケッチを元に様々な素材を使い、立体的な「お弁当アート」に仕上げる。全員で巡回しながら作品を

鑑賞。1日の流れを振り返り、終了。

子どもたちとの関わり方について

子供たちととびラーらがグループになり、 対話を通して作品を鑑賞する。その際、子供 たちから発話された気付きや発見は全て肯定 する姿勢を持って受け止める。

気付きや発見は、子供たちの心の中で生まれたばかりの価値であり、それは共有され肯定されるプロセスの中で育まれると考えているからだ。特にダイバーシティプログラムにおいては、多様な文化的背景や宗教観を持つ子供たちが多く参加する。そのような多様な価値観の中にあって、それぞれの子供が自分の価値観を言葉にすること自体、非常に勇気を伴うことである。よって、とびラーの最も重要な役割とは、どの意見も否定されることなく、誰もが安心して発話できる安全な場を鑑賞活動の中で作ることにある。こうした場の持つ意味を共有することは、鑑賞活動にとどまらず、多様な価値観が尊重される社会的基盤の醸成へと繋がる。



「BNTO おべんとう展 一食べる・集う・つながるデザイン」東京都美術館



キラキラっとアートプロジェクト





プロジェクトの概要

『キラキラっとアートプロジェクト』は、 「キラキラっとアートコンクール」と東京藝 術大学による「美術と教育 全国リサーチプ ロジェクト2019 との連携企画です。昨年 に続き継続2年目となります。

「キラキラっとアートコンクール」は、障がい のある子どもたちの可能性を応援することを 目的に2002年にスタートし、優れた才能を評 価・発掘・展示する機会となり、子どもたちが 絵を描く楽しみや喜びを増し、芸術活動の裾野 が広がることを願い開催しています。今年第 18回(後援:文部科学省、全国特別支援学校長会 /beyond2020プログラム認証事業)を迎えます。 一助になればと思っています。

開始当初より、国内初の障がい者アートラ イブラリー アートビリティ※1を運営する社 会福祉法人東京コロニーの協力を得ており、 アートビリティの登録作家として現在25名※2 が活躍するなど、子どもたちの才能を支援し てまいりました。

応募対象は、なんらかの障がいのある18 歳までの子どもたちで、自由なテーマでサイ ズのみ規定した平面表現の作品を募集。審査 (1次審査、三菱地所グループ社員審査、本審査) を経て、優秀賞50作品を選出し、その作品 展を全国9か所の三菱地所グループが運営管 理する商業施設等で開催します。翌年2月に は、丸ビルホール (東京) で表彰式を開催し、 審査員※3より賞状等を贈呈します。

第1回からの第17回(2018年度)までの全 応募作品20.175点は、コンクールWEBサイ

トで公開しています。

また、本コンクールの応募作品はこれまで、 様々な企業の冊子の表紙やカレンダーなどに 使用されています。子どもたちの感性に溢れ た絵を通じて表現した世界や想いは、様々な 場面で多くの方にご覧いただいております。

『キラキラっとアートプロジェクト』では、 「キラキラっとアートコンクール」に継続し てご応募いただいている学校の中から、昨年 に引き続き今年も2校にご協力を得て、具体 的な授業や制作風景を通して作品のうまれる リアリティをリサーチしました。この成果が 特別支援学校等における美術教育、障がいの ある子どもたちの芸術支援活動の基盤形成の

今回の成果を通じて、学校、アートスクー ル等の教員、指導者等の方々が気づきや共感 を得て、繋がりがうまれ、ひいては、子ども たちが、絵を描くことを通じて、笑顔や自信 を育み、才能や可能性が広がっていくことを 願っています。

三菱地所株式会社

- ※1 アートビリティ:1986年に社会福祉法人東京コロニー が設立した障がい者アートライブラリー。
- ※2 2019年10月時点
- ※3 審査員:

O JUN (画家・東京藝術大学教授)

青柳 路子(東京藝術大学准教授、教育学研究者)

西田 克也 (西田克也デザインオフィス グラフィックデザイナー)

髙橋 宏和(社会福祉法人東京コロニー アートビリティ代表)

吉田 淳一 (三菱地所株式会社 執行役社長)

高橋 明也(三菱一号館美術館 館長)

* 肩書きは2019年6月時点





広島県立三原特別支援学校「広島県 | 公立]

絵画制作(アクリルと油絵具を併用して)

授業を行う教員|部家光成 対象学年 | 高校2年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年7月 単位数(単位時間) | --場所 | 屋内(美術・図工室)

授業概要

1学期初めから長期に取り組んだ絵画制作 の終盤です。テーマ選びからエスキースづく り、キャンバスの地塗りと本格的な制作を通 して絵画を1枚、完成させます。

ねらい・目標

絵を描くモチベーションをコンクールに出 品すること、多くの人に観てもらうこと、受 賞をめざすこと等、生徒たちにわかりやすい 所から始め、半年間かけて制作に挑みます。 いかに一人ひとりのニーズに応え、完成まで 到達できるのか、その達成感が、どう制作意 欲につながるのか、そこが大きな狙いです。

活動

この日の活動は、4月から取り組んできた 制作が、いよいよ仕上げに向けて取り組み、 完成が見えてきます。生徒にも完成に向けて の緊張感や焦りなどに交じって、今までの努 力をたくさんの人に観てもらいたいという充 実感がみなぎっています。一人ひとり、アド バイスする内容が大きく違うのでアドバイス

メモを準備し、自分で読んでできる生徒には、 準備から制作まで一人で制作してもらいます。 支援が必要な生徒には、制作を実感できるよ うに支援を行っています。

作品の評価・フィードバックの仕方

最も大きなフィードバックは、コンクール 等にどんどん出品し、そこでの評価を受けて 入選したり受賞したりすることが、わかりや



すい評価の形だと思います。外部評価は、自 信につながり制作意欲につながっています。 たとえその時に良い評価が得られなかったと しても、友人の喜ぶ姿を見て、より身近に感 じ、奮起して次へ制作意欲を高める生徒も多 く出てきます。

成果と課題

ひとりひとりの制作にアドバイスを送りた いという試みは、メモを活用することによっ てわかりやすく見通しをもてて効果があった ように思えます。子どもたちは、制作の進め

方や道具の使い方、色の混ぜ方や下地の作り 方、どこで迷ったり困ったりなど、一人ひと り違っています。生徒の絵画と対話をするこ とは、生徒自身と対話することと変わらない と思います。限られた時間で、何ができるの か、考えていく必要があります。そして「お せっかいな支援」ともいえるアドバイスメモ による教え方は、支援である以上、それができ るようになってくれば、どこかで支援を外し ていく必要があります。だんだんと生徒が自 分でやり切れるように、そのプロセスについ てももっと考えていく必要があると思ってい ます。



横浜市立二つ橋高等特別支援学校[神奈川県 | 公立] いろいろアート - 色を楽しむ|| チョークでイメージを描く

授業を行う教員 | 三田政明 対象学年 | 高校1年

教育領域 | 教科教育 実施時期 | 2019年9月 単位数(単位時間) | --

場所 | 屋内(美術·図工室)、屋外

授業概要

る生徒をおいて、絵を描くことは「楽しい」 横にねかせて描く。②ティッシュペーパーは 「おもしろい」と身体でまず感じて欲しいと の思いから、身近で誰もが簡単に描ける素材 であるチョークを教材として用いた。(難し い技法を必要としないので、手や体に障害があっ ても、工夫すると自分で素敵な絵が描ける。)

ねらい・目標

生徒一人ひとりが、色の三原色を基本に色 が醸し出す美しさや不思議さに触れることを 通じて、絵を描く楽しさを感じることに重き をおいた。また、生徒の心の中から湧き出て くる描きたい気持ちを高め、自分の中の感情 やイメージを素直に色と形で表現することを 目指した。

活動

授業の導入部分で、教師がチョークを使っ 意識のハードルを下げる工夫をした。また、

ないことも伝えた。

技術的な点では、チョークで描く時の注意 絵を描くことが難しい、苦手だと思ってい 点を3点に絞って指導した。チョークは、① 丁寧に折って、角を筆代わりに使う。③ティ ッシュペーパーで少しずつ小さな円をくるく る描きながらチョークをやさしい力でのばし ていく。

> 色の変化やグラデーションを感じるために、 色と色の境目をやさしく、ふんわりとのばして いくことで、色が混ざり合い新しい色が現れ てくる瞬間を楽しみながら描くことを促した。

作品の評価・フィードバックの仕方

生徒は、身近なチョークという素材でこん なに簡単に絵が描けることにとても興味を示 した。チョークの使い方を理解すると、堰を 切ったかのように夢中になって1時間に1人 で3~6枚程描き、用意していた紙が足りな くなってしまうほどだった。

鑑賞会では「美術をやっていて初めて楽し いと思った|「こんなきれいな作品ができて た絵の作成をユーモアを交えて実演し、苦手 よかった | 「絵の具は水を使うからなかなか うまくいかないけど、チョークだと思い通り 描き始める前に、「上手い絵」を描く必要は に描けた」「もう1回やりたい」等の声が聞 けた。また、自分の心の奥底にある思いなどとは楽しい!|そのわくわく感が体からしみ を表すような作品も生み出された。

成果と課題

基本的な色の混色やグラデーションが、水 の加減など難しいことをせずに誰でも簡単に できることがチョークの特長であり、それを 生かすことができた。混色して新しい色が作 り出されることで、さらに生徒は色の世界に どんどん引き込まれていくようだった。いつ もは集中力が途切れてしまう生徒も2時間の 活動に取り組むことができた。

コミュニケーションが苦手な子供達にとっ ても、アートは言葉以外で自分を表現する一 つの大切な表現方法になると信じ、アートを 通じて自分を表現する力と生きていく喜びと 自信を生み出していきたい。「アートするこ 出してくる、そんな授業をさらに目指してい きたいと思う。











キラキラっとアートプロジェクト 交流会

特別支援教育等の現場で美術教育に携わる方のための交流会。 キラキラっとアートプロジェクトの展示校による話題提供と、 参加者同士の意見交換を行いました。

日程 | 10月26日(土) 13:00-15:00

会場 | 東京藝術大学上野校地美術学部 中央棟第1会議室

登壇者

206



部家 光成 広島県立三原特別支援学校教諭



湯浅 義明

宮崎県立都城さくら聴覚支援学校



三田 政明

横浜私立二つ橋高等特別支援学校

コメンテーター



伊藤 達矢 東京藝術大学美術学部 特任准教授



部家 光成 先生 (広島県立三原特別支援学校教諭) の実践

こんにちは。広島三原特別支援学校から来ました。知的障害の子どもたちが集まる高等支援学校の高等部で教員をしています。本校では、三菱地所さん主催のキラキラっとアートコンクールに毎年チャレンジしています。1年間のうちの半年ほどかけて作品を作っています。「みんなで東京に行こう!」と、生徒たちのモチベーションになっています。広島からみたら東京というだけで目がキラキラ。(笑)コンクールがあるおかげで、生徒たちに一つの大きな目標ができます。目標に向かって粘り強くやりきる機会というのは、あるのとないのでは大きな違いがあると思うのです。

私が常日頃から美術の制作現場で考え ていることをお伝えします。ひとつは、生 徒ひとりひとりがすでに完成されたアーティストであるということです。すごく個性 的で、意欲的。周囲の意見など気にするこ となく我が道を進める表現力を持っていま す。 初めて支援学校に赴任したとき、生徒たちの創作する姿をみて大きな驚きがありました。その意欲を十分に発揮できるよう、環境や素材を揃えることが、私の役割だと思っています。生徒の力強いエスキースを見れば、それに匹敵する色を出せるものが必要だと感じます。アクリル、油絵の具、その時その時の表現したい内容を確かめながらいろんな種類を用意します。

もうひとつは、生徒たちのチーム力です。 お互いに自分の表現で制作を進めると、不 思議な連帯感が生まれます。1人で制作を しているのではないと感じられる工夫も必 要です。授業の終わりに、生徒の作品を紹 介し、みんなで称え合う時間があります。 また、甲子園に負けないくらいのドラマも あります。コンクールで賞を取れたら喜び 合い、取れなかった生徒は悔しくて泣いた りもします。その姿からお互いに学ぶこと も多いのです。

広島県でも地域の障害者アートコンクールがありまして、事業所、小中学校、特別支援学校、個人、と多方面から参加することができます。このコンクールは、入賞すると商品化されることもあります。自分の作品が本の表紙になったりポスターやノート、タオルなどになったり、これは生徒たちにとって、とても刺激的です。クラスメイトが入賞すると「今度は自分が!」と張り合いも出てきます。

最後に、生徒たちが楽しく、一生懸命 作品をつくる姿をこれからも応援し、社会 と障害者アートを繋ぐ美術教師として頑張 っていきたいと思います。

208



湯浅 義明 先生 (宮崎県立都城さくら聴覚支援学校) の実践

宮崎県都城さくら聴覚支援学校の湯浅で す。いわゆる聾学校になります。ここに勤 めて4年目になります。高等部の授業の実 践をご紹介します。この授業は全部で4時 間で、テーマは「夏の名残」。「名残」を 手話でニュアンスを伝えるのが難しいので、 授業のキーワードは、五感を総動員させる こと、そして「思い出す」などに分解して います。食べ物の味など、自分の体験を思 い出し、誰かとコミュニケーションしなが ら、五感と色彩や造形との関係を意図的に 作り出そうとしました。

最初は「墨で文字を書きましょう」とい うもの。漢字・ひらがな・英語の単語を用 意しておき、生徒がそれを選び、大きな紙 にみんなで書いていきます。夏に関連する

単語で、甲子園・紫陽花などが出ました。 普通なら綺麗に書けと言われるところです が「絵のように、読めないように書け」と 伝えます。

その後色をつけますが、ここで手回し式 のかき氷を使います。ガリガリと振動が身 体に入ってくるので、聴覚障害のある生徒 たちには有効です。ガリガリとかゴリゴリ とか擬音の質感を掴むのは難しいので。絵 の具でシロップを模して氷にかけ、混ぜて いきます。そのプロセスで「かき氷の味」 や「食べた時のエピソード」を思い出す。 それが夏の思い出として、次に着色する時 のインスピレーションになるよう工夫して います。

最後は、自分が描いた部分から2作品を トリミングしてもらいます。まっすぐ切る 子と雑にきる子がいますが、それが生徒の 分身として、とてもいい「らしさ」だなと 感じます。そこに、絵の具やポスカで「夏 ってどんな色だろうねしなど思い出しなが ら、さらに着色を進めます。このコミュニ ケーションが大事で、自分がいいと思うも のが正解だよと伝えながら、仕上げていき ます。そうして仕上がったら、みんなで作 品を繋げるのですが、配置も全員で話し合 います。

この授業では、全員でのワークから個人 制作、そしてまた全員で一つの大きな作品 にする共同制作への流れを大事にしました。 最終的には板パネルをつかい、彼らの決め たレイアウトの通りに立体にして壁にかけ

て、ライトもつけています。すると「自 分たち結構やるやん | と思うわけですよね。 アートはバリアフリーの象徴だと思ってい るので、ひとりひとりの記憶や才能や希望 を引き出せるんじゃないかなと。つくる力 は生きる力の根幹になると感じています。



三田 政明 先生 (横浜私立二つ橋高等特別支援学校) の実践

横浜市立二つ橋高等特別支援学校の三田 と申します。本校は軽度の知的障害のある 生徒が通う高等部単独の学校です。

授業を考える際に気になっていたこと は、一つは美術に対して苦手意識を持つ生 徒が多いこと。もう一つは失敗を怖がり他 者の眼を気にしていることでした。私は職 業や数学の授業も教えており、そこではい つも「失敗から学ぼう」と言いますが、美 術の授業では「アートには正解も失敗もな いんだよ」と伝えています。

それは学問領域の違い(「科学する力」と

「心や感性・創造力」を育てる違い) だと考え ています。例えば、クロッキーで線を一本 描く。その線を基に、もう一本、さらにも う一本、と自分が気に入る線を模索してい く。それは決して失敗じゃない、と。

この二つの問題にアプローチするために も、まずは子どもたちに「アートするこ とは楽しい | 「アートにわくわくしてほし い」と思い、色と遊ぶ、色と友達になるこ とを目的とした「いろいろアート」の授業 を考えました。

まず、色(絵の具)の感触を手や肌で感 じてもらいたい、自分の生きているエネル ギーを紙にぶつけさせたいと思い、「大き い絵|をみんなで思いきりアートしました。 「大きい絵」をみんなで描くことは、言葉 以外にもコミュニケーション方法があるこ とを仲間と一緒に感じて欲しい、との思い がありました。本校の生徒のようにコミュ ニケーションが苦手な子どもたちにとって、 アートは言葉以外で自分を表現する一つの 大切な表現方法になると思うからです。そ してまた、楽しい、面白いと感じることが、 自己の内に達成感や充実感へと繋がってい くのだと思うのです。

次に行った「いろいろアートⅡ」がチ ョークアートです。素材としてチョークを 選んだのは、水の加減を考えずに誰でも描 ける画材だからです。難しい技法が不要な ので、身体に障害があっても工夫次第で素 敵な表現ができます。この時、子どもたち に教えることは三つのことだけです。①チ 210

ョークを横向きに持つこと。②ティッシュ ペーパーは小さく折り先端を絵筆の代わり にする。③くるくる円を描きながらやさし くチョークをのばしていく。これだけです。

言葉と同じように、この生きている世界 に色彩があることの素晴らしさや自分の中 にその色彩も根付いていることに気づいて もらえたらと思い、チョークの描き方を学 びながら、色が生まれる瞬間や、その変化 を自由にのびやかに楽しんで(遊んで)ほ しいと思っています。

「美術楽しいよ」という子どもたちの声 に背中を押され感じることは、やはりアー トに障害はないということです。障害があ ろうとなかろうと、人は創造性を持ってい る。自分の命を何らかの形で自己の外に発 現し、発信することは、その子=個の表現 であり、美術はその子の「生きる力」へと 結びついていくもの、と私は思います。そ の子らしくより善く生きるために、美術を 通じて自分を表現する力と生きていく喜び と自信を生み出していって欲しいと願って います。

司会: ありがとうございました。先生方 の実践に何かご質問があれば、お伺いした いと思います。

参加者: 二つあります。部家先生の実践 を聞きながら、コンクールはモチベーショ ンになるとのことですが、全員がそれに乗

っかれるのでしょうか。そして、鮮やかな 作品ばかりだったのですが、先生自身の介入 はどれくらい工夫されているのでしょうか。 部家先生 : モチベーションについてです が…表現したがっているというか、自分を 理解してもらえなかった経験が強いのでし ょうか。共通して言えるのは、作品を描い てもいい思いをしたことがない様子で、素 直に表現をみてもらえる機会を彼らも楽し んでいるようです。普通級で指導してたと きは「どうしたら人目を気にせず自由に作 ってもらえるんだろう」と悩んだ時期もあ りましたが、支援学校にきて「ちょっと待 ってやりすぎ! | と思うくらい、表現にま っすぐな子が多いです。

もう一つ、指導時のアプローチですが、 エスキースはちゃんと自分で描いてねと。 それは譲らないです。設計図なので。そ こから着色の順番を一緒に考えたりはしま す、時間配分が苦手な子には、どこまでを 目標にしよう、など視覚的な補助を入れた り、サポートはします。でも作品の始まり は絶対に生徒本人のものですね。

司会: ありがとうございました。それで は各テーブルで日々の実践について意見交 換をする時間に入りたいと思います。



グループワーク 日々の実践で感じる 美術教育環境の課題について

- 図工室や美術室ではなく、生徒が制作を 続けられるアトリエがないので継続した 制作が難しい
- 生徒たちの自信のなさや自己肯定感の低 さを痛感するも、そのケアを美術教育で 担えるのだろうか
- 身体の障害などで、自ら何かを選ぶこと が少ない生徒に対する働きかけ。素材や テーマなどの選択をどうするべきか
- 親御さんから将来を見据えた訓練的な側 面を期待されるとき、美術の役割をどう 伝えていけるか

- 普通級と同じ教科書を使いながらも、障 害によって必要なアプローチを教師個人 が工夫し、且つ評価もしなくてはいけな い困難さについて
- 美術教師が減ってきているので、教師同 士の連携やコミュニケーションも減って いる
- 「先生とつくった作品」になってしまう のではないか。介入の具合や、共同制作 として捉えることについて

グループワーク2 ワークので挙がった課題について 実践していることの共有

- 障害の程度によって子どもそれぞれの目

標が違うので、複数の先生たちで共有するのが大事。パニック対応についても同様。

- 学校全体で年に1回ケース会議を行なっている。専科だけでなく全職員での情報 共有の時間をつくる。
- 同じクラスでも、個別対応の必要がある子と、全体進行についていける子がいる。 最初から最後までバラバラでは勿体無いので、最後は鑑賞などで足並みを揃える工夫をしている。
- 生徒の評価といっても、それぞれの目標 も異なる上に、1クラス4、5人しかい ないため相対評価は難しい。課題とアプ ローチをみて、絶対評価をしていく方が 良いのでは。
- 制作課題があっても、そのプロセスが楽しくて没頭してしまう子もいる。そのとき、教師としてはその一生懸命さをどこまで認めるか。「いろんな子がいるね」だけで終わらせずなにかできることはないかと考える。
- 教材開発はだんだん工夫のアイデアがなくなってくるので、展覧会などでアイデアをもらう機会は重要。





司会: 現場のリアリティ溢れる様々なご 意見が出ました。ありがとうございました。 また今日は、教員を目指している学生さん が参加してくださいました。美術の時間の 可能性を感じ、今日ここに足を運んでくれ たそうなので、一言コメントをもらいたい と思います。

参加者: 教職大学院の1年で、美術教育について研究しています。僕は美術がすごく好きなので、表現は大事なことだと思っているのですが…。自分が中高と美術を続けてきて何か印象に残っていることといえば、実はあまりないんですよね。それでも好きだなという気持ちがある。ということは、そこに意味があったのだと感じています。それが今後の美術教育でも残しています。それが今後の美術教育でも残していまれば、美術に失敗はないという話が印象深かったです。今日は特別支援の先生の話を聴きながら「自分が今通っている小学校ではどう活かしていこうか」などと考えていました。ありがとうございました。

司会: ありがとうございました。

三菱地所(株) サステナビリティ推進部 大山京子氏: 2002年からキラキラっとアートコンクールを主催しておりまして、今年で18回目になります。昨年より、キラキラっとアートプロジェクトとして東京藝大のみなさんと企画を考えております。広島の部家先生と、横浜の三田先生の授業に私もお邪魔して、いろんなことを学びました。今日は現場で横のつながりを作る難しさを伺いまして、生徒さんの将来を見据えながら、美術という枠組みをどう活かすの

か、私たちもその力になれたらと考えています。

伊藤達矢先生: 今日は短い時間でしたが、密度のあるお話を聞かせていただきました。全ての課題に今すぐ結論が出るわけではないかと思います。東京藝大が美術と教育をテーマにしたプロジェクトをはじめて今年で3年目ですが、今後も継続して話をする場を設けていけたらなと考えています。本日はありがとうございました。





「ラウンドテーブル1]

こんな授業をしたい! 美術の先生に必要な、アイディア/知識/実現力

美術の授業は評価が難しい。でも、だからこそ、楽しい! 現場の先生方が持っているたくさんのアイディアと、 それを実現するための創意工夫を持ち寄り、 いま、美術教育の現場は何をすべきかをポジティブに議論しました。

日程 | 11月2日(土)14:00 - 16:00

会場 | 東京藝術大学大学美術館 本館地下2階 展示室1

登壇者



浅羽 聡美

アトリエ ル・マタン主宰



百瀬岡

宝仙学園小学校 教諭



松井 麻佐江

弘前大学教育学部附属特別支援学校 教諭



小松 俊介

筑波大学附属高等学校 教諭



藤崎 圭一郎

東京藝術大学美術学部 デザイン科教授

司会



中村 政人

東京藝術大学美術学部 絵画科教授



中村先生: 今日は幼児期から大学まで現場で実際に美術教育をされている先生方にお越しいただきました。ぜひ現場ならではのご意見を伺えればと思います。まずは自己紹介と普段の実践を教えてください。

浅羽先生: アトリエル・マタンを主宰しています。浅羽聡美と申します。今日は幼児パートの現場ということでお呼びいただいたのですが、実際の活動対象は幼児に限っていません。乳児から高齢者まで、病気や障がい、様々な問題を抱えた人たちも含めて多くの方たちと、かれこれ30年近く造形表現を通して関わっています。

そんな実践の中で芽生えた問題意識があります。それは「教育によって、その後の人生において美術と無縁になる人たちがいる」ということです。小中学校での図工や美術の評価、コンクール入賞や落選、自分の表現を否定された経験などきっかけは

様々だと思いますが、少なくとも教育的な 営みを通じてであるにも関わらず、自分は 下手、センスがない、才能がないと思って しまう方が少なくない現実があります。

私は7年ほど前から幼児に関わり始めたのですが、3才ですでに上手い下手を意識している子がいます。すぐに先生に描いてもらいたがったり、真っ白な紙を前にして泣いている子がいたり。塗り絵の方が好きという子も少なくないんですね。この感覚は一体いつ身についたものなのか、考えさせられました。

4年ほど前から乳児にも関わるようになって、教育を受ける前のある種根源的な表現のあり方に接することになりました。そこでは無理に誘わず、煽らず、教え込まず、危険でない限り止めず、過剰にほめないようにしているのですが、極力そうした環境をつくったときの1~2歳児の姿から見え



てきたことは「既成の価値観が持ち込まれなければ誰もが創造的に表現できる」ということなんです。

赤ちゃんであっても、モノを探求し、その特性を掴み、自ら表現方法を発想できる。 大人の提案も参考にして、他の表現も真似 て学ぶし、多様な表現の味わいを柔軟に感 じ取ることができる。ゴールがなく、評価 されなければ、否定も生まれない。誰もが 描き、つくることができるということを、 彼らから教わりました。

こうした経験を踏まえて、幼児期の子どもたちには、表現の振れ幅を意識して提案するようにしています。彼らがどこかでインプットしてきてしまった既成概念から出来るだけ遠いところにある「こんなもんでいいんだ」という表現を置く。そこから始めるようにしています。

中村先生: ありがとうございます。3歳で既に苦手意識のようなものがあるというお話に、かなり驚きました。その後の年齢となる、小学校ではどうでしょうか。百瀬先生お願いします。

百瀬先生: 宝仙学園小学校の百瀬です。 今回、私の学校からは二つの授業を展示し ています。一つ目はいわゆるSTEAM教育の実践として「光のパレード」(P50)という取り組みを展示させていただきました。グループで協働しながらプログラミングし、ロボットを動かして光のパレードを行う。それをさらに映像作品にするというものです。

そしてもう一つの授業は、「触れて伝わる形〜眼が見えない人のために〜」(P52)というものです。これは「ユニバーサル・ミュージアム」を国語で学んだ子ども達が、体験として「触って気持ちのいい形」「目が見えない人にも伝わる形」を作り、それを実際に視覚障害者の方に触っていただき、交流を行った他教科との連携授業です。このように、美術の授業と他教科そして実社会が結びついたリアルな学びへのアプローチを試みています。

中村先生: 素晴らしいですね。そういった教科間の連携は、百瀬先生の方から働きかけるのですか?

百瀬先生: そういうこともありますし、 案外、理科や国語の先生から「こういうこ



とやろうよ」という表現が出てくる 場合があります。そうしたアイディ アに対して、出来るだけオープンな 姿勢でいることが大事かなと。

松井先生: 弘前大学教育学部附属 特別支援学校は、小学部から高等部 まであります。今回展示した授業 (P82)の目的は、作品作りではなく 徹底的に遊ぶこと。遊びと造形の間

に線引きはできませんが、そこに表現の出発点がかくれているように思います。小学部の頃に徹底的に遊び、作り、認められることで、美術大好きな生徒に育ちます。中学受験で入学した生徒は、これまでの経験から「描けない」と戸惑うこともありますが。

工夫していることと言えば、他の単元も 同じですけど、素材をたくさん用意するように心がけています。それから体育館やピロティなどを使って、広いところでのびのびと。広い場所だとテンションが上がって走ってしまう子もいますが、まあ、そのうち帰ってくるのでいいかな。(笑)

卒業生は、一般企業や地域の事業所に通う場合が多いのですが、表現活動に力を入れている事業所もありまして、県内の支援学校の作品と合わせてアウトプット展という展覧会が開催されました。卒業後に職業作家になれなくても、また美術館に行けなくても、一人ひとりの暮らしのなかで、美術の授業で培った想像力、感受性を発揮し、表現をして豊かな人生を歩んでほしいなと思っています。



中村先生: 松井先生は本当に、エネルギッシュですよね…!

松井先生: 子どもたちがエネルギッシュなので。実際は何もしないことの方が多いんです。やっぱり浅羽先生が言ってたように、子どもたちの動きを止めちゃいけないんですよね。

浅羽先生: 何もしていない、という姿勢が素敵です。素材をたくさん用意するって、 実はそれだけで大変だと思うんです。松井 先生は驚きをもって子どもの表現を楽しん でらっしゃる、それがいいですよね。

中村先生: 次に高校生の授業。小松先生 お願いします。

小松先生: 私自身は彫刻が専門で、石を彫っています。筑波大学の附属高校で美術と工芸を担当していて、展示したのはジュゼッペ・ペノーネの作品から着想を得て、鑑賞するだけではなく自分たちも作ってみようという授業 (P98) です。事前に、私の方でいろんな石を拾っておいて、生徒に選んでもらう。紙粘土と3原色カラーと白を使い、模刻を作ります。高校1年生の授

ですね。

業ですね、写真に撮るとまた違って見えたりするんですよね。実際に作って目の前にすると、それを飛び越える面白さがあって。中村先生 : ジュゼッペ・ペノーネって、アルテ・ポーヴェラ(貧しい芸術)と訳されるような領域を代表する作家じゃないですか。ちょっと難易度高いんじゃないかと思いましたけど、達成感がありそうですね。藤崎先生 : アルテ・ポーヴェラがなんぞや、もの派が何ぞやというとこまで…。小松先生 : いえ、そこまでは広げてない



藤崎先生:「作って鑑賞する」はすごく面白い。鑑賞単体の授業もあるんでしょうけど、自分が作っていくことによってペノーネが何を考えてたのか対話できる。美術は今やインターネットの存在もあって、作品だけを切り取れるんですよね。コンテクストが切り取られちゃうと鑑賞としては勿体無い。つくることで、作家がどう考えてきたのかを想像することができる授業は素晴らしいなと思いました。

松井先生: 子どもたちがこんなに石を見

ることってないと思うのですが、どんな反応だったんですか?

小松先生: 昔は「手」を題材にしたこともあって、手は自分と切り離せないし、子どもたちの苦手意識を加速させてしまったなと。そこで始めたのが石なんです。全然似なくても、作って石の中におくと、溶け込むんです。別にそっくりに作らなくてもいいという安心感や発見もありました。

浅羽先生: ご自身の作家活動と授業がリンクしてるのがいいなと思いました。「子ども用に」と薄めない。結局題材に何を持ち込むかというのは、教師の主観でもあるので。

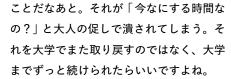
中村先生: 確かに作家としてのプロ意識 の部分を子ども向けに薄めてしまうのはありますよね。でもその「何を考えているのかを薄めずに伝えていく」という姿勢は大事です。

最後に大学の授業。藤崎先生お願いします。

藤崎先生: これは関東の川を調べるリサーチの課題です(P140)。作品形式は自由、何を作ってもいいがフィールドノートを提出しなさいというものです。藝大は「手で考えろ」という教育をしますが、この時は「足で考えろ」、とにかく現場を歩けと伝えています。歩くと自分が世界に働きかけることになります。デッサンは座るので。目の前にあるものを書くよりも何を題材にするのか探しに行き、面白がる。そして面白がった自分自身をみつめることを重要視

しています。モチーフを観察するじゃなくて、モチーフをみ ている自分を観察する、ですね。

浅羽先生: 自分で 働きかけて面白がる というのは、原点だ なと思いました。ま さに幼児の頃に子ど もたちがやっている



藤崎先生: デザイン科なので、なんかね、役に立つものを作っちゃうんですよ。本当に自分が見つけた、面白いと思うものをやってくれたらいいのになと思うんです。

百瀬先生: 作る前に、世の中を感じることですよね。小さい子だと絵の具を手で触ったり、大人になるとフィールドワークなんだろうなと思います。

個々の生徒の個性に対して、 どんな工夫をしていますか?

藤崎先生: 今の子たちは、個性じゃなくて「キャラクター」を作るんですよね。クラスの中での自分の立ち位置から答えを出してしまう。キャラクターのまま個性が伸



びていく子もいますが、一度作られたキャラクターを外してあげるのも必要だなと感じます。

中村先生: キャラクターの自意識…もっと小さい時からありますか?

松井先生: 中学でもあると思います。だ からクラス替えを早くしてほしいって声が あるんでしょうね。

浅羽先生: 私は「やらないというのも表現だな」と認めることが大事だと思います。素材への好き嫌いもあるでしょうけど、どこか「やらされている自分」を感じ取って、そこに対して「ノーと言う」またはノーと言える自分を大事にしている瞬間。そこを認めることは、個性の尊重においてすごく大事。

藤崎先生: 松井さん、浅羽さんのお話では「遊ぶことを大事にしている」とありましたよね。「遊ぶ」はキャラクターと違うところにあると思うんです。 授業はその先に評価があるので、周りにどう受け入れら

れていくかの視点が入ります。でも、遊び に夢中になる時は、そこから外れることが できるわけですね。

デザイン、 絵画、 彫刻など、 専門分野の教育と選択について どう考えるか?

小松先生: 今年は藝大に2人進学していますが、受験の先に何をしたいか、そんな会話をしましたね…。また、美大にいくのだけが芸術家になる道ではないし、どこかで表現の道に進む人もいますから、美大を目指さない子たちにもカリキュラム以上の専門領域に何かしら触れてほしいとは思います。

中村先生: 幼児教育では、表現の方向を 定めずにやると話がありましたが、最終的 に表現のカテゴリーが気になることはない ですか?

浅羽先生: 何年か前に、4歳児と「デザイン」について語り合ったのを思い出しました。その子はずっと服の絵を書いてるんです。「面白いデザインだね」と言ったら「うん、これはデザインなんだ!」と腑に落ちていた様子でした。言葉があることで、幼児は幼児なりに、自分の表現をより追求できるようになることはあると思います。

小松先生: カテゴリの話でいくと、最近はデザインの領域でもある「UI(ユーザーインターフェイス)」あたりで授業の構想を練っています。身近なところから問題を発



見できるかどうか、というアプローチを授業でやれないかと思って。

藤崎先生: いいですね。百瀬先生がやっていた、目の見えない状況での取り組みも。あれはデザインの根本だと思いますよ。デザインの創造性の根幹は共感力、相手がどう感じているのかを捉えていくことなんですよね。ちなみに、他者の目線を考えることについては、どう扱っていますか。

小松先生: 自分なりに評価基準を設け、 ほかの人の作品を見てみるということをやっています。すると評価項目に「欲しいかどうか」を基準にする子がいたり。「え、 そんなの評価に入れてるの?」と生徒同士で話していて、面白いです。

芸術はあらゆる学問に繋がっていく、 という点についてどう思うか

中村先生 : 芸術の可能性について一言ずついただけますか。

浅羽先生: ひとと違う自分や、自分と違う相手を「うん、そうなんだ」と単純に頷けること。そのやりとりを可視化できるの

が、造形の役割なのかなと思っています。 **百瀬先生**: 同じようにやることが公平で はなく、それぞれにあったやり方があると気 づける。その点で、美術や芸術の世界が社 会から期待されるようになるといいですね。 松井先生: 人生は、学校にいる時間の方 が短く、出てからはすごく長い。芸術と言 ってしまうと考えが堅くなりますが、人は 生きてるとモノを見るし形に触りますから、 そのときに自分なりの目線を大事にすると、 人生は豊かなんじゃないかなと思っています。 小松先生 : 高校は学習指導要領の中でカ リキュラムが策定されており、芸術の立場 を考えて発信していかなきゃいけないんで すけれど…今日はそのヒントになるような 話をたくさん聞けました。

藤崎先生 : 作品を作るのは自分を外在化

させることですから、その先に「みんなで作品をどう語り合うのか」が本当に大事だと思います。1人の発言に左右されるのではなく、多くの人と語り合わなきゃいけない。どうやって批評空間を作るかは難しい課題ですが、建設的にレビューする美術特有の性質は、社会の中でも大切なんじゃないかと考えています。

中村先生: 芸術教科の教養だったり知識だったり、それはアウトサイダー的な位置付けの芸術家だけのものではなく、全ての学問の中に気づきと行動を生み出すエネルギーになるんじゃないかと思っています。みなさんの取り組みがかなり面白くて、勇気をもらいました。本日はありがとうございました。



「ラウンドテーブル2】

いま、 図工・美術でなにが学べるか? ~美術教育への期待~

AIの時代が到来するいま。図工・美術で何を学べるか。 美術教育に関わるアーティスト、教員、研究者が、 次世代の美術教育のあり方について垣根を越えて議論した。

日程 | 11月4日 (月・祝) 13:00 - 15:00

会場 | 東京藝術大学大学美術館 本館地下2階 展示室1

登壇者



東京学芸大学 教授



山成 美穂 鎌倉女子大学短期大学部初等教育学科 准教授



水島 尚喜 聖心女子大学文学部教育学科 教授



神野 真吾 千葉大学教育学部美術科 准教授



木津 文哉 東京藝術大学美術学部 教授



中村 政人

東京藝術大学美術学部 絵画科教授

司会



東京藝術大学美術学部 特任准教授

伊藤: 本日はよろしくお願いいたします。 グローバル化がさらに進み、そしてAIが 飛躍的進化する時代を迎えるに当たって、 美術教育にどんな期待をしていけるかとい うお話ができればと思っております。まず は登壇者の皆様に、普段取り組まれている ことをご紹介いただければと思います。

山成: 鎌倉女子大学短期大学部で幼稚 園教諭・保育士・小学校教諭の養成を行っ ており、保育内容演習表現、図工、図画工 作科教育法などの授業を教えています。そ れと並行して15年ほど前から谷中で「谷 根千こどもアトリエーという造形教室を主 宰し、年中さんから高校生までの子ども達 と関わっています。研究としては、2001 年から日本とドイツを行き来して、ドイツ 各地の学校教育と学校外教育おける青少年 の美術教育の実情についてリサーチしてい ます。

石井: 東京学芸大学の石井です。私も保 育者養成の大学で5年教えた後に、現職で 小中高の先生になる学生の養成に携わって、 かれこれ20年近くになります。また、江 東区の方で子ども向けのワークショップを 1~2ヶ月に1回しています。お子さんと親 御さん共に参加いただけるような、子育て 支援の文脈を踏まえた造形ワークショップ です。

225

水島: 聖心女子大学に勤務しています。 私は東京藝大出身ではなく教育系の大学を 出まして、小学校に6年勤務した後、地方 の国立大学をへて現職に至ります。学習指 導要領については小中、過去3回関わって おりました。最近は海外に行くことが多い です。例えばカンボジアには国家・政治的 にも厳しい過去があり、現在芸術教科があ



りません。そこで芸術科目の学習指導要領、 教科書を作る等の支援をしています。

神野: 千葉大学の神野と申します。東京 藝大の卒業生で、芸術学科で美学の研究を しておりました。卒業後は美術館で11年間ほど現代美術の企画展と教育事業をして きました。また普通教育については千葉大 学で教員養成として関わっており、放送大 学の講義や美術館を通じて社会教育にも関 わっています。時には小学校に行って教え ることもあるので、そういう意味で、7歳 から上は80歳くらいまで、様々な角度で 広義の美術教育に取り組んできているとい えます。



木津: 東京藝大の油画専攻を修了して、ずっと作家志望で絵を描いてきました。 卒業後の進路として当時公募があった兵庫 教育大学に勤めることになりました。そこは初等教員養成の大学で、現場経験のある親ぐらいの年齢の先生に教えるという環境からスタートしたのですが、その後16年間勤めることになります。その後東京藝大に戻り、現在に至ります。

中村: 東京藝大で油画の教員をしております。このリサーチプロジェクトを立ち上げて現在に至りますが、元々「美術と教育」というテーマにはかなり前から作家活動としても取り組んでいます。また、アーツ千代田3331というアートセンターを作り、大学とは違った地域というフィールドで、近隣の子どもたちやお年寄りと関わりながら、芸術と社会の関係性をつなぐ取り組みを続けています。

伊藤: 最後に私も簡単に自己紹介します。私は東京藝大の油画を卒業後、美術教育研究室に進み、木津先生の研究室におりました。今やっていることとしては、東京都美術館と東京藝大の連携事業である「とびらプロジェクト」、それと上野公園に集まっている9つ文化施設をつなぎ子どもから大人までが対等に学びあえる環境をつくる「ミュージアム start あいうえの」というプロジェクトを行なっています。

さて、ここからはディスカッションに入れたらと思いますが、来るべき未来に向けて今、美術教育が抱えている課題とは何かについてお話を進めていければと思います。

美術教員養成の現場から

山成: 日本の教育現場を見ていると、だいたい小学校3年くらいまではみんなものを作ることは好きなのですが、高学年になるにつれだんだん美術から離れていく、苦

手意識を持つ子どもが増えてくる傾向があるように思います。



私が調査で赴いたドイツという国は隣接する国が多く、多文化を前提とした環境の中で特に芸術教育に力を入れている国なんですね。ドイツはPISAショックという学力低下問題があったのですが、それでも芸術教育は削減しなかったんです。小学校高学年以降の美術教育にかなり意識的に取り組んでいます。例えばある人物の肖像を描きたいとき、デッサン力の有無に関わらず、写真やインタビュー、映画、作品分析などそれぞれのアプローチの可能性を支援するような関わりをしています。

伊藤: 日本と対比させた時に、日本の教育現場が抱えている課題はどのあたりにあると思いますか。

山成: 強いていうなら先生の資質かと思います。この展覧会に出展されている図工の先生方の取り組みは本当に素晴らしいものばかりですが、日本全体を見ると、まだまだ改善の余地が大いにあると思います。 教員養成に自分が取り組んでいるからこそ の問題意識でもあるのですが、図画工作の 先生は専科の先生ばかりではありません。

養成対象となる学生には、そもそも図工に対する苦手意識が強い方も多いんですね。一方で専科の先生であれば何も問題ないかというと、そういうことではなくて、例えば教育的な関わりやコミュニケーションに課題を持つことが多いように思います。それぞれの課題がある中で、全体として教員の質を上げていくための取り組みが必要だと考えています。

神野: 資質という言葉が今ありました。 そもそも美術教育が何のために存在しているのかということと関わるんだと思いますが、明治期に日本が欧化政策を進めていく際に、西洋の美的価値観も分かるんだということを示す必要があった。西ヨーロッパの美術文化に合わせて日本の美術文化を形成してきた歴史がある。それは西欧中心の単一の価値軸の文化です。しかし今の時代の前提は多文化主義なので、その考え方では立ち行かなくなってきているんだろうと思います。でもいまだに日本はその影響下にいる。



生徒が何をしたいのかを掴んで、色々なアプローチを提示できるような人が教員になってほしい。しかしながらまだまだ社会の共通認識としても、教員養成の現場でも、美術はものづくりや絵を描くのが上手な人が教えるものとされています。このパラダイムを変えていかなければならないと思っています。

石井: 私が勤務している学芸大は全ての科目の教員養成をしているので、例えば数学や理科を専門とする教員志望の学生が、美術の授業も受けにくるんです。最初は想像通り、苦手意識が見て取れるのですが、それが剥がれていった後、彼らは美術教育を専門に学ぶ学生よりも面白いものを作ってしまったりする。これがどうしてなのかに最近は関心があります。おそらくですが、彼らは自分で考える練習ができているのではないかと思うんです。美術科に来る学生は中学校高校で形成された「美術というものはこういうものだ」というイメージを引きずってしまっている。それがかえって足枷になってしまっているように感じます。

私が教育領域に入った時の入り口は保育だったんです。幼児たちは何も言わずとも表現するんですね。なのでそこに寄り添って、彼らを起点にした方法論を考えていかなければならない。そういう分野で耕されたノウハウは非常に専門性が高いのです。しかしそこから小学校に上がるときに学校教育への接続があまりうまくいっていない。子どもにとって段差が大きいんですね。



そういう意味で東京藝大のこのプロジェクトが、幼児から大学までの連続性を踏まえたプロジェクトであるという点が、非常に重要だと思いました。またその連続性を踏まえた議論が、食えるアーティストをいかに作るかとかそういうことではなく、いかに幸せな人生を送るかという点に寄与するものであるべきだと思います。

中村: 先日行ったラウンドテーブル1 (*P216)でも話題になったのですが、幼児期から高校の先生までどの年代にも美術に対する苦手意識があると言うんですね。 3歳の子にもあると言うのです。それを聞いて、どうしたものかなと思いました。その後の教育課程の中で、どのようにそれを克服していけるのだろうと。

その先生がおっしゃっていて大事だなと思ったのは、遊びと造形を区別しないと言う考え方です。子どもが遊びのワクワクの中で表現し始めたときに、教育的な「ちゃんとしなければならない」関わりが生まれてしまうことに課題がある。それぞれの表現をまず認め、誘導しすぎず、子どもが作

ったものへの理解を深める。そういったアプローチが大切だというお話でした。

断片化する美術教育の現在と、 その先へ

中村: また先生の接し方・資質の論点に加えて、毎年このラウンドテーブルをしていると、美術の専門教育を受けた先生とそうではない先生との間にある線引きをどう解消していくかという点にまだまだ課題がある。それから、美術教育が育む創造力という力が、その他の知性・学問とどのように結びついているかについての整理が必要だと感じます。

伊藤: 神野先生が美術手帖の美術教育特集の中で、今の美術教育の現状を「断片化してしまっている」という言葉を使って表現されていましたが、その辺りについて少しお話伺えますでしょうか。

神野: 結局一番問題になるのは、最終的にアウトプットされた「作品」こそが重要だという根強い認識だと思います。こういうものが「絵画」である。こういうものが「いい絵」であるという価値観。出来上がったものに対する評価はあれど、創造のプロセスにおいて、個々人が表現をしようと思った動機や衝動、そしてそこから始まるプロセスに対する眼差しが抜け落ちているのではないかと思います。

木津: 私自身がそうだったように、自

分にしか描けない良い作品が描けるようになりたいという一心で生きていた人間が、きっかけがあって美術教育の世界に入った時に印象的だったことは、まず「美術教育」という言葉は文脈によって様々な意味に取れてしまうものだということです。STEAM教育一つとっても、この「A」が指すものの中身について「絵画」も「工芸」も「デザイン」もあまり区別されないまま話が進んでいってしまっているところに危機感を感じています。先ほどの断片化の話も、言葉の捉え方の面で整理すべきところも多いように思います。

水島: 確かに「A」に当たるアートの捉え方は千差万別ですね。日本の創造性教育について来週中国で講演しますが、主に日本の「造形遊び」について話して欲しいと言われています。海外でもレッジョエミリアの物を通じて考える実践や、MITのティンカリングなど、いわゆる手の思考が見直されてきている時代になってきた。イタリアは今、AI時代の到来も意識しつつ、手技も含めた科学とアートの繋がりについて真剣に考えているようなんですね。モンテッソーリ教育やムナーリのアプローチの中



に、自分の感覚を通じて主体的に世界を立ち上げていく力を育むポイントがあるのではないかと検討しているとのことです。

美術と他教科の連携のために 必要な共通認識とは

中村: 今の若い世代は、これまで言葉によって縦割りにされてきた考え方を軽々と超えて、もっと感覚的に面白いものに反応しているように思います。表現の実態がより自由になってきている中で、教える側の方法論も同じように様々な教科の先生と連携した授業の組み立て方が必要になってくる。先日の現場の先生方が集まったラウンドテーブルでもそうした取り組みが紹介されていましたが、教員養成の現場でもそういった視点の指導はあるのでしょうか。

幼児が対象の実践の場合は、そもそもが 教科の概念を超えた総合的な取り組みにな る印象がありますが、例えば中学校などで はどう実践するか、教科の縦割りや時間割 がある中で、現場レベルではかなり難易度 が高いとは思うのですが。そこを乗り越え ていく方法は何かないのでしょうか。

山成: 今回パネルでドイツにおける歴史とアートの授業の連携事例を出しました。 自分たちのルーツに関わるローマ時代の歴史の勉強に合わせて、当時の食器を模して作ってみたり、衣装を作ってみたり、建築の絵を描いてみたり、当時の言語を使って 漫画や演劇をするといった実践がありました。これは小学校6年生と中学2年生の実践でした。

中村: 日常は常に連続的で多層的なものなので、教科で整理できるものではないはずですよね。今ご紹介いただいた実践のように、多面的な授業内容があることはとても重要だと思いました。

神野: 連携すべき他教科の先生の理解を得るにあたって、アート的思考に対する共通理解を得る必要があると思っています。そうした議論のために使える汎用的な創造プロセスのモデルとして「WiCANサイクル」というモデルを、共同研究者である東北大学の縣氏と私で整理しました。観点としてはカントの認識論やデザイン思考、コーゼフ・ボイスの彫刻理論に始まり、ハンナ・アーレントの政治思想や学習科学的手法などを参考にしたものとなっています。

まず最初に「1:感じる」というステップがあります。日常に対する着眼点と言ってもいいのですが、様々な現象や状況について自分自身で見たり聞いたりし、ボトム



MER. MITALLEGISTER STATE (S. F. FRICANDOLL) DOLLAR

アップで感情的な気づきを得るということです。続いて「2:深める」「3:考える」という段階。これは他者と議論したり、リサーチをしていく中で新しい情報や観点を得ながら自分なりの考えを深めるプロセスです。その後「4:価値づける」というステップがあって、自分にとって大切な選択をここでします。

先ほどデザインとファインアートの違い について話がありましたが、私は基本的な 構造は同じだと思っています。つまり、ク ライアントという他者の視点に立って価値 づける場合もあれば、自分自身が注文主と なって取り組む創造活動もある。もっと言 えば、クライアントの要求にはないけども、 デザイナーの人たちが大切だと思うことを アウトプットに付加的に込めることもある はずです。なので基本は同じだと思います。 そしてその後に「5:構造化」つまりそれ を実際にどのように形に落とし込んでいく のか、専門教育はここをしっかり磨きます が、普通教育の範疇ではある程度のレベル で終えるべきかもしれません。その後実際 に手を動かしたり、口にしたりする「6: アクション | へと移っていく。このサイク ルを行きつ戻りつしていくプロセスが創造 的思考にはあると思います。

中村: このモデルはアート的思考のお話としてご紹介いただきましたが、それ以外の物事も基本的にはこうしたプロセスで進んでいるように思いませんか。あらゆる教科の先生たちとベーシックに共有できる考



え方なような気がしました。まさしくこう したことこそ制度的なものに組み込んでい けると良いのではないでしょうか。

現在、東京大学でもアートセンターの立ち上げがあり、すべての学問の中心に芸術を置くという価値観の提示が始まったところです。また東京藝大の先生が東京大学の教育学部の学生に絵画の実技を教える実践も始まっています。こうしたやり取りをさらに進めていく中で、日本の教育における芸術のあり方を再構築していくことができればと考えているところです。また、大切なのは声を上げていくことだと思います。政策を作っている省庁に対しても、このリサーチプロジェクトを通じて様々な提案をしていけたらと思います。

伊藤: ありがとうございます。様々な観点で議論がありましたが、授業の実践方法の話だけにとどまらず美術教育のあり方を考えることは、そのまま我々の次の社会のあり方を考えることにもつながっていくのだと感じました。今日はありがとうございました。

「特別寄稿]

「美術と教育 全国リサーチプロジェクト」 に寄せて

一美術専門と美術教育専門の間一

金子一夫



金子一夫

1950年生まれ。

茨城大学教育学部卒業。東京藝術大学大学院美術教育学専攻修了。博士(美術)(東京藝術大学)。現在:茨城大学名誉教授。明治美術学会会長。主著:『近代日本美術教育の研究明治時代』中央公論美術出版,1992.『同明治・大正時代』同,1999.『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』同,2003.編著:『美術教育の歴史から』学術研究出版,2019.

近代日本美術教育史の大きな論点の一つに、専門美術教育と普通美術教育との異同、あるいはその派生である美術専門と美術教育専門の対立意識がある。明治30年代までは、美術の専門教育と普通教育にレベルの差はあっても内容の差は意識されなかった。専門画家が図画教員であることに矛盾はなかった。しかし、明治30年代に普通美術教育内容を専門美術教育内容から分離する政策がとられた。そこから美術専門に対する美術教育専門という概念も発生した。

明治40年前後に美術教育専門家養 成機関として東京美術学校図画師範科、 東京高等師範学校図画手工専修科、東 京女子高等師範学校図画専修科もでき た。子弟の画家志望を許さない親も、 これら師範科入学だけは許した。それ ゆえ師範科の入試は高倍率となり、全 国各地から優秀生徒が入学した。同科 は三年課程の官費制であり、義務であ った中等学校図画教員就職も売り手市 場で、美術学校へ全国から同科卒業生 の紹介依頼が常にあった。

文献等には記されない、私が恩師世代に感じ見聞した微妙な感情を以下に述べる。例外も当然あると承知されたい。東京美術学校本科卒業生にとって師範科卒業生は、制度的に優遇された

面白くない存在であった。本科生は五 年間学んだのに三年間しか学ばない師 範科生は、学力優秀であっても実力が 劣ると見なして溜飲を下げた。本当は 画家志望であった師範科卒業生の多く は、本科卒業生のそのような視線に傷 つき、猛烈に制作に取り組んだ。これ が戦前の図画教育専門に対する美術専 門の差別の基本構図である。出自に関 係なく、画家になれない人が図画教員 になるのだという非生産的意識も発生 する。美術専門でも図画教育専門でも、 自らに自信があれば差別・被差別意識 はもたなくて済むはずだが、小室直樹* の言うように、階級の無い日本社会で は不安から自分の足元に境界線を引い て無数のナナメ階層を作り、自己のア イデンティティを保とうとしたのかも しれない。

また、先に挙げた東京高等師範学校 図画手工専修科卒業生も学力優秀であったが、東京美術学校図画師範科卒業 生からすると芸術家的気質が無いよう に感じられ、互いに牽制し合った。ただ 実際の教育現場においては、両科卒業 生が中等教員として図画教育の質を保 ち、各地の美術及び美術教育の中心的 存在となり、戦後も全国の教員養成大 学・学部で日本の美術教育を牽引した。

戦後についても文献資料等には記されにくい微妙な事実に関する私の見解

を記す。戦後も師範科卒業生が社会の 第一線にいて美術教育を牽引した。し かし、図画師範科や図画手工専修科卒 業生は、昭和50年代にすべて引退し てしまい、美術教育専門を担う集団の 輪郭が急速に曖昧になった。その前後 にあるべきであった師範科卒業生から 戦後の美術教育専門家である大学院美 術教育学専攻修了生への交代は円滑に できなかった。例えば先述の昭和50年 代から師範科卒業生が大量に退職して 全国の教員養成大学・学部で美術教育 専門教員の大量需要が発生した。その 時、惜しいことに東京藝術大学大学院 は方針を転換してその時流から撤退し た。美術教育専門内においてもナナメ 階層的分化が起こったように思われる。

平成も二十年代に入ると美術教育専門集団の輪郭はさらに見えにくくなった。かつて緊張と活力をもたらした東京美術学校卒業生と東京高等師範学校卒業生の競合対立は雲散霧消し、今や卒業大学・修了大学院といった出自を気にしている余裕はなく、全国の教員養成大学・学部と美術大学・学部は美術教員養成で協力せざるを得ない状況にある。全国の教員養成大学・学部はは教科専門教員(美術関係では言えば絵画、彫刻、デザイン、美学・美術史担当教員)の大量削減という危機まで加わっている。

東京藝術大学のこのプロジェクトは、 普通美術教育の危機は専門美術教育の 危機に直結すること、そして美術専門 大学として日本の美術教育全体に対す る社会的責任の自覚から始まったと思 われる。一人の天才が自然発生すれば よいとした美術学校時代の教育意識を 超えて、専門美術教育の自覚的実践研 究と蓄積の歴史は始まったばかりであ る。間接的に関与する普通美術教育に関 しての蓄積はなおさら少ないであろう。

専門美術教育資料は東京藝術大学学内に、普通美術教育資料は学外に相当の蓄積があるのだ。それらを基にした説得的な美術教育方法論は一朝一夕にはできないが、孤高性は大事にしながらも東京藝術大学が、ナナメ階層的意識をもつことなく、学外の美術教育実践家や理論家と自然に研究成果を積み重ねられれば、専門教育と普通教育を包括した、日本の美術教育研究の重要な一大拠点となろう。

*小室直樹『あなたも息子に殺される』(太 陽企画出版、1982年) 152-161頁。 小室 直樹(1932-2010) は、日本の社会学 者、評論家。学位は法学博士。東京工業大 学世界文明センター特任教授、現代政治研 究所所長などを歴任。



237 236

告示	昭和22年(1947)(試案)				
	小学校実施	中学校実施			
指導要領の 特徴・趣旨	- 教師のための手引き - 生活との密接な関連 - 生活経験に基づいた学習指導 - 社会科、家庭科、自由研究の新設				
小学校目標	はじめのことば (一部抜粋) 図画工作の指導をする者が心得ていなければならない最も大切なことは「図画工作の教育はなぜ必要か」ということである。 一 発表力の養成 二 技術力の基成 三 芸術心の啓培 四 具体的・実際的な活動性の助長 以上「図画工作の教育はなぜ必要か」について述べたのであるが、ここから、図画工作教育の目標が生まれ、その目標によって、教材が選ばれ、指導の方法が考究されるのである。 本書は、小学校と中学校とにおいて、図画工作の指導をする日常の指針としてつづったもので	(三) 新しい造形品を創作し構成する能力。 (四) 豊かな美的情操。 (五) 形や色に対する鋭敏な感覚。 (六) 自然美の理解。 二 家庭や学校で用いる有用なものや、美しいものを作る能力を養う (一) 家庭や学校で必要なものの設計・図案・装飾・製作の能力。 (二) 普通の工具・材料・設備を使いこなし、また、それを良好な状態に保持する能力。 (三) 環境の諸要素を最も有効に用いる能力。 (四) 創作能力。 (四) 創作能力。			
中学校目標	あるが、不備な点が多いばかりでなく、是正すべき箇所も少なくないと思う。同種の教材については、前後の学年の記述を比較対照するなどによって活用されるとともに、本書そのものを一つの研究資料として、改善に関する腹蔵のない意見を送られることを切望する。 - 自然や人工物を観察し、表現する能力を養う (一) 記憶や想像により、各種の描画材料または粘土その他の材料を使って、自然や人工物を表現する能力。 (二) 写生により、各種の描画材料または粘土その他の材料を使って、自然や人工物を表現する能力。	 (六) 有用なものや、美しいものを作る際に、手まめに働き、誠実に仕事をする態度。 (七) 有用なものや、美しいものを作る際に、ともに動き、ともに楽しむ態度。 三 実用品や芸術品を理解し鑑賞する能力を養う (一) 生活に必要な品物の実用価値や美的価値を理解し、また、品物相互の調和に注意し、適当に選択し、取りあわせる能力。 (二) 造形的な物品の賢明な使用者となる能力。 (三) 絵画・彫刻・建築等を鑑賞する能力。 (四) 豊かな美的情操。 			
図工・美術 の授業時数 (単位:時間) 小学校:45分 中学校:50分	小学校 1年:105 4年:70~105 2年:105 5年:70 3年:105 6年:70	中学校 1年 (7年): 70 2年 (8年): 70 3年 (9年): 70			

昭和26年(1951)(試案)

小学校実施 中学校実施

教科を4つの経験領域に分ける

- 学習の基礎となる教科(国語科、算数科)
- 社会や自然についての問題解決を図る教科(社会科、理科)
- 主として創造的な表現活動を行う教科(音楽科、図画工作科、家庭科)
- 健康の保持増進を図る教科(体育科)
- (1)個人完成への助けとして
- a 絵や図をかいたり、意匠を創案したり、物を作 a 造形的な創造活動、造形品の正しい選択能力、造 ったりするような造形的創造活動を通して、生 活経験を豊富にし、自己の興味・適性・能力な どをできるだけ発達させる。
- b 実用品や美術品の価値を判断する初歩的な能力 を発達させる。
- c 造形品を有効に使用することに対する関心を高め、 c 造形的な創造活動、造形品の選択能力、造形品の 初歩的な技能を発達させる。

- (2) 社会人および公民としての完成への助けとして
- 形品の使用能力などを、家庭生活のために役立て ることの興味を高め、技能を発達させる。
- b 造形的な創造活動、造形品の選択能力、造形品の 使用能力などを、学校生活のために役立てること の興味を高め、技能を発達させる。
- 使用能力などを、社会生活の改善、美化に役立て るための関心を高め、いくらかの技能を養う。
- d 人間の造形活動の文化的価値と経済的価値につい ての、初歩的な理解を得させる。
- e 美的情操を深め、社会生活に必要な好ましい態度 や習慣を養う。
- 1) 絵や図をかいたり、意匠を創案したり、物を作 1) 創造的な表現力を、社会生活に活用する技能を発 ったりする創造活動を通して生徒の興味・適性・ 能力をできるだけ発展させる。
- 2) 日常生活を営むに必要な、造形品の実用価値や 美的価値を判断し、有効なものを選択する能力 3) 造形の用具材料および造形品の使用を通して公 を発展させること。
- 3) 造形品を有効に使用する技能を発展させる。
- 4) 美術品および自然のよさを鑑賞する能力を発展 させる。
- 5) 前の各項と関連して、余暇を有効に過ごすため の多くの興味や技能を発展させる。

- 1 生徒を個人としてできるだけ完成する助けとして 2 生徒を社会人および公民としての完成の助けとして

 - 2) 人間の造形活動の意味を理解し、その価値を理解 する能力を発展する。
 - 民として必要な態度を発達させる。
 - 4) 生徒の職業的な興味・適性・技能と、経済的生活 の能力を発展させる助けとする。

小学校		中学校		
1年:65~87	4年:72~97	1年(7年): 70~105		
2年:65~87	5年:70~87	2年(8年): 70~105		
3年:72~97	6年:70~87	3年(9年):70~105		

				第2次		第3次	
告示	昭和33年(1958)	~ 35年(1960)		昭和43年(1968) ~ 45年(1970)		昭和52年(1977) ~ 43年(1978)	
	小学校実施	中学校実施	1	小学校実施	中学校実施	小学校実施	中学校実施
	昭和37年(1962)	昭和37年(1962)	-	昭和46年(1971)	昭和47年(1972)	昭和55年(1980)	昭和56年(1981)
指導要領の 特徴・趣旨	教育課程の基準としての性格の明確化 - 道徳の時間の新設 - 系統的な学習を重視 - 基礎学力の充実 - 科学技術教育の向上等			教育内容の一層の向上(「教 - 時代の進展に対応した教 る集合の導入等)		ゆとりある充実した学 担の適正化 - 各教科の目標、内容?	・ 校生活の実現=学習負 を中核的事項にしぼる
小学校 目標	 絵をかいたり物を作ったりする造形的な欲求や興味を満足させ、情緒の安定を図る。 造形活動を通して、造形感覚を発達させ、創造的表現の能力を伸ばす。 造形的な表現や鑑賞を通して、美的情操を養う。 造形的な表現を通して、技術を尊重する態度や、実践的な態度を養う。 造形活動を通して、造形能力を生活に生かす態度を養う。 	上に掲げた図画工作科の目標は、相互に密接な関連をもつものであるが、目標1は、図画工作科における指導の出発点となりまたその基底となるものである。したがって、各学年における具体的な学習が、主として目標2、および4のいずれにかかる場合においても、図画工作科の特性上、常にその指導の根底には、目標1が考慮されなければならない。目標2、3および4は、それぞれ創造的表現力、美的情操および造形活動における実践的態度について、その目標を掲げたものであるが、各学年における具体的な学習においては、これらのねらいが有機的に結びつけられるとともに、目標5との関連が考慮されなければならない。		造形活動を通して、美的情操を養うとともに、創造的表現の能力をのばし、技術を尊重し、造形能力を生活に生かす態度を育てる。 このため 1 色や形の構成を考えて表現し鑑賞することにより、造形的な美の感覚の発達を図る。 2 絵であらわす、彫塑であらわす、デザインをする、工作をする、鑑賞することにより、造形的に見る力や構想する力をのばす。 3 造形活動に必要な初歩的な技法を理解させるとともに、造形的に表規する技能を育てる。		表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な創造 活動の基礎を培うとともに、表現の喜びを味 わわせ、豊かな情操を養う。	
中学校目標	1 絵画や彫塑などの表現や鑑賞を通して、美			美術の表現と鑑賞の能力を高め、情操を豊かにするとともに、創造活動の基礎的な能力を養う。 このため 1 絵画および彫塑の表現を通して、美的直感力や想像力を育て、率直に表す能力や態度を養い、自己表現の喜びを味わわせる。 2 デザインおよび工芸の計画や製(制)作を通して、用途に伴う条件をもとに構想を練り、美的にまとめる能力や態度を養い、製(制)作する喜びを味わわせる。 3 美術の鑑賞を通して、自然や造形作品に対する審美性を豊かにし、美術文化を愛好する態度を育てる。 4 美術の表現や鑑賞を通して、美術的な能力を生活に生かす態度や習慣を育てる。		表現及び鑑賞の能力を伸ばし、造形的な創造 活動の喜びを味わわせるとともに、美術を愛 好する心情を育て、豊かな情操を養う。	
図エ・美術	小学校	中学校	-	小学校	中学校	小学校	中学校
の授業時数 (単位:時間)	1年:102 4年:70	1年:70	1	1年:102 4年:70	1年:70	1年:68 4年:70	1年:70
小学校:45分 中学校:50分	2年:70 5年:70	2年:35		2年:70 5年:70	2年:70	2年:70 5年:70	2年:70
サチ収・コリガ	3年:70 6年:70	3年:35		3年:70 6年:70	3年:35	3年:70 6年:70	3年:35

241

来場者数および、掲載媒体

展覧会 総来場者数:累計 4,418人(一日平均 232人)

掲載媒体:月刊「教育美術」10月号/公益財団法人 教育美術振興会 HP/ReseMom Global edu/FineNews Today/チェッカーズ!/Chu-Kans/ValuePress! VFリリース/クイックオーダー/Daily News Online/Twitnews(ツイットニュース) リファイドニュース/NEWS CAFE/ORICON NEWS/NEWS Collect Amebaニュース/遊びに行こうぜ!/パロパロ/満点笑/Level High! オモーション/イベニュー/G-Renda/大人の社会見学ニュース/ベスト&ワースト日刊!目のニュース/チャリティニュース/マピオン/Snacks!

展覧会

幼稚園から大学まで美術教育の流れを体感する展覧会 美術と教育 全国リサーチプロジェクト 2019 「こんな授業を受けてみたい!」

会場 | 東京藝術大学大学美術館本館地下2階展示室1,2 会期 | 2019年10月14日(月)-11月4日(月・祝)

主催 | 東京藝術大学美術学部 後援 | 文化庁 協力 | 東京藝大美術学部杜の会、岐阜県美術館 特別協賛 | 三菱地所

企画監修 | 日比野克彦 東京藝術大学美術学部長 ディレクター | 中村政人 東京藝術大学美術学部 教授

学内担当者 | 東京藝術大学美術学部教授 木津文哉 東京藝術大学美術学部教授 藤崎圭一郎 東京藝術大学美術学部特任准教授 伊藤達矢

事務局長|渡辺龍彦

事務局スタッフ | 山本玲央、三塚貴仁、福島恵子 運営サポート | 美術学部絵画科油画教員室のみなさま 広報物・展示パネルデザイン | 内山耀一朗 WEB サイトデザイン・運用 | 竹内亜弥 施工計画・展示デザイン | 栗原良彰

報告書

¥仅

発行 | 美術と教育 全国リサーチプロジェクト事務局編集監修 | 藤崎圭一郎編集ディレクション | 渡辺龍彦編集スタッフ | 山本玲央、三塚貴仁、福島恵子デザイン | 内山耀一朗会場スチール撮影 | 長谷川銀印刷 | シナノ印刷

美術と教育 全国リサーチプロジェクト事務局 http://research-project.geidai.ac.jp/ E-mail: ae-researchprojectml.geidai.ac.jp 2020年3月11日発行

© 美術と教育 全国リサーチプロジェクト 本書の無断での複製・複写転載を禁じます。 Printed in Japan